

---

# 白銀の生き様

琉叶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白銀の生き様

### 【Nコード】

N3839Y

### 【作者名】

琉叶

### 【あらすじ】

坂田銀時という名の一人の男。

この男が生きるは修羅の道。

ひよんなことからそんな坂田銀時の記憶世界に入り込んでしまう神

楽・新八・近藤・土方・沖田・山崎。

今までの銀時の全てを知ってしまう。

さらにこの世界では思考や感情まで共有してしまっ……

予定では第三章に分かれています。

銀時様の子供の頃を書いた章。

そして次に青年・攘夷の章。

最後には今までの振り返り（真選組が銀時の考え方や紅桜篇の真相などを知る）章。

ブログ的なあれのつもりだけど多分分らないと思う・・・（前書き）

銀魂が好きで好きで好きで！

特に銀時様はもうすばらしすぎる！

てなこと、銀時様の話しを書きたいな〜てことで書き始めちゃいました小説！

駄文で大変読みにくいとは思いますが、これからよろしく願います

最低でも一ヶ月中には必ず登校しようと思います。

っあ、違った、投稿したいと思います。

プログラグ的なあれのつもりだけど多分分らないと思う・・・

歌舞伎町のある一角で、大きな声を張り上げベルを鳴らしている男がいた。

チリ  
ンチリ  
ン

「出ました特賞！特賞はなんと、温泉旅行無料券！」

そのくじ引きで特賞を引いたであろう赤い中華服に身を包んだ少女は言った。

「マジでか!？」

そして続く男の声にさらにテンションを上げる。

「オマケで酢昆布百枚贈呈」

その一言を聞き絶えず上下する赤い服。

よほど嬉しかったのだろう、「キャッホーイ!」とよく意味が解らない喜び方をしている。

しばらくして落ち着いたのが、その少女は温泉旅行のチケットと大量の酢昆布を受け取り、ダッシュでその場を去って行った。

そして後に残されたのは、大量の砂埃とそのあまりの勢いに驚いている男だった。

バタンッ

大きな音と共に開けはなれた扉。

ドタドタドタ

扉が開いたと思いきや廊下に鳴り響く足音。

その足音に向かって、この家の主である銀時は声をかける。



「おーいつるせーぞ。銀さん今起きたばかりなの、だからもつちよ  
い静かにしろー」

そう言いながらパジャマ姿で居間に出てくる。

「そんな事言っでいられるのも今のうちネー！」

いつものごとく昼過ぎに起きた銀時に言い返すのは、  
この万事屋銀ちゃん働いている従業員の一人神楽である。

銀時はそんな神楽の言葉にめんどくさそうに頭をかきながらも質問を投げかける。

「今のうちでびびるいう事だ？」

その質問を待ってましたとばかりに神楽は腕を掲げる。

そして、神楽が掲げた腕の先には・・・

「温泉旅行無料券四名様行きの手ケットネ！  
さつき商店街のくじ引きで当てたヨ！」

そのチケットを見た瞬間銀時の態度は一変した。

「温泉！？」

いつの間にか万事屋に来ていた新八の声とダブル銀時。そして神楽に

「よくやった神楽！銀さんお前はやれば出来る子だって信じてたぞ！」

などという事を言った。

そして新八も、神楽にお褒めの言葉をかける。

「すごいよ神楽ちゃん！今すぐ行きましょよ。姉上も誘って四人で！」

そんな二人の喜びようは正直引くほどすごかった。

だが、二人の言葉に調子をよくした神楽はこんな事を言う。

「全部私のお蔭ネ！」

だからこれからは私の事を歌舞伎町の女王兼、工場長と呼ぶヨロシ！

やっぱりお前等には私が付いてないとダメアルなあ」

腕を自分の胸の辺りで組みながら首を縦に振っては「うんうん」という神楽。

だがそんな神楽の言葉を聞いている者はこの場に誰一人として存在していない。

「うし、今すぐ行くぞ新八。旅行の用意しろ、用意！  
後おやつは三百円までな！」

「銀さん、温泉は遠足じゃありませんよ、まあそれは良いとして。  
僕一旦旅行の用意をしに家に戻りますね。姉上にも温泉の事伝え  
ておきますー！」

「おうっ！早くしないとおいでくぞー」

そんなやり取りを神楽は目を見開きながら見ている。体が小刻みに揺れている。

そして、軽く無視をされる形をとってしまった神楽はその場でキレる。



「人の話はちゃんと聞くネ！」

結局、この日は温泉に行く事は出来なかった。え、何故<sup>なぜ</sup>嘗<sup>かつ</sup>て？

それは当然・・・

「大体いつも銀ちゃんは・・・」

とまあ、こういった具合に、この日は永遠と神楽に説教・・・とい  
うか文句？

いやいや、愚痴ぐちを・・・そう愚痴ぐちだ！愚痴ぐちを言われていたという訳  
です。

オマケ？

妙「温泉に行けるなんてホント久し振り。前に行ったのは何時だったかしら？」

銀「……………（ブルブルブル）」

神「？銀ちゃんなんで震えてるアルか？」

新「きつと前温泉に行った時の事を思い出してるんだよ。ほら、幽・  
……………」

銀「幽霊じゃねー、スタンドだっ！」

プログラグ的なあれのつもりだけど多分分らないと思う・・・（後書き）

「銀ちゃん銀ちゃん！」

「なんだ？」

「これ書いてる作者、受験生だったのに毎日毎日八時間以上アニメみて本見て、睡眠時間二時間ほどで、大丈夫アルか？」

「いや、無理だろ」

「ですねWって・・・笑い事じゃねえーだろおおおお！！！」

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている(前書き)

なんか前の読んで思ったけど・・・

私ニートじゃないよ!?

投稿って漢字打ち間違えちゃっただけなのになんと見事なニート発

言・・・

って思わず感心しちゃったよ!

ああ、この前放送してた銀魂のデスクアンサー編の見事なまでの勘違い文、銀時様凄過ぎますよ・・・

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている

白く立ち上る湯煙。ここは温泉。

その見るからに温かそうな温泉に、肩までしっかり浸かって体を温めているのは、銀時と本体を脱衣所に置いてきた眼鏡掛け機（新八）。

「・・・」

少しの間だけ静寂がその場を支配する。

そして！



「ちょっと待てー！何で僕の眼鏡が本体で僕がただの眼鏡掛け機なんですか！・・・」

誰だか知らないけど、いい加減なことは言わずにちゃんとナレーションしてくださいよー！」

盛大なツッコミを入れるメガネ（新八）。何処とも付かない方向を向き、声を張り上げている。

「周りの人に迷惑がかかると思うことが分からないのだろうか」と、疑問を抱いてしまう。

ちなみに・・・

「今ナレーションをしているのはこの銀魂の主人公であるこの私、  
坂田銀・・・いでっ！」

銀時の自己紹介を見事にぶち壊す新八。

「お前かいいいいいいいいいい！！」

大きく頭をぶたれた銀時は新人を見て言う。

「痛ってーなあ。何すんだよぱっつあん。暴力はいけませんってお前習わなかったのか？」

「何ってお前が何しとんじやいー！」

その新八のツツコミに頭をさすりながらも、何事もなかったかのよう  
うに返す銀時。

「何ってあれだよ？ほら、自己紹介、てか他人紹介的な？」

そう言いながら人差指を体の前で立てる。

ボキッ！

銀時の人差し指がそんな効果音を上げる。

「……………痛つてえー！」

数秒後銀時は悲鳴を上げた。

傍はたからそんな銀時の様子を見ていれば、先ほどの地味な攻撃がいかに痛かったかが分かる。

銀時の指を再起不能にした後、新八は静かに言う。

「いい加減にしてください」

それを聞いた銀時は、やや涙目になっているその目を新八に向け、大きな声でその言葉をシャウトした。

「いい加減にするのはオメエーだよ！  
たく、どうすんのこれどうすんの？

銀さんの指があらぬ方向向いちゃってるよ？  
もう逝っちゃってるよこの子！もう生死の境目ウロウロしちゃってるよ！」



そんな銀時の言葉を軽く受け流す新八。

だが、聞き流しながらゆっくり目を開いた新八の目の先に映っていたのは、新八達の良く知る人物の後姿だった。

その人物の取ろうとしている行動を推理した新八は、固まってしま  
う。

その様子を見て不審に思った銀時は、新八と同じ方向を見てみる。

そして、新はちがなぜ固まってしまっていたのかを理解する。

だが、それを信じたくない銀時は軽く新八にボケながら問うた。

「新八君、ここってあれ？動物と一緒に入れる温泉とかだっけ？」

そんな銀時の言葉を軽く否定する新八。

「いえ、ここは人間専用の筈ですよ、銀さん」

そんな事を言っている二人の視線の先にいたのは、たった今！  
女湯を覗こうとしているゴリラこと真選組局長、近藤勲だった。

銀時と新八にその姿を見られていることに全く気づいていない近藤。

「お妙さん待っててくださいー！この近藤勲、いつ何時なにかどこであるかと、お妙さんを警・・・」

「警護」と言いかけていた近藤だったが、空から降ってきた巨大な岩によってその言葉は遮られてしまった。

バツシャーン！

大きな音と共に水飛沫を上げる温泉。



そんな光景をずっと遠目で傍観していた銀時たち。

「銀さん。どっしりまじょっし」

新八に言われた銀時は、頭をかきながら仕方なしに声を上げた。

「多串君いる？お宅の局長さんストーカー行為オマケに覗き行為のぞを働いてそこで伸びちゃってるよ」

そこまで言い終えた銀時に、岩陰に隠れてその姿が見えなかった人物から素早くツツコミが入る。



「誰が多串だー！」

ツツコミを入れたのは皆さんお馴染み真選組副長、土方十四郎。

そしてその後から続いて出てきたのは同じく真選組、一番隊隊長沖田総悟。

「旦那、ここ出会うなんて奇遇ですねィ？」

「あれ？万屋の旦那。旦那もこの温泉旅館に来てたんですか？」

さらにその沖田の後ろから出てきたのは、これまた真選組の隊員山崎退だった。

「そう、皆さんジミリーとしてお馴染みの山崎である。」

またしても勝手なナレーションを入れる銀時。

「ちょ、旦那！何勝手に変なナレーションしてんですか！？  
それとジミーって何！？それはやっぱり地味から来てるのかあ！  
？」

そんな銀時の勝手なナレーションにツツコミを入れる山崎。

その山崎のツッコミに対しての銀時の受け答えは

「イエス！ジャストウーイットウ！」

「いや意味わかんないからそれ！」

突っ込みの連続で疲れたのか、山崎は肩を上下させながら息をする。

そんな山崎の事を軽くスルーし、土方・沖田に喧嘩を売るような言葉  
葉を投げかける銀時。

「それにしてもなんでこんなところに真選組がいんだよ。」

チンピラ警察二十四時ですかコノヤロー。仕事はどうした？」

喧嘩けんかを売っていながらも、どうでもよさそうな態度で言う。

「ああ、近藤さんが昨日いきなり真撰組慰安旅行に行かないかって言ってきたな。」

他の奴等は全員都合が付かなかったが、近藤さんからのせっかくの誘いだ、断るわけにも行かねえ」

鼻をほじくりながらしゃっぱりどつでもいいやという態度をとる銀時。

万事屋一行と真選組一行は、それからしばらくの間は静かに温泉に浸かっていた。

近藤も時間がたって意識を取り戻し、今度は大人しく温泉に浸かっている。

後で聞いた話だが、ゴリラストーカーはなんでも、お妙が温泉旅行に行くとき聞いて付いてきたそうだ。

土方達にとっては、甚だ迷惑な話だ。

しばらくの間は皆、静かに温泉に浸かっていた。

だがいつの間にか銀時の姿がこの場からなくなっている事に気づいた近藤が、新八に声をかける。

「新八君、万事屋はどうした、もう出たのか？」

その質問に「ああその事なら」と言つたように答える新八。

「銀さんなら露天風呂の方に行きましたよ。」

あと、温まったら適当に出るとも言つてましたよ。

随分前にここから出ていったのでもう温泉から出てるかもしれませんね」



近藤と新八が銀時のことについて話している事に気づいた土方は、ふらっとその会話に参加してきた。

「万事屋がどうかしたのか」

「いや、万事屋が露天風呂に浸かりに行ったと言っような事を話していたんだ。

さっきから姿が見えないようだからどうしたものかと思えば、そ

「ういじり事かじり」

そんな近藤の言葉にいち早く言葉を返したのは沖田だった。

「旦那一人で露天風呂独占なんてスミにおけねーですぜい。  
近藤さん俺達もその露天風呂行ってみやしょーぜい」

沖田の提案に乗る近藤。

「それもそうだな、総悟の言うとおりだ。温泉は一人ではいるより大勢で入った方が楽しいからな」

そう言いながら真撰組＋新八は、銀時が先に浸かりに行った露天風呂に行った。

山崎は一人置いて行かれそうになったが、その事実気づいた山崎は慌てて皆の後を追った。

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている（後書き）

「なんか俺、前書きの部分ですごいって褒められてんだけど。これって良い事だよな？」

「とらえようによっちゃあそうですね」

「確かにあれは放送コードぎりぎりだったアルナ！」

「え？何が？銀さんなんかテレビで危ない事した？」

「はい。あれは見事なまでの卑猥メールになってましたよ。

銀さん携帯の使い方には気をつけてくださいね^^」

「神楽ちゃん？」

何か新八君の後ろに黒いオーラみたいなのが見えるんだけど・・・  
気のせいだよな？」

「さあ？」

「……………（ダラダラダラ）」

噂によるとこの後しばらくの間は携帯も見たくないっ  
と銀時様は言  
い張っていたそうです。

人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつける！（前書き）

何個かストックしてあるため早く感想が見たくて、てか聞きたく今日の今日でまた投稿しちゃいました・・・

これじゃあストックがあつという間になくなるよ（涙）

人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつける！

【巻き戻りの湯】（露天風呂）

さっきいた温泉とは違う効果を持った別の温泉（露天風呂）に場所は変わる。

「万事屋のヤローはいねえーみたいだな」



そう言いながら辺りを見渡す土方。

「もう出てしまったんだろっ」

近藤も土方と同じように辺りを見渡しながら言う。やはり銀時の姿はここにはない。

近藤の言うとおりもう温泉から出てしまったんだろう。

新八も土方・近藤と同じように銀時を探すため辺りを見渡していたが、銀時の姿はどこにも見当たらない。

（もう出てしまったんだな）と新八は考えた。

だがふと、ある異変に気がつく。

「あれ？なんだかこの温泉、湯煙がやけに多すぎませんか？・・・ていうか、どんどん辺りが見えなくなっていつてるんですけど！？」

新八がそう言う間も、どんどん湯煙は立ち込めていく。もうじき前が真っ白になって見えなくなりそうだ。

「何だか知らねーがこれはやばいぜ。皆早くこの湯から出る！」

土方がそう言ったものの、少しだけ言うのが遅くれた、なぜならすでに、あたりは白いモヤで覆われていたからだ。

??????

しばらくの間、その場の様子を見るため、誰一人としてそこを動こうとしなかった。

ほんの数分後、白いモヤは綺麗さっぱりなくなった。

その代わりに、目の前に広がっていた光景は、先ほどいた場所（温泉）とは全く違ったものだった。

村を歩きかう人々

その中を歩きかう男達の腰には刀

村は静かだが、確かな賑わいを見せている。

「……」

間抜けな声を上げた新八のあとに続いて口を開く近藤。

「どつなつてんだこりゃー？何で俺達はこんな所にいるんだ。トシ、説明してくれ」

その無茶振りに、静かにツッコミを入れる土方。

「俺に聞かないでくれ近藤さん」

「確か俺達は温泉にいた筈ですよねィ？」

沖田が「おっかしーな」という表情をしながら言う。

「確かに温泉にいた筈なのになんで！？  
てかなんで俺達服着てるんですか？」

混乱する新八・近藤・土方・沖田・山崎。

だがそれは当然の事である。

理由は簡単、いきなり知らないところに移動した上に、

温泉にいたはずなのに服までなぜかきちんと着こんでいたからである。

そんな彼らの混乱を不思議に思った少女の影。

「うるさいネ！」

お前らはあれですか？

ちゃんとロボットの説明を見ないで遊んで壊してオロオロしちゃつてる可哀そうな子供ですか？」



そう、神楽だ。意味のよく分からない例えをする神楽に対し、混乱する頭で質問をする新八。

「か、神楽ちゃん！何でここに？ていうか意味解んないよ今の例え・  
・・」

もちろんツツコミは忘れない。

それを聞き不思議そうな顔をする神楽。

「お前ら本当に【巻き戻りの湯】の効能見なかったアルか？」

その一言を聞きいた瞬間、そこにいた神楽以外の全員が口を「は」の字にさせた。

それを見た神楽は「全く仕方ない奴等ネ・・・」と、ため息混じりにその【巻き戻りの湯】とやらの効能を教えた。

神楽の話は要領を得ないが、その話を理解しようと皆が神楽の話に聞き入った。

説明終了

「つまり、その【巻き戻りの湯】って温泉に入ったら、

一度目に入った人の記憶を吸収して、二度目に入った人達にその温泉に吸収された記憶を見せる効能があると・・・そういう事？」

神楽は「そうネ！」と言いながらさらに付け加えを入れた。

「もっと言わせれば一度目に入る奴、つまり記憶を吸収される奴は一人で入った奴限定。

そいつの記憶を見る二度目に入る奴等もその記憶の持ち主と何らかの縁を持った奴に限るそうネ！

あつ、あとここにいる間はその記憶の持ち主の感情や気持ちを共有する事になるって説明書には書いてあったヨ！

ちなみここでの時間の流れは現実の何万分の一とかも書いていた  
ような気がするアル！」

一同はそれを聞きここは何処なのか理解した。

そう、つまりここは坂田銀時という人間の過去なのだ。だがしばらくして近藤が一つの疑問を投げかけた。

「じゃあなぜ俺達はこうして一緒に話したりできるんだ？  
俺達は万事屋の記憶を見ているだけなんだろう」

その近藤の言葉を即座に返す神楽。

「それは当然ネ！何せここは銀ちゃんの世界、ん？記憶世界？  
の中のようなものネ！」

だから皆一緒にその世界に入り込んだ事になるアル。だから皆と  
会話が出来るネ」

自慢げに語る神楽。

最後に「納得したか？ゴリラ」と確認を取る。

「なるほど、そういう事か……って俺ゴリラじゃないからね！  
」？

納得したと言った後、ゴリラと言われた事に対してツッコミを入れる近藤。

そのツッコミを無視してさらにこつ続ける神楽。

「後こは夢の中みたいなものアル。だから何でも想像すれば出てくるはずアル！」

そう言った後、酢昆布を己の手に出してみようとすする神楽。

結果・・・ポンツという効果音を立ててその手には酢昆布が現れた。

それを見て土方はマヨネーズとタバコを出した。



「ホントに出た！？てか土方さん、銀さんの過去まで来てそんな物を出しますか・・・」

新八は呆れながら言った。が、当の本人には聞こえていない様だ。

今までの神楽の説明で、全ての事を理解・納得した新八・神楽・近藤・土方・沖田・山崎。

そう、ここは神楽の言うとおり、想像した物は何でも出て来る。

が、お腹が空いたり眠くなったりする事はない！は答・・・

そして今日の前にいる銀時の過去の住人には、自分達の姿が見えない、そして声も聞こえてはいない。

それは考えれば分かる事だ。

なぜならここは、銀時の過去の記憶であり、もう既に起こった事実なのだから。

そして新八達はただその映像を見ているだけ……

そこまで理解した新八達。

だが、大事な事を忘れていた事に気づいた土方。

「……おい、肝心のヤローはいつ現れるんだ？」

それを言われた一同は「そういえば・・・」と言う顔をする。

「そうねネ！肝心の銀ちゃんがいないネ」

「確かに土方さんの言う通りですア。旦那はまだ俺達の前に出て来てやせんねえ」

ちょうどそんなことを言っている時、新八達がいるすぐ隣の寂れた家から、大きな怒鳴り声が聞こえた。

「この鬼っ子が、もうここからいざ、この村から出て行けー！」

それと同時に頭に響く声。

）……出て行け……って、そんな事……（

その声の主がこの世界の中心人物であることを理解した新八達は、声の聞こえた家に入ろうとする。

だが家の扉に触る事が出来なかった。

新八達はしかたなく、幽霊みたいにその扉をくぐった。

その家に入ると同時に、今までの、今に至るまでの銀時の記憶が流れ込んできた。

ある小さな家で、髪の色と瞳の色が異様な子供が生まれた。

その子の母親はその子供を初めて見たときは驚いた。

だが自分の子供である事に変わりはないので、その子をとっても可愛がった。

しかし、その母親はその子を産んだ為、床に伏すことになってしまった。

そしてその二年後の今日、病で他界してしまった。

一方その子の父親は、その子の母親とは反対に、その異様な見かけに恐れを抱き、その子供を鬼っ子と言っては拒絶した。

もちろんその子の母親、その男の「妻」の前ではそんな素振りは見せなかった。

だが村人も、その男と同じようにその子供の姿を見て恐れを抱き、「鬼っ子」と言ってはその子供の存在を否定していた。

妻の前ではその鬼っ子に優しくする素振りを見せていた男も、その事にだんだん嫌気がさしていた。



そんな時に「妻」が他界。

鬼っ子と言って拒絶する事をその男に躊躇わせていた「妻」という存在がいなくなった……

その記憶を走馬灯のような形で見た新八達。

そして今、新八達の目の前には床に安らかに横たわる女の骸と、傍で微かに涙を浮かべている幼子……

いや、新八達がよく知る人物の幼き姿があった。

そう、我等のよく知る銀髪、そしてその両の目は赤色という特徴。間違いなくその幼子は銀時だ。

「鬼っ子！お前なんか消えてしまえ！」

母親の死に涙を流していた幼子（銀時）に、蹴りを入れて「妻」からその幼子を引き離そうとする男。

お腹に蹴りを入れられた三歳にも満たないその小さな体は簡単に弾け飛ぶ。

「・・・ッ!？」

壁に大きな音を立てながらぶつかると。

思いっきりお腹に蹴りを入れられた時に、頭の奥の方で声が聞こえた新八。

(なんで、父さんは・・・)

その声は今日の前で蹴り飛ばされた幼子のものだとすぐに理解する。

84

その声は新八だけではない、神楽や近藤、土方や沖田、山崎にも聞こえた。

男は一回蹴っただけでは気がすまなかったのだろう、壁にぶつかって呻いていた幼子の体を持ち上げると、その体に己の拳を入れる。

「ウツ・・・ゲハッ！」

殴られるたびに顔を苦痛に歪ませる銀時。

十発ほど殴った男は、急にその手を離した。

その幼子はとっさの事で反応が出来ず、もろに体を地面に打ち付ける。

「ケホツケホツ」

打ち付けられたと同時に首に手を当て大きく咳き込む幼子。

その手を離れた男は、そんな幼子に背を向け、壁に立てかけてあった刀のところまで行き、その刀を手に握った。

その様子を見ていた新八達は、その男が刀を握ったところで「まさかっ!？」と言う顔をした。

そして、その男の後姿を見ていた幼子の考えも頭に流れ込んできた。



・  
・  
・  
怖  
い

(  
殺  
ち  
ね  
る  
・  
・  
・  
)

・  
・  
・  
い  
や  
だ

そんな考えと共に、恐怖が頭の中を支配した。

幼子を見れば恐怖で顔が歪んでいる。

幼子は走り出した。

刀を持ってこちらに歩みを進めようとする男から。

家を出る瞬間、幼子は一つだけ亡き母に詫びを入れた。

( 甲ってあげれなくてじめん・・・ )

・・・じめんね。何にもしてあげられなくて・・・

そして感謝の言葉を続けた。

（・・・こんな俺を、愛してくれてありがとう・・・）

そんな幼子の心の声を聞き、新八達は銀時に対して大きな罪悪感を抱いた。

家の扉を勢い良く開けて外に出た幼子。

だが家の外には、目頭めくしらを立てて銀時を睨む村の衆がいた。

おそらく先ほどの怒鳴り声で集まってきたのだろう。

元々その幼子の事を恐れていた村人は、その幼子の姿を見ると同時に口を開いた。

「この村から出て行け！」

「鬼っ子！出て行け！」

「鬼っ子！」

「村から出て行け！」

次々とそんな言葉が村人から出てくる。

(ツ鬼・・・やっぱり、俺?)

そう思うと胸の辺りから何かがかこみ上げてくるような感覚に襲われた。



そう、それは涙。

だが感傷に浸っている場合ではない。

幼子はそんな村人から逃げるように背を向けて走り出した。

それでも出て行けと言ったくせに、ただでは行かせないと言わんばかりに村人の一人が背を向けて逃げ出す幼子に小石を投げつける。

その小石は外れたが、それを皮切りに大量の小石が幼子に向かって飛んでいく。

走りながらも深い深い悲しみに囚われていく幼子。

(俺は、存在しているだけで駄目なの?)

そんな思いがあふれ出し、その赤い瞳からは先程一生懸命我慢をしていた涙が頬を伝い流れていった。

村の出口に向かってひたすら走っていた幼子は

「あっ!?!?」

と言いつ転倒した。

村人が投げてくる石がその幼子の足に当たったのだ。

だがそんな事を気にも留めず、直ぐさま立ち上がりまた走り出す。

村から出る頃には体はすっかりボロボロになり、その足取りも重くなっていた。

後ろを振り返ってみたが後を追ってくるものはいない。

その幼子安堵のため息を吐きながらその生まれ育った村を後にした。

最後に一言を残して

「母さん・・・お母さん」



人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつける！（後書き）

「おい作者！」

・・・はい

「お前昨日模試合ってたんだろ？」

・・・はい

「どうだったんだ？」

・・・

「ダメだったのか」

・・・はい・・・



人の物を勝手に盗んではいけません！ってそれ当然の事だよね（前書き）

今日プロット沢山出来ました！

ああ良かった！！

後は話を書いて行くだけ

・・・て、それが一番の問題なんじゃろーがあああああ！……！

人の物を勝手に盗んではいけません！ってそれ当然の事だよね

結局その幼子が村から出るころには体に幾つもの傷が出来ていた。

「……痛い」

身体をさすりながらボソリと呟き、何処とも付かない方角を目指して歩き出す。

片足は少し引き摺っている。引き摺っていつているその足には、大きな痣が見えている。

どれだけの間歩あいたき続けたのだろう。

村を出るときは夕日で真っ赤に染まっていた大地も、今ではもう暗闇に染まっている。

月明かりが無ければ歩く事が出来ないくらいにあたりは暗くて良く見えない真っ闇だ。

幼子はそんな暗闇の中をひたすら歩き続ける。

そんな姿を少し離れたところから見ている六人。

「銀ちゃん、身体がボロボロアルよ・・・」

その幼子の体を心配して言う神楽。

「いつまで歩き続けるんでしょう・・・少しは身体を休めた方が・・・」

新八も神楽と同じように、その後姿を心配そうに見つめながら言う。

「万事屋のヤロー、良くもまああんなボロボロの体で歩き続けられるものだ」

近藤もそんな二人と同じ様にその幼子のことを心配している様子で言う。

だがそんな三人の本当の心内は、その幼子の過去にただただ深い悲しみを覚えていた。

(万事屋(旦那)・・・)

そして、他の三人にも同じ事が言えた・・・

この時はまだ、誰一人として銀時の本当の苦悩の日々を知りはしなかった。無論、知る由も無かった。

父に殺されかかり、村の者に生まれ育った村を追い出された銀時の  
幼き姿であるその幼子は、  
食べ物も水も無いその広大な大地を、未だに歩き続けている。

(今日はあれから・・・三日たったんだっけかな・・・)



その傷ついた体でフラフラになりながらも、そんな事を朦朧とした頭で考える。

(結局、俺を認めてくれたのは……)

そんな事を思いながらもただひたすらに歩き続ける幼子。顔は少しやつれて見える。

これは三日間食事をとれていない事だけが原因ではない。

そう、精神的なもの原因なのだ。

さぞかし苦痛であっただろう・・・

その幼子の母親が生きていた頃は、まだ子供らしい目つきをしていた。  
た。

だが母親が死に、今までも何度か拒絶してきたが、表面上だけは優しく接していてくれた父親には殺されかかり、実の親であったその父に「鬼」と言われ、その存在全てを否定された。

その時のショックはとて二歳になるばかりの子供には大きすぎる。

さらに追い討ちをかけるが如く、大好きだった母親を弔う事すら出来ないままその家を飛び出してみれば、村人にまで「鬼」と呼ばれる村を追い出さるといふ。

村を出る頃にはその赤く煌く綺麗な瞳は、すっかり生気をなくしたような濁った光をおび、  
例えるならそう、まるで死にかけて魚のような目をしていたのだ。

「ヤローの目、まるで生気が無いように見えやがる」  
そんな事をボソリと呟いたのは土方だった。

それからまた日がたち、一週間ほど歩き続けた頃だ。

あてどなく歩き続けて行き着いた場所は戦場跡。

もちろんそこではもう死闘は行われていない、ただ幾重にも重なる血にまみれた屍が転がっているだけだ。

辺りには血の海が広がっている。

まだ血が乾ききっていない。

おそらくはつい最近ここで戦闘が行われたからだろう。

だがそんな事は今の幼子には関係なかった。

何日も飲まず食わず、そんなことに気を留めている余裕など無いのだ。

その幼子はついに力尽きて、その屍の中に倒れ伏した。

そして思う

(俺、もう死ぬのか・・・それなら丁度良い・・・)

そして静かに目を閉じようとした。

「いや……だ……もう……」



そう言いながらその目から大雨が降り注ぐ。

これ以上銀時の過去を見るのは限界だった。

否、もうこれ以上辛い気持ちを共有してはいたくなかった……

想像すらしていなかった銀時の過去、ただただ銀時の過去を見ていた者達は、感情を共有していた者はもう、こんな銀時の考えを共有してはいたくなかった。

「銀ちゃん……もう……やめてヨ……」

銀時に断りもなくその記憶を勝手に覗き込んでしまった神楽・新八は銀時に対して深い深い罪悪感を抱いてしまう。

もちろん近藤や土方、沖田や山崎にも同じ事が言える。

いや……………

土方だけは少し違う。

何時も喧嘩を売る相手に同情なんかしたくは無かった。ましてやそれが、攘夷志士、桂小太郎と高杉晋助と何らかの関わり合いを持っている銀時が相手なのだから。

それぞれの負の感情が渦巻き乱れ、水と水が交わるようにその思いが交差する。

そんな新八達に、ふと希望の光が差し込む。

その幼子は静かに眼を閉じようとしていた。が、ふと目の前にある物を見てその閉じかけた目を再度開いた。

伏せに倒れ見えにくくなっている屍の懐に目を向ける。

その視線の先には、小さな風呂敷包みがあった。

幼子はそれを見て、絶望に満ちていた瞳に希望が宿る。

(この中に……もしかしたら!)

その考えは生気を無くしていた幼子に希望を見出した。

屍の懷から風呂敷包みをゆっくりと抜き取る。

もちろん立つ事は出来ない、立つだけの気力は残っていないのだ。

屍から抜き取ったその風呂敷には、それを持っていた屍のものであろう血が大量に付いていた。

だが幼子はそんな事知ったこっちゃあ無いといわんばかりの勢いでその風呂敷を開ける。

開いた中身を見れば、屍の体重に押し潰されたおにぎりが二つ。

幼子は潰されて原形を留めていないおにぎりを静かに口に運ぶ。

(おい・・しい・)

お腹に染み渡る久し振りの感覚。それと同時に心にも染み渡る本当に小さな幸福感。

その幼子は一口以降、おにぎりをすごい勢いで見事に食べ切った。

だが今まで飲まず食わずだった為、その空腹という感覚までも薄れていた幼子だったが、

それを皮切りにお腹が減っていたと言う感覚が沸々（ふつつ）と甦（よみがえ）った。

グウ~~~~~

お腹が大きな音を立てる。

幼子は思わずそのお腹に手を当てた。

(まだ、食べもんあるかも・・・)

そう思い立った幼子はその場に転がっていた屍をひっくり返しては、その懐に己の小さな手を滑り込ませて何かを探す。

いや、何かではない、食べ物を探しているのだ。



だが

食べ物を探すため引っ繰り返しているその屍の中には、

首が無い屍

手足が少し離れたところに転がっている屍

腹を切られ、中の臓物があふれ出してしまっている屍なんかがあった。

普通の子供なら泣き叫ぶなりなんなりするだろう。でもこの幼子は  
そんな事一切しない。

まるでそんな事に構っている余裕が無いようだ。

違うな、よつな・・・じゃない、事実そうなんだ。

一方の新八達の方は、そんな光景をしっかりとその「目」で見つめ、そのあまりの悲惨さに声も出ない。

改めてよく見るとそこは、とても形容しがたい、あまりにも生々しい光景だ。

本当に生前は人がどうか分からないような物体が辺りに幾つも転がっている。

それだけならまだしも、辺りは血の色一色に染まり、匂いは鉄の少し寂れた様な臭いだけが漂う。

その臭いは新八達にも分かる。この世界に干渉は出来ないが、この世界に干渉はされる。

全く酷なものだ。

新八や神楽は、幼子が屍をひっくり返してはその懐に手を差し込んでいる様を目の当たりにした。

幾多の戦況を掻い潜って来た真選組ですらその光景を見て大きな不快感を覚えた。

・新八はその光景を見て涙を流しながら口元を押さえている。だが抑えきれない吐き気が新八を絶えず襲っている。

・神楽は銀時の過去を知り、その過去に勝手に踏み入ってしまった事に、ただ悔いるように涙を流す。

・近藤は万事屋の、坂田銀時という名の、一人の人間の暗い闇の一部を共有してしまった事に心を痛め、その瞳に悲しみの色を浮かべる。

・土方は幼子のその振舞い方に、ただ恐怖を覚えた。  
その恐怖は今日の前にいる幼子に対してではない、今の、現代の  
「今」を生きる《坂田銀時》に対してにだ。



・そして沖田も、土方と同じように《坂田銀時》と言う名の一人の男に恐怖を覚えた。

・そんな真撰組の三人とは裏腹に、同じく真撰組隊員の山崎は、銀時に対して同情の念をただ抱いただけだった。

だが皆は、お互い何を考え、何を思っているのかは知る術すべが無い  
ため、口々に色んな事を言う。

「ひでえ、旦那はこんな餓鬼の頃からこんなところで育ってきたな  
んで……俺なら精神崩壊起こしてまさあ」

それが本音なのかどうなのかは分からない。

「万事屋の奴、よく精神を保っていられたな・・・  
いや、まだ幼すぎて良く分かっていないのか・・・まだ三つにも  
なっていないからな・・・」

近藤は言った。

本当のところは、銀時に、その幼子にそうであって欲しい・・・  
と願いながら言っていたにすぎない。

「万事屋のヤロー、おそらくそんな事に気を留めていられるだけの  
余裕も無かつたんだろう・・・」

土方は思ってもいない事を言う。

言えば皆に己を卑下されると思ったのだろう。

それは正しい判断だったのかもしれない。

現にそんな事を思っていたのは、土方と沖田だけだったのだから。

だがそう思っていた奴がもう一人居たという事は、お互いに知らない。

けれどそんな土方の言葉に周りは静かになった。

この時土方は、皆そう思っていたのだと理解していた。

だがそれは、この場にいた皆が等しく思っていた事だった。



そう、ただこの場にいた者皆が、お互いがお互いに偽りあっている、嘘の虚構に騙されているだけだったのだ。





人の物を勝手に盗んではいけません！ってそれ当然の事だよね（後書き）

「なんかすごい荒れてますね。作者・・・」

「模試の結果二枚だけど帰ってきたらしーヨ」

「へー」

「両方五十点満点で【英語 8】【数学 14】って笑ってたアルヨ！」

「・・・本当に大丈夫なんでしょうか」

「無理だな」

「無理アルな」

探し物と違って捜そうとしている時には出てこないのにやじでも良いときに限

どうしよう。

調子に乗って一日ごとに小説投稿してるからストックがもうないぜ  
よ・・・

プロットも考えれたから大丈夫だと油断していた（涙）

まさかプロットだけ思いついて原作にあうような話作り、ていうか  
キャラクター達にしようとするのがこれほどまでに難しかったとは  
・  
・

よもやこの私がこんな罨に嵌ってしまうとは・・・

探し物と違って捜そうとしている時には出ていかなければならない。でも良いときと悪い

幼子は食べ物をしばらく屍の中でひたすらに探し回っていたが、結局そこにはもう、食べれる様な物は一つも無かった。

( ない・・・ )

食べ物がここにはないと解るや否や、またこの広大な大地を歩き出した幼子。

その幼子はまた、幾日も歩き続けた。

そしてまたしても、行きついた場所は血生臭い、屍が幾重にも折り重なるように連なる戦場跡であった。

（また・戦場か・・・）

そう思った幼子はふと、そんな考えを改めた。

(いや、戦場だけど・・・違う・・・)

そう、違う。

ここは以前辿り着いた戦場跡とは比べ物にならない数の屍があった。

だが決定打ではない。

本当の意味で違っていたのは、その屍の中にある異形の姿をした者が、否、物体があることだ。

さらに付け加えるならば、前に行きついたその戦場には、そこら辺に飛び散っていた真っ赤があったが、この場にはその真っ赤な血はない。

ただ黒ずんで大地に広がる血と思われる物があるだけだ。

オマケにこの辺り一面には「物体」が腐り、なんともいえない様な臭気が漂っていた。

そう、以前はそんな臭い等していなかった。屍が腐るまで時間はたっていないかったのだ。

だがそれに気づいた幼子の取った行動は、幾日前と全く一緒だ。

そんな様子を静かに見つめ見守るは真撰組のトップ三人組。

そしてそこから数十メートル離れたところにいるのは、その三人に少し離れた所で待っている様に言われた新八・神楽・山崎。

実際ここに来た近藤たちはそうして正解だったと思う。

そんな事を思わせるほどの光景が、三人の目の前には広がっていたのだ。

だがそんな光景を目の前にしてもやはり気にも留めない幼子、ただひたすらに屍の身包みを剥ぎ取る事に夢中になる。

それを見て近藤は言った。

「そういえば万事屋の年齢を考えれば今は天人と侍達が戦を起こしている時代だったな」

その言葉はまるで、その幼子を哀れんでいるかのように聞こえる。

「こうして万事屋のヤローの過去を見ていれば、桂・高杉との関係を知ることが出来る」

そう呟いた土方に対して近藤は

「そう・だな・・・」

と悲しそうに俯きながら答えることしか出来なかった。

沖田はそんなやり取りを二人の横で聞きながらも、自ら口を開く事



はしなかった。

この場にある屍全てを確かめるのに五時間以上もかかってしまった。

だが、そのぶん収穫も大きかった。

「なんかの果物二つ・おにぎり三つ・竹筒に入った水」

その幼子は、たった今屍から剥ぎ取った物を、戦場後から少し離れた木の根元に置いた。

もちろんそこで幼子も、体を落ち着かせる。

さすがに五時間も中腰で屍を引つ繰り返しながらあの臭気の中を歩き続けたのはきついらしい。

体を木の幹に預けながらも頭を押さえ、首を横に振っている。眩暈でもしたのだろうか。

しばらくして落ち着いたのか、足元においていた食料に目を向ける。

(この果物は・・・食えんのか?)

そんな事を疑問に思いながら果物の臭いを嗅ぐ。

特に腐った臭いもしない。

それを確認すると一気に果物を口の中に放り込んだ。

(これ、甘いってやつ・・・なのかな？)

良く分かんねえけど、おいしい・・・)

口元に笑みを讃えながら、竹筒に入っていた水を少し喉に流し込む。

そして、おにぎりを一つずつ食べ、最後に残しておいた果物を口に運んだ。

何個かは残しておいて後で食べようとも考えたが、そんな事をして  
いるだけ、お腹に余裕が無かった。

そして幼子は、疲れた体を休ませるように木に身体を預け、静かに  
眠りに付いた。

「銀ちゃんの寝顔、とても苦しそうアル」

あの戦場から離れたところにいた新八達も、銀時がその場から離れた事により、今こうして銀時の傍による事が出来た。

それぞれ特に疲れるわけも無いその体を、その場に座り休めるなり、銀時の寝顔を覗き込むなり好き勝手に動き回っていた。

そして、神楽と新八は二人して銀時の寝顔を観察していたのだ。

銀時の今までを見てきた神楽は肩を落としながらそんな事を言う。

その時、銀時は小さな呻き声を上げた。

寝苦しそつに顔を歪めた銀時を見て、「あっ」と声を漏らしてしま  
った新八。

それもその筈・・・

なんせ、寝苦しそうな顔をして閉じているその瞼からは、一筋だけ  
涙が流れたからだ。



「銀さん、眠っていて意識なんか無い筈なのに……」

新八はそんな銀時の様子を見て静かに呟いた。

それを聞き土方も、何を思ったのか静かにその目を閉じ言った。

「お前等も体を休めろ……」

その隣を見れば、唯一躰を欠いている者が一人。

その男を見て土方はこう思ったそうだ。

(このバカッ、いつぺんたたっ斬ってやるつか・・・)

その男の正体は、地味で空気をも読めない男、ジミー山崎。

皆は知らない間に眠ってしまっていたらしい。

- なんともけつたいな事だ、ここでは疲れるはずもないというのだ・・・

そんな事をこの場の誰よりも一番早く起きてしまった土方が思う。

辺りを見渡せば、太陽が顔を見せかけている為か、うつすらと明らかになっている。

土方が目を覚ましてしまった理由はいたって簡単。

誰かがこの場から去っていかうとする気配を感じ取ったからだ。

そう、この場で最も早く目を覚ましたのは土方ではなく、大きな巨木に体を預けて眠っていた幼子、銀時だったのだ。

幼子は鴉の鳴き声が遠くから聞こえ、目を覚ました。

（もう、朝か？

早く次の飯・・・探しに行こ・・・）

ゆっくりと体を持ち上げようとした幼子だったが、木の幹なんかに寄りかかって眠っていた為なのだろうか、体の節々が痛く感じられた。

だがそんな事も知ったこつちゃあないと言わんばかりに体を勢い良く持ち上げた。

そしてまた何処とも付かぬ方向を向き、歩みを進めようとした。

「おい起きろ！万事屋が歩き出したぞ！」

土方は幸せそうに眠りこけているやつ等に朝っぱらから怒鳴り声を浴びせかけ、その場にいた者全員を不快にさせた。

もちろん銀時にその声は届かないため、銀時以外の者にだ。

因みに低血圧である沖田と神楽には強烈な朝の一発を食らわせられた土方。

「朝っぱらからウルセーよこのニコチンがああああ……！」

「……」



そんな様子を見て

( ) ( ) 朝っぱらから大変だなあ ( ) ( )

と眺めていた新八・近藤・山崎。

本当に土方は苦勞人なんだと実感する出来事であった。

もちろんあの後、真選組鬼の副長様が降臨された事は言つまでも無  
かるう。

だがそんな事が己の背で起こっていた事は知らない幼子は、  
今までと同じようにその頼りがいの無い小さな足で、ひたすらに歩  
みを進めていた。

(暑い・・・)

お天道様あてんとうさまが頭かぶのてっぺんに射しかかった頃だろうか、額に流れる滴を拭う幼子。

その後ろでは、幼子と同じように汗を拭う姿・・・

いくらこの世界に干渉はされないと言ってもだ、逆に干渉はされまくってしまう近藤等。

雨が降ってしまえば、この世界の者には見えないし、触れられる事も出来ないその体でも、濡れてしまつらしい。

ここ数日でそんな事を新しく発見・理解した。

人間の作ったもの、そう、家などには触れる事も出来ないのに、  
雨と言った自然から生まれてくるものには触れる事が出来るらしい。

なんと矛盾だらけなことか・・・

そんなため、幼子と同じようにその暑さをもろに感じてしまう。

「万事屋のヤロー、あんな三つにもならねえような小さな身体で、  
良く体力が持つものだ・・・」

汗を拭いながら感心して言うは近藤。

「まったくですぜい」

近藤と同じようにその額から滴り落ちる汗を拭って沖田は言う。

その後ろでは山崎が暑さを紛らわすためか、ミントンに没頭している。

だが考えれば分かる事だが、さらに頭をふらつかせるだけだ。

そんな山崎に土方は何時ものごとく容赦ないツッコミを入れる。

「てめえ山崎い、こんなクソ暑い中そんなもん振り回しやがって、おめえの頭はいかれてやがんのかああああ！」

そのツツコミに悲鳴を上げながらどこかへ逃げ去っていった山崎。

そんな様子をバカでも見るような目で見ていた新八だったが、傘を差しても遮きれない太陽の熱で、体がフワフワしている神楽に気づいた。

「神楽ちゃん、大丈・・・」

新八が言い切る前に、神楽の身体は地面に向かって倒れ始める。

「おっと！無理すんじゃないよチャイナ娘」

そんな事を言いながらも、それを何とか受け止めたのは以外にも土方だった。

「ニコチン臭く・・・なるネ。この私に近づくんじゃないアル」のまヨラー星人・・・」

受け止めてもらったにもかかわらず、神楽は相も変らぬ毒舌を行き  
絶え絶えに言い捨てる。

土方は「マヨネーズをなめんなよ」などと言いながらも、その神楽  
を背負おうとした。

最初は嫌がっていた神楽も、さすがにこの暑さの中じゃきつかった  
のだから、

最後はあきらめ大人しく土方に背負われていた。



さすがはフォロ方十四フォローである。

お天道様も傾き始め、辺りは少しだけ静かになりつつあった。

（もっ日が暮れる・・・）

などと思っていた幼子の目の前にふと、懐かしい風景が広がっていた。

（あれは・・・）

それは夕日色に、朱色に辺りを染め、静寂に満ちた雰囲気をかもし出す、小さな村。

瞬時に幼子の顔には苦の色が滲み出す。

もちろんその幼子が育った村ではない。

そんな事は十分分かってはいる、だが、どうしても足がすくんでしまふ。

村の皆に、実の父に村を追い出された時の記憶が、幼子の頭に甦ってしまうのだ。

幼子はそんな記憶を何とか押さえつけ、意を決しその村に足を踏み入れた。

ほんの少しでも良い、食料を分けてもらうために！

そして、村に足を踏み入れた幼子。

幼子は、村の一番出口に近い家を訪ねた。



探し物と違って捜そうとしている時には出てこないのじゃないの？でも良いときと限

「この話書いてる作者ホント馬鹿だな」

「そうアルな」

「一日ずつ出すから困るんだろーが。一週間ずつとか一ヶ月ずつにしるや。自分で最低一ヶ月って言いながらごんだけ真面目さんなんだよー！」

「そうアルな」

「……ねえ神楽ちゃん。さっきから何読んでんの？」

「作者の書いたプロットネ！」

「ちよい、銀さんにも見せるやー！」

「はーい」

「……銀さんよりも汚い字って……どうなんだよ」

「私まったく読めなかったから解読しよーと思ってたネ」

「……」

（ほんとにこの話書いてる作者は受験だいしょーぶなんだろーか……）

噂なんてくだらねえもんを信じる奴ってのは、どっせうくでもねえ奴だと相場は何かホントごめんなさい

こんな駄目駄目小説・・・

しかも次の話ができいないと言う、本当に次からは一週間ごとに投稿するようによろしく・・・

噂なんてくだらねえもんを信じる奴ってのは、どうせろくでもねえ奴だと相場は

(暑い・・・)

お天道様おてんとうさまが頭かぶのてっぺんに射しかかった頃だろうか、額かぶに流れる  
滴を拭う幼子。

その後ろでは、幼子と同じように汗を拭う姿・・・

季節は春、だが何日も飲まず食わずで歩き続けている幼子は体力  
消費が激しい。

その為通常の何倍もその日差しがきつく感じられる。  
いくらこの世界に干渉はされないと言ってもだ、逆に干渉はされ  
まくってしまう近藤等。

雨が降ってしまえば、この世界の者には見えないし、触れられる  
事も出来ないその体でも、濡れてしまうらしい。

ここ数日でそんな事を新しく発見・理解した。

人間の作ったもの、そう、家などには触れる事も出来ないのに、  
雨と言った自然から生まれてくるものには触れる事が出来るらしい。

なんとも矛盾だらけなことか・・・

さらにここ数日でもう一つ理解した事柄は、この世界では銀時思



考感情だけではなく、その体力までも共有（共通）、簡単に言えば同じ程度の体力しか持たないようだ。

そんなため、幼子と同じようにその暑さをもろに感じてしまう。

「万事屋のヤロー、あんな三つにもならねえような小さな身体で、良く体力が持つものだ・・・」

汗を拭いながら感心して言うは近藤。

「まったくですぜい」

近藤と同じようにその額から滴り落ちる汗を拭って沖田は言う。

その後ろでは山崎が暑さを紛らわすためか、ミントンに没頭している。だが考えれば分かる事だが、さらに頭をふらつかせるだけだ。

そんな山崎に土方は何時ものごとく容赦ないツツコミを入れる。

「てめえ山崎い、こんなクソ暑い中そんなもん振り回しやがって、おめえの頭はいかれてやがんのかあああ！」

そのツツコミに悲鳴を上げながらどこかへ逃げ去っていった山崎。

ただでさえ体力が衰えていると言うのに、走って残りの体力をさらに消費させるとはなんとバカな事だろう。

そんな様子をバカでも見るような目で見ていた新八だったが、傘を差しても遮きれない太陽の熱で、体がフワフワしている神楽に気づいた。

「神楽ちゃん、大丈夫・・・」

新八が言い切る前に、神楽の身体は地面に向かって倒れ始める。

「おっと！無理すんじゃないやねえよチャイナ娘」

そんな事を言いながらも、それを何とか受け止めたのは以外にも土方だった。

「ニコチン臭く・・・なるネ。この私に近づくんじゃないアルこのマヨラー星人・・・」

受け止めてもらったにもかかわらず、神楽は相も変らぬ毒舌を行き絶え絶えに言い捨てる。

土方は「マヨネーズをなめんなよ」などと言いながらも、その神楽を背負おうとした。

最初は嫌がっていた神楽も、さすがにこの暑さの中じゃきつかったのだらう、最後はあきらめ大人しく土方に背負われていた。

さすがはフォロ方十四フォローである。

お天道様も傾き始め、辺りは少しだけ静かになりつつあった。

(もっ日が暮れる・・・)

などと思っていた幼子の目の前にふと、懐かしい風景が広がっていた。

(あれは・・・)

それは夕日色に、朱色に辺りを染め、静寂に満ちた雰囲気をも

し出す、小さな村。

瞬時に幼子の顔には苦の色が滲み出す。

もちろんその幼子が育った村ではない。

そんな事は十分分かってはいる、だが、どうしても足がすくんでしまう。

村の皆に、実の父に村を追い出された時の記憶が、幼子の頭に甦ってしまつのだ。

幼子はそのような記憶を何とか押さえつけ、意を決しその村に足を踏み入れた。

ほんの少しでも良い、食料を分けてもらうために！

そして、村に足を踏み入れた幼子。

幼子は、村の一番出口に近い家を訪ねた。

最近巷を騒ちまたがしている噂が一つ。

「最近この辺りに小さな鬼が出るそうな・・  
その鬼は、怪しく煌めくその刃にも似たような色の髪を振りかざし、  
その瞳は燃え盛るような炎のように真っ赤な、血の色をしていると  
いう・・・」

「その鬼に出会ったなら、命ば剥ぎ取られるぞ。  
何せ奴は・・・『屍を喰らう鬼』・・・」

夕焼けに赤く染まり静まり返った村に、小さな足音がする。

「あー・・・」

小さな子供のような声が、家の外から小さく聞こえた。

（なにかしら？）

そう思いながらも、声のした方に体を持って行った若い女。

そして、その声の聞こえた扉を開く。

「ヒッ！」

扉を開けた途端に小さな悲鳴を上げ、思わず尻餅をつく。

そこにいたのは、最近この辺りを騒がしている噂のように、その髪を銀色に光らせ、その髪に付いた幾つもの血と同じ様な色をした瞳を持つ、とても小さな、本当に小さな幼子だった。

「あっ！？大丈夫・・・」

言いかけた幼子の言葉は、その女の恐怖する顔から紡ぎ出された言葉によって遮られる。

「鬼！こ、来ないで！」



その言葉と共にその幼子は酷く傷ついた顔をし、己の着物を強くつかんだ。

その言葉に酷く傷つきながらも、幼子はその小さな体で、心で、一生懸命耐えようとしているのだ。

だがそんなことに気づく余裕など、目の前の幼子を本当の『鬼』  
と思い込んでしまっている、その哀れな女には無い。

先ほどの小さな叫び声が周りにも聞こえたのだろう。

「なんだ、どうした？」

などと言いながら、何人もの村人がその女の家に集まってきた。

だがその村人達もその幼子を見た途端に顔を引きつらせ口にする。

『鬼』と・・・

「屍を喰らう鬼がどうしてここに・・・」

そんな言葉の後には決まってこう言葉が続いた。

「来るな！この村から出て行け！」

その言葉と共に石礫いしつぶが空を舞う。

まるで、鬼をこの村から追い出すように。

その鬼はどう思ったのか、その村を後にした。

その村にほんの少しでも良いから食べ物分けて貰おうと、

たったそれだけの為に、その小さな体ではありえないほどの勇気を振り絞り、村に足を踏み入れた。

村に入ってすぐ辺りを見渡した、そして村の出口に一番近くにあった家を訪ねようと決めた幼子。

けっして村の奥深くに足を踏み入れようとはしない。

それは当然だ、ほんの少しで良い、ただ食べ物に分けてもらう、それだけが幼子の望みだったのだから。

幼子は訪ねようと決めた家の前まで来た。

ゴクリ

思わず息を呑む幼子。緊張しているのだろう。

その幼子の今の気持ちは、その小さな体が抱えているにはあまりにも大きすぎる。

幼子の感情でも共有していない限りそんなものは一生分かるものではないだろう。

こんな感情、普通の人間は抱える事の無いもの、抱える必要の無いものなのだから。

幼子は一生懸命勇気を振り絞り、第一声を上げた。

「あー……」

声をかけてすぐ、家の中からはこちらに向かって歩いてくる足音が聞こえる。

その足音が扉のところまで来たところで、扉が開く。

ガチャリ

音と共に扉が開かれた。

だが扉を開いた若い女の方は、自分の姿を見ると同時に腰を抜かした。

「ヒッ！」

そんな声を引きつった顔で上げる。

「あっ！？大丈・・・」

思わず心配して声をかけたその幼子には、想像もしてなかった一言が返ってきた。

同時に、容易に想像がつく言葉でもあった

「鬼！こ、来ないで！」

（え？お、に？・・・俺が・鬼・・・）

その言葉と共に、心の奥底に封印していた記憶が甦る。

幼子は酷く傷ついた顔をし、己の着物を強くつかんだ。

その言葉に傷つきながらも、幼子はその小さな体で、心で、一生懸命耐えようとしているのだ。

それを知ってか知らずか、その女はただ、その幼子を見ては怯えている。

記憶と共にまた、あの言いようのない悲しみが幼子を襲った。

(そうか、俺、鬼だっけ……)



そんな思いがふと、心に、頭に浮かんだ……

少しして、村の人達が家の周りに集まってきた。

きっと先ほどの叫びを聞いて出てきたのだろう。

そしてその村人も、幼子の姿を見ては『鬼』と言った。

しかも『鬼』では終わらず『屍を喰らう鬼』と続けられた。

「屍を喰らう鬼がどうしてここに……」

（屍を喰らう、鬼？ やっぱり……俺の……事？）

そんな事を言われた幼子は何の事だかさっぱり分からなかった。

ただ、その『鬼』と言うのが、自分に向けられた言葉だと言う事

だけが理解できた。

そしてそんな幼子にさらに紡がれる言葉。

「来るな！この村から出て行け！」

(……………)

幼子は幾月か前の事を思い出し、静かに踵を返した。

だが、村を跡にしようとしたその小さな「鬼」に、少し大きめの石礫が飛んできた。

その石礫は村を大人しく去ろうと踵を返した幼子の、その細く脆い足にぶつけられた。

足からは血が流れ、その身にまとっていた着物に赤いしみを作る。

それでも幼子は立ち止まらず歩き続けた。

『鬼』と呼ぶ声が届かなくなるところまで……

（俺は、やっぱり受け入れて貰えないのか……）

口元を吊り上げながら、この広い大地を歩き続けていた幼子はふとそんな事を思った。

だが、不思議ともう、悲しいと感じる事はなかった。

それでも、止め処なく両目から大きな滴が流れ落ちて来る。

(あれ？この滴つゆ、なん、だ？)

己の存在を拒絶され、存在していること事態が罪だと言わんばかりの目でみつめられた。

そんな今までの全てが一気に思い出され、さらにその滴はその幼子の頬を伝い、大地に流れ落ちた。

しばらくそんな幼子の感情や思いを共有しながら、涙を一緒にな  
って流していた神楽が声を発した。

「酷い・・・銀ちゃんは、何もしてないアル・・・」

神楽はその白く透き通る頬に涙を流しながら、悲しそうに言う。

神楽も人間とは違う髪の色、目の色をしている、その為銀時の思  
いにより一層共感してしまう。

だが一つだけ大きな違いがあった・・・

そう、神楽は宇宙最強の戦闘民族、夜兔。

恐れられていたのはその戦闘能力。

ただ姿形が違うからとそんな理由で恐れられた事はただの一度として無い。

さらに付け加えるなら、神楽は三つやそこらの頃は母親やまだ優しかった兄、神威に色々と助けられ生きてきた。

そのため、銀時のような目にあつたことは無かつた。

そんな神楽の心中を察してかどうかは分からないが、土方は言う。

おそらく分かつてはいないだろう、なんせ真選組は神楽の過去を知りはしないのだから。

「こんな時代だ。ヤローの出で立ちは異様過ぎる、自分とあまりに違いすぎる者は恐れられ避けられ拒絶される。」

そこまで静かに言った土方だが、その次の言葉からは怒りを露にし、その顔は殺気と言つ名のオーラを静かに滲ませていた。

「それでも、これは幾等なんでも許せねえ！」

その土方の言葉に珍しく同意をする沖田。

「ム力つきますけど、土方さんに同意しまさあ。あの村の奴等を皆ぶん殴って回りたいでさあ」

そんな沖田の言葉に、山崎はこつ付け加える。

「それで、ついでに旦那の良さ知らしめてやりたいですね」

その山崎の言葉に、静かにうなづく新八・神楽・土方・沖田。

だが山崎の言葉に近藤は一人、うなずかなかった。

近藤はその外見に相応しい野生の感で、これから起こりうるであろう銀時の定めを、その身に感じ取っていた。

その為、山崎の言葉は近藤の頭には右から左へと流れていってしまっただのだ。

(この胸騒ぎ・・・万事屋)



近藤は心に浮かんだ不安をきつと気のせいだと思い込もうとした。

そして、今日の前で泣いている幼子の幸せを静かに祈った。

だが、運命の女神は全速力でその幼子から走り去って行くこととするのを、やめようとはしなかった。

やっと幼子が泣き止んだと思われる頃には、暗闇に沈んでいた景色が、ほんのりと明らかになって来た。

(もう、夜明けか・・・)

その幼子はゆっくりとその場を立ち上がり、カラス達の飛んでいく方に足を運んでいった。

噂なんてくだらねえもんを信じる奴ってのは、どっせろくでもねえ奴だと相場は

「なあ」

何でしょう？

「俺、この中で一番ひでー目にあってるように思うんだけど、もしかしてそれは俺の気のせいなのか？」

おそらくそうでしょうね^^

「そうか……って、なんで納得するかあああああ！」  
なぜ？

「だってひどくね！？普通主人公良い思いするはずだろうが！それが何で貧乏でモテなくて辛い思いばかりしてる訳！？」

何を言っているのですか銀時様？

銀時様はこちらの世界ではすごいモテモテなんですよ？

去年なんか結婚したいと思う男性キャラNO.1は銀時様でしたし・

「……マジで？」

マジです。

忘れてたけどこっちの方も忘れないでね？（前書き）

はい。

入れ忘れていた話です。

何でとにかく短いです。

忘れてたけどこっちの方も忘れないでね？

## 旅館

「新八の奴どんだけ長湯してんだよ！銀さん馬鹿みたいじゃん。中々待ち合わせの時間に来ない彼女の事を一時間も前から待って結局二時間も彼女待ち続けてしまった彼女にベタ惚れしている馬鹿な彼氏みたいじゃんっ！」

などと言いながら三十分も前にも入ったその入浴上に足を踏み入れる。

結局三十分の間、新八を脱衣所で待っていたという事だ。

やっぱり銀時はツンデレだ。

「お〜い。だいじょーぶかー？まさかのぼせて湯に浮かんでるって事・・・」

言いかけて言葉を止める銀時。

その視線の先には、銀時が入浴上から出る前に入っていた温泉に浮かんでいる新八+その他の連中がいた。

「……おいおい、マジかよ」

銀時は頭をかきむしり、仕方ないといわんばかりの態度で新八を脱衣所に移動させる。

脱衣所にあるベンチに新八を寝転がし、そんな事をばやく。

「何だっ て俺がこんな事を……」

裸で部屋に移動させるわけにも行かないので、銀時は辺りを見渡して使い物になりそうな物を探す。

「おっ、あつたあつた」

脱衣所にはお客様専用と書かれた紙が貼ってある籠があつた。

その中には八着ほどの浴衣がある。

「めんどくせーなあ」



そうは言いつつも、その浴衣を手に取り新八に着させ始める。

新八に浴衣を着させながら、未だに温泉に浮いている連中の事を思  
い浮かべる銀時。

「はあ〜」

大きなため息だ。

そこまで新撰組に手を貸してやるのが嫌なのだろうか。

だが、ため息こそすれ、何だかんだ言っても優しいのが銀時。

「しゃあーねえなー」

新八に服を着替えさせたところで銀時はまた、入浴上の中に入っていった。

忘れてたけどこっちの方も忘れないでね。(後書き)

とりあえず読むだけ読んでやってください。

木って見る分には文句ないけど、実際近くに行くと臭いは汚れるは虫がいるは  
行数の間とか適当にしてるから読みにくいかも・・・

出来ればアドバイスください！！

后感想じゃんじゃんよろしくお願いします

もうそれが楽しみで楽しみで仕方がありませんw

木って見る分には文句ないけど、実際近くに行くとき臭いは汚れるは虫がいるは鴉を何となくで追いかけて来た。

いや、理由ならちゃんとする。

鴉がいる所には、集まる所には食べれる物がある。

そう思って追いかけてきたのだ。

だがどうだろう。

今日の前にあるのは大きな山、どちらかというとき森に近い山。

銀時は鴉が食料を沢山持っている屍の元へ行ってくれないかと期待していたのだ。

だから今悩んでいる。

(・・・また屍探しに行った方が良いのか？それともここで果物でも探した方が確実か？)

考えても考えても答えは出てこない。

何を思ったのか銀時は回りに何も無いのを確認した。

「・・・」

(どうせ歩き続けて屍の所に絶対行き着くって訳でもないしな。とりあえず行ってみよう)

銀時は散々悩んだ挙句、とりあえず行ってみるだけ行ってみようという考えに落ち着いた。

山道はかなりゆるやかである。

だが銀時はあえて山道を通らなかった。

「万事屋はなんで山道を通らないんだ？せつかく道があるんだからそっちの方を通らなくても良いだろう」

木の枝がパキッといって音を上げる。

季節は春。

周りには桜の花弁が舞っている。

いくつか木の枝が地面に落ちているのが見えるは、きっと、誰かが枝を手折ったからなのだろう。

でなければ春真盛りの今、地面に枝が落ちているはずが無い。

周りには桜の花弁が風に乗り舞っている。

だが桜の木がそこかしこに見当たる訳ではない。



おそらくこの山のどこから風に乗って来ただけだろう。

桜の木の割合は、この山の中では十五分の一にも満たない。

それでは桜の花弁が多く思えるのはきっと、その鮮やかなピンク色の花弁がきれいで、脳に強く印象付いているからなのだろう。

「局長、旦那はこの山に食料になる物を探しに来たんですよ？山道なんか通っても食料なんか見つかるわけも無いでしょうし、そのうえ殺されそうになってしまつかもしれないじゃないですか」

山崎は近藤の横に付き丁寧に己の考えを述べる。

なんだろう、山崎の出番が久し振りだったような気がする。

近藤は山崎の言葉を聞き「なるほどな」と感心している。

本来この世界では銀時の思考や感情、そういったものは全て分かっ  
てしまう筈である。

それなのに近藤達にはその考えなどは伝わらなかった。

つまり、銀時にとってそれは考える必要など無い事だったのだ。

そんな銀時にとって考える必要すらも無い事が解からないとは、近  
藤の頭はゴリラ並なのか・・・

いや、訂正しよう。

ゴリラなら本能で迷わず森の中へ行くこととする筈だ。

近藤はもしかしたらゴリラ以下の生命体なのかもしれない。

「土方さん見てください、桜がこんなに綺麗に散ってまさあ。せつかくだから土方さんもこの際綺麗に散ってください、なんなら俺がかいしゃく介錯をしてあげても良いですよ?」

近藤達の後には、刀の柄に手をかけて軽くその刀身をちらつかせている沖田が土方に話しかけていた。

「何で俺がお前のわけの分からねえ理屈であの世に行かなきゃなんねえーんだ?」

額に青筋を浮かべて沖田を引きつった笑顔で睨んでいる土方も、沖田と同じように近藤達の後ろを付いていつていた。

「……あいつ等は何時いじも呑気で羨ましいアルナ」

傘越しに後ろを振り返り、その目に映る連中をまるで蔑んでいるかのような声音でそんな事を言う神楽。

今はバカをやっている時ではない、銀時の姿をしつかり見守ってなくては、それなのに後ろでバカやっている連中がいる。

それを見ると無性に腹が立つ。

新八はそんな神楽に気づいたのか、神楽より少し先を行っていたその足を止め、こちらを振り返り聞く。

「神楽ちゃん？」

神楽は顔を新八のほうに向けて少しの間まの後にしっかりとした口調で言った。

「なんでもないネッ！」

パチャッ

何かが撥ねた音がする。

「か・・・わ？」

目の前には綺麗に透きとおった水が流れている。

森に厚く覆われていたためか、河があることなど気づきもしなかった。

何本もある木の間をただひたすら歩き抜けて来た銀時は目の前に広がる光景に最初はひどく驚いていた。

(すごい・・・綺麗だ)

この景色を目にして素直にそう思った。

緑豊かの木々は光を浴びまぶしく輝き、桜の木が間を縫って生えている。

あんなに眩しく照らしていた太陽なんかはその木の枝や葉に遮られ、心地の良い明りをその河に照らし反射させていた。

河の横に立ち並ぶ木々の葉や花が河に浮かび流れていく。

まさに幻想的な空間。

ここしばらくの間辛い思いばかりをしていた銀時は一瞬だけここがこの世のものではないのかもしれないと錯覚してしまう。

パシヤッ

また何処からとも無く水が撥ねる音がした。

(あっ、そうだった・・・)

その音で一気に現実に巻き戻される。

先程の音の原因をその紅い目の端で捕らえた。

(この河、魚がいんだ)



魚を見て抱いた気持ちはそれだけ。

魚を捕まえようなどと浅はかな行動は取らない。

銀時は馬鹿ではない。

魚は火が無ければ食べられない、それをちゃんと解かっていたのだ。

意識を現実に戻された銀時は、ふと川の前立っている事を思い出し、刀を脇に挟めたまま己の手を見つめる。

(ボロボロだな)

思わず苦笑してしまった。

次に己の身に着けている物を見みる。

どちらも同じだけ汚れている。

己の格好が今どんな状態なのかを改めて理解する。

そして口元を緩めて思う。

(丁度いいや！)

持っていた刀や履いていた草履をその場に置き、河に飛び込む。

河に体沈めてそのまま頭も沈めた。

バシャバシャバシャ

河に沈めた頭を水中で一気に掻き上げる。

本人は頭を洗っているつもりだが、傍から見ればただ頭を激しく掻いている様に見えない。

数秒の間そんな光景が幻想的な風景の一部あったが、十秒も立たないうちにすっかり綺麗になった髪の毛と顔を上げる。

息が長くもたなかった様だ。

河面から頭を上げた銀時は肩で息をしている。

少し呼吸を整えて落ち着いたのでだろうか、今度は静かにその体を水に沈めた銀時。

綺麗な銀髪に水滴をちりばめ、紅い可愛らしい瞳を持った幼子とこの幻想的な空間、これを一枚の絵にしたとしたなら、これこそまさに楽園と呼ばれていたに違いない。

それほどこの空間と銀時は美しいハーモニーを奏でていた。

だが当の本人にその自覚は全くもってない。

ほんの数秒体を静かに水に浸けていたかと思っただが、直ぐに銀時が何をしているのか解った。

（血って以外に取れねえーんだな）

先程まで体と一緒に水に沈めていた手を己の頭上に掲げる。

（よし、綺麗になった）

その手には幾つか付いていた筈の血が綺麗さっぱり姿を消していた。

（次は・・・服だな）

銀時がさっきから何をしてたのかももう解っただろう。

そう、血に塗れ、砂に塗れ汚れていた体を洗っていたのだ。

銀時は服を脱がずに着たまま服同士を擦り始める。

めんどくさいからなのだろう。

だが服を着たままの方がより多くの時間を費やしてしまう。

結果、服を洗い終わるのに三十分ほど掛かってしまった。

銀時は服が綺麗になったのを確認すると河から上がる。

バシヤッ！

着ていた服の水をその小さな白い手で強く絞り出す。

辺りには大きな音が響き渡るが直ぐに静かになる。

銀時は刀と草履の所へ戻り直ぐに草履を履いた。

履き終えた銀時はちよつと身体を休める事のできる所は無いか辺りを見回す。

「！」

（あそこ良いかも）

見つめる先には根元に小さな赤い実をつけた草がある大きな巨木。

銀時はそこにゆっくりと近付いていった。

その木の傍まで来た銀時はその木に体を預けるようにして腰を下ろす。

刀を期に立て掛け、その横にある赤い実を銀時は一つもぎ取り口に運んだ。

(あまい・・・だっけな、この味)

銀時はもう一つその実を手に取り口に運ぶ。

(でも、なんか酸っぱいな)

銀時はその赤い実が気に入った。

この甘酸っぱい味が良かったのだ。

気が付けばその場にあった赤い実は全て食べてしまっていた。



銀時はその赤い実を食べて軽い飢えを凌<sup>しの</sup>いだのか、ゆっくりと体の力を抜き気に全てを委ねる様にして何日ぶりかの眠りに付いた。

木って見る分には文句ないけど、実際近くに行くと臭いは汚れるは虫がいるは

「とくにやる事ないネ！」

「そうだな」

「もう今日はいいんじゃないんですか？」

「だな」

「」「」「今日はこれにておしまい！！」（たぶんな）」「」「」

「……………たぶんって何？」

親が働いて稼いだ金普通に使ってるけど、そのありがたみが解ったら後々親がこ  
うまく書けてない気がしてなりません・・・

慌ててもう一本仕上げたからなあゝ

ここはこうした方が良い！

なんて意見があればドシドシ感想ページに送ってください！

お願いします^^

ホント力不足ですみません

読みにくい部分があった遠慮せずに教えてくださいね^^

親が働いて稼いだ金普通に使ってるけど、そのありがたみが解ったら後々親が  
「・・・っん」

銀時は気温が下がってきたのを肌で感じ取り目を覚ました。

目を擦りながら昼間は綺麗だった筈の景色を見ている。

が、やはり肌で感じたとおり辺りは真っ暗闇。

夜空にはまん丸に浮かび上がっている綺麗な月があった。

(もう夜か・・・飯、探さないと)

木に立て掛けてあった刀をその手に持ち、そのまま森の奥に入っ  
て行った。

真つ暗闇の中、満月がほのかに照らす淡い光。

だがその光すらも、木々に邪魔されてまともな灯りとしてその場を照らしてはいない。

コシッ

「…ッ」

(おっ)

気の根つこに躓き扱けそうになる。

足を宙に浮きかけていた所で何とかもう一本の足を前に踏み出し踏ん張った。

(あぶな〜)

額に浮かんでいいる冷や汗を右手で拭い、直ぐにまた歩みを進める。

数刻の間、この森を歩き続けてみたが食べれそうな物は何一つ見当たらない。

あの河で見つけた赤い実だけがこの森にあった唯一の食料のようだ。

もうこの山には居る意味が無いようだと確信した銀時は、その暗闇の中、山を静かに下っていった。

山を出れたのはそれから一刻後。

山を出た頃にはお月様が顔を隠し始め、入れ替わりにお日様が顔を出し始めていた。

銀時は一度だけこの山を振り返り、また、今までいた戦場へと舞い戻っていった。

仄かなぼかぼか陽気。

銀時にとっては気だるい食熱地獄。

結局山では収穫が無かったに等しい銀時は、体力の回復を望めな

かったのだ。

しばらくそんな地獄の中を歩き続けていると、何日ぶりかの景色が遠くに広がっているのが目に付いた。

銀時は重く感じる体を引き摺<sup>ず</sup>る様にしてその場に向かった。

辺りは真っ黒に染まっていた。

ここは随分前に死闘を繰り広げられていた場所のようだ。

銀時がこの場に来て最初に目にしたものは真っ黒な大地。

これは辺りに飛び散った血が日を置き変色した為の物。

お次に目にするものは屍。



(先を越されてるな……これ)

目の前に転がっている『物体』を見やり思う。

今まで何度か戦場をわたり歩いて気づいた事だが、血が変色し屍が腐り臭気を放つだけの時間が経っていれば、大抵がその黒い体を持つ者達が、その屍の持っている食料やその屍自身をついばんで食した後。

そのためこういう所ではあまり収穫は得られないのだ。

足元には体に虫が集り、その体にはカラス達が貪った跡であろう穴がいくつか開いている。

銀時と違い体から目までの全てが黒い鴉。

それなのに人には忌み嫌われる。

初めこそは（なんで全て黒いのに嫌われてしまっただろう）と悲しみと共にそんな疑問を持っていた銀時だったが、直接その目で屍をついばんでいる姿を目にしてからは、なぜ鴉が忌み嫌われていたのか理解した。

鴉は本当の意味で屍を喰らう。

それが恐ろしいから人から忌み嫌われているのだ。

だがもう一つ戦場を渡り歩いて理解した事があった。

全ての色が普通とは全く違い怪しい銀時は、まだ忌み嫌われる理由が解る。

だが鴉も銀時と同じように忌み嫌われる理由がある。

それこそが色。

銀時とは違い何から何まで真っ黒で生まれてきた鴉。

しかし、人は不気味に思ったのだ。

全てが黒一色に染まっている鴉を。

何かの色いろ一色いっしょくになっているものは不気味。

なぜならそれ以外の色が存在しないから。

黒一色

周りの色とは全く違う異物。

だから人に嫌られるのだ。

そんな事を悟った銀時は、鴉の事をどうしても不気味とは思えなかった。

(一応確かめてみるか)

銀時は鴉達によって体をボロボロにされた屍を引っ繰り返しては食料を探してみる。

だが、案の定先程の推測どおり、食べ物となる物はその戦場には無かった。

その事実をこの場でまだ調べてはいなかった最後の屍を確認し終え理解する。

( ちゃっぱり・・・ )

何時間かけて結局無駄足。

ただでさえ疲労困憊<sup>ひろいこぼれ</sup>で身体が悲鳴を上げていると言つのに無駄な労力を使ってしまった銀時は、その場で空を仰ぎ見てから大きな溜息をついた。

「結局無駄足でしたね」

山崎が大きな溜息を漏らしている銀時を見ながら残念そうに呟く。

「もう体も限界に近いだろうに・・・」

近藤はそんな山崎の言葉に付け加えるように言う。

「銀ちゃん・・・私ならもうとっくの前に飢え死にしてるアルよ」

俯きながら言ったのは神楽。

土方はそんな皆の言葉を聞き一言言葉をかける。

「確かにこれはかなり苦しい状況だが安心しろ。ヤローは死んだりしねえよ」

その一言は、今現在飄々（ひょうひょう）と生きている銀時の姿があることで確信して出たものだった。

皆を励ますためにかけた言葉。

だが、無情にもその言葉をかけた土方に対して毒を吐く人物が。

「そんな事はこの場にいる誰でも知ってる事でさあ」

沖田だ。

沖田が土方に恥をかかす様な事を言ったのだ。

一瞬だけ眉を引く付かせた土方だったが、何とか怒りを押し殺し、土方は「そうだったな」と小さな溜息を漏らしながら言うのであった。

銀時は再び食料となるものを求め歩き出した。

銀時はそれから直ぐ近くにあった屍の山を見つけた。

その場は先程の屍達とは違い、刀傷や銃弾で穴を開けられているだけの綺麗な体に、真っ赤な色の血をその傷口から噴き出していた。

(ここはまだ新しい)

その風景を見てそう思った。



「銀さん……こんなものを見てなんとも思わないなんて」

銀時が何度も訪れる場所である戦場。

その度日<sup>たんび</sup>に銀時から離れる訳には行かないと覚悟を決めた新八・神楽・山崎は、この風景を見て何時<sup>いつ</sup>も恐れを抱いていた。

「これがヤローの日常になってるんだろう。日常で起こる事にいちいち特別な感情を抱くものはないからな」

近藤が三人を心配していながらもその事実を述べる。

それを聞き頭こぶを垂れ、悲しそうな瞳で銀時をまた見守る為ために頭を上げた三人。

この屍の山からは干物がいくつか出てきた。

この場にあつた最後の屍を確認し終えた所で、その干物を一気にお腹に収める。

全ての干物をお腹に納めればほとんどの空腹感は無くなった。

干物というものはかなり腹の足しになるらしい。

そんな事考えていた時、ふと、足音を消すようにして近付いてくる者の気配を感じた。

銀時はそれに気づき振り返る。

そこにいたのは・・・



親が働いて稼いだ金普通に使ってるけど、そのありがたみが解ったら後々親が  
「ジャンプ発売まで待ちどおしーぜ」  
ですよ〜

「あと二日か〜」

今日も入れたら二日ですな〜

「あの金時ってやろう許せねーぜ」

私達も銀時様を応援しています！

「必ずタマの仇取ってやる！」

あの、聞いてますか銀時様！？

「あ〜聞いてる聞いてる」

ヒドイ……

銀時様は人の話をちゃんと聞いてはくれないようです（しゅん）

包丁持つてる時にそのまま人に近付くのは止めよう！ホント危ないから！  
銀時様を苛めるのが好きな私はこんなものを書いてしまいました、  
後から後から銀時様に対してただ罪悪感を持つだけです・・・

でもやはり傷ついておられる銀時様は素敵ですね^^

こんな事を言ったら皆さんに嫌われてしまいますか？

それは悲しいですね・・・

包丁持つてる時にそのまま人に近付くのは止めよう！ホント危ないから！い  
後ろから気配を感じた幼子。

正確には、殺気を幼子に飛ばしている男の気配を感じた。

誰かと思いふと振り返る。

振り返った先にいたのは、見覚えのある男だった。

(父・・・さん?)

その幼子の父は刀をゆっくりと振り上げ、幼子を殺そうとその後ろ  
に立っていた。

それを見た瞬間、何が何だかその幼子は分からなくなっていた。頭

が真っ白になる。

そんな中、頭には疑問の言葉が次々浮かんできた。

(えっ?・・・いつから追って・・・なんでここに?)

・・・どうして?

・・・なぜ俺を・・・

・・・やっぱり、殺されるの?

俺、存在してちゃいけなかった?

もしかして、生きてるだけで悪い事だった・・・?)

そんな事を思った幼子は、刀が振り下ろされる瞬間、意識をその手から手放そうとした。



そしてっ！

幼子に刀を振り下ろそうとする父。

そしてその幼子に届くはずのない声を上げた土方達。

「銀ちゃん！」

「銀さん！」

「万事屋！」

「旦那！」

皆が声を上げたその瞬間ッ！

刀がその小さな幼子の後姿に振り下ろされた！

そつと目を開けて見ればそこには血を吐いて倒れる元人間であった  
「物体」が己の横に転がっていた。

なぜだか分からない、なぜ、死んでいる？そんな疑問が頭の中に思  
い浮かぶ。

だが、己の手に握るものを見れば、答えは簡単だった。

そう、自分が父を殺したのだ。

手にしていたのは小さな小刀。どこで持ってきたのか、まして構えた記憶もない、それでも自分はその小刀で実の父を刺し殺した。

(俺？父さんを殺したのは俺・・・？いつ・・・どうやって？)

理解が出来なかった。

一瞬の間だけ、頭が真っ白になり何も考えられなかった。

だが、ふと記憶が甦る。

刀を構えた記憶はない、しかし目を瞑る少し前、父親の懐から、小さな小刀が除いていたのを見た。

そして、そこで記憶が途切れた。

ことを理解するのに必要な情報はそれだけで十分だった。

(ああ・・・父さんを殺したのは・・・俺か)

幼子は納得した。

殺される時、無我夢中でその短刀を抜き取り、己<sup>おの</sup>が手で父を刺し殺した、己の命を守るために殺したと。

「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
ハツハハツ  
・  
・  
ハハハツハハハハハハ  
」

(俺が殺したんだ・・・)

父さん、をこの手で殺した・・・

存在してはいけなかった俺が・・・

鬼の子である俺が！)

幼子の心には、大きなひびが入ってしまった。

・・・なんで、なんで父さんを殺した

・・・自分の命欲しさに殺した

・・・死にたいと思っていたくせに

・・・殺したんだ、俺が。

・・・どうして・・・殺した？

・・・なぜ、殺す必要があった

笑う、笑う。

幼子は壊れてしまったかのように空を見上げ笑う。

その頬にはまた、涙が伝う。

心に入ってしまった傷は、決して自分が殺されそうになって出来てしまったのではない。

血縁者に殺されそうになっただからでもない。

そう、自身の手で愛する者を刺し殺してしまった為に出来てしまった傷……



刀が振り下ろされた時、殺されると分かってても、父に恐怖は感じたが、憎みはしなかった。

殺されるんだと覚悟すら決めた。

決めていたのにも関わらず、愛していた善の父を、己が手で殺めてしまった。

幼子は笑いながら、泣きながら己を酷く呪った。

そんな幼子が壊れてしまった様子を、ただ見ていた土方達。

「万事屋・・・」

それ以上のことは誰一人として言えなかった。

そして、その場にいた者達のその心には、目の前で笑い、泣いている幼子のものなのか、その幼子に対して、幼子にこんな酷い扱いをしてきた者達に宛てたものなのか、よく分からない様々な感情がただ、浮かんでは重く心の奥底に沈んで行った。

そう、負の感情が・・・

☐

・・・辛い・・・

・・・悲しい・・・

・・・嬉しい・・・

．．恨めしい．．

．．悔しい．．

↳

そして、何に対してなのか分からない怒りの感情。

地面に両足をつけ、ひたすらその感情の波に耐えようとしている。

だが、その瞳からは涙が止め処なく流れ、胸を押さえていて、見るからに痛々しい。

この時初めて、この場にいた者の感情が交わり交差した。

しばらく空を見上げて佇んでいたが、幼子は何事も無かったかのよう  
うにふと足元に目を戻した。

その頬には涙が一粒だけ伝い落ちる。

そして何時もどおりその足元にあった父の屍を引つ繰り返してその懐を探る。

(何も無い・・・)

それだけ確認すると、幼子はまた歩き続けた。

次の戦場に向かって・・・

幼子と同じようにその場に泣き崩れていた者達は、ふと、先ほどまでの深く思い感情の嵐から救われた。

「あ、あれ？さっきまでの・・・」

その先を言おうとして言葉に詰まった新八。

先ほどの辛い感情を思い出してしまったのだろうか。

だが何を言いたいのかこの場にいた全員は理解した。



「さっきまでの感情の嵐のようなものは、信じられんが万事屋のも  
のだったんだろう」

近藤が口を開く。

だが神楽は近藤の話聞いて尚更不思議だと言う様に呟く。

「急に苦しくなくなったアル・・・一体なんで」

それに答えたのは以外にも土方だった。

「ヤローはあの感情の嵐に耐え切れそうになかったから、心を閉ざさ

したんだろつよ・・・あのままだったら心が完全に壊れる・・・」

そんな土方の顔にも、涙が流れた跡が残っていた。

「副長・・・」

さすがの新選組鬼の副長と呼ばれようと、あの負の感情の嵐には耐え切れなかったのだらう。

それをあの小さな体で抱えていたのだと思うと、この場にいた者はとても心苦しかった。

しばらくの間、その場を去っていく小さな幼子の後姿を、その場にいた全員が眺めていた。

皆、それぞれその後姿に何を思うのか、ただ静かに眺めていた。

二十歩ほど進んだところだろうか、幼子は何を思ったのかふとこちらの方を振り返った。

そして振り返った幼子のその瞳は、普段目にした事も無いほど綺麗な色を浮かべていた。

その瞳はただの純粹な子供の目に戻っていた。

いや、浄化されていた。

今までの苦痛など全て忘れてしまったかのような綺麗な瞳。

全てを受け入れ、悟ってしまったかのような・・・

綺麗だけど、どこか深い悲しみを帯びたような・・・

幼子は実の父を殺めてしまっても、命を落とそうとはしなかった。

あんなに泣き叫んだ筈なのに、己を憎んでいた筈なのに。

心を土方の言つとおり閉ざしてしまつた所為なのかどうなのかは分からない。

ただ言える事は、それはその幼子は本能の従うままに生きようとしているという事と、全ての事を受け入れたのだということ。

けれど、幼子が生き延びるにはあまりこの時代は厳しすぎた。

食べ物は今まで通り屍から剥ぎ取つてでしか得ることは出来ず、さらにはその幼子にある噂が流れていた為、その命をより一層危険にさらしていた。

「屍を喰らう鬼」

それを退治しようとしてそれから幾人もの人が、その幼子の前に現れるようになる。

初めての「敵」は実の父だった、なぜ父は自分を殺しに来たのかは未だに分からない、興味もなくなってしまった。

だからこれから知ろうとする気もない。

だが、二度目にその幼子に刀を向けたものは確かにこう叫んだ。

「鬼、死ねっ！」

その日は、何時ものように戦場を渡り歩き、行着いた屍の山の中で飯をとっていた。

そんな時、後ろから懐かしい気配を感じた。

そう・・・

殺気を飛ばして歩み寄ってくる者の気配。

咄嗟に幼子は周りを見渡した。

そして近くに転がっていた屍の腰に挿してあった物を抜き取り、その抜き取った物をその気配に向かって突き出した。

もちろん抜き取った物とは「刀」である。

結果、その「刀」を突き出された者は、その腹に大きな刀傷を作り、前のめりに倒れた。



(鬼・・・ね)

幼子は父を殺した後のように、足元に転がった「物体」を探りながらそんな事を思い直し、己に大きな自嘲の念を抱いた。

正確には哀れみにも似た念だ。

そして同時に思う・・・

( 鬼なんて・・・ )

心が重くなっ  
たような錯覚さっかくが起こる

(・・・お前等の方じゃねえか)

そう心の中で呟いた……

「銀ちゃんの考えてる通りアル。本当の鬼は……銀ちゃんを襲って  
くる大人達の方アルヨ……」



包丁持つてる時にそのまま人に近付くのは止めよう！ホント危ないから！いきなりここで予告コーナ〜

次回予告を坂田銀時様からどうぞ〜^^

「めんどくせえーなあ。やっぱりやらなきゃ駄目か？」

饅頭二個とみたらし団子十本で手を打ちましょう

「任せとけ！」

〜目に見えてるものだけを真実だと思い込むな！物の本質はその中身だ！〜

俺を殺しに来る大人達

なんで？

そんな疑問など抱いているだけ無駄

気が付いたら目の前には物と成り果てた者達が転がっている

そして俺は流すんだ

決して誰にも見えはしない、見せはしない

心の奥で流す涙・・・

目に見えるものだけを真実だと思い込むな！物の本質はその中身だ！（前書き

やばいっスね・・・

マジでやばいっスわ（汗）

明日投稿するはずのネタ、大体の流れは思いついているのに肝心の  
中身が書けてない！！

どうしょ・・・

これ、マジでやばいっスわ・・・

目に見えてるものだけを真実だと思い込むな！物の本質はその中身だ！

幼子はそれから何一つ変わらず戦場を渡り歩いては食い繋いでいた。

その度に命を狙って来た輩も、屍から剥ぎ取った刀で何とか対処していった。

いつしかそうするうちに幼子は刀を扱う事に長け、我流の剣さばきを会得えとくしていた。

大人一人や二人斬って捨てるのはもう雑作も無い。

普通ならばまだ遊んでいて当然の、親に守られていて当然の子供が………

その様子を間近に見ていた新選組はある時こんな事を口走ってしまった。



「旦那が強いのも当然ですぜい。こんな餓鬼ン時から命の取り合いしてんですから」

「俺達とは比べ物にならねえ程の修羅場を掻い潜<sup>か</sup>つてきてる。経験の差が違う……」

「俺が旦那だったらもうとっくの前に生き倒れてますよ」

「ああ」

そのどれもが感心と言った様なものだった。

それとは相反した思いを抱いてしまった新八・神楽。

「銀ちゃん、人を殺す事に何の疑問も抱かないようになって行ってるアル・・・それが当然と思っけてきてるヨ」

「確かに銀さん、人を殺していく事に何の違和感も覚えてない・・・」

そう、哀れみにも似た、喪失感のような感情を抱いていたのだ。

今まで見てきた銀時はほんの一部分であり、自分はまだ本当の銀時を知らない事への失望感。

だが皆はまだ知らない。

銀時は別に、人殺しを当然と思っけて生きている訳ではないという事を。

殺される前に殺してしまわないと、自分が殺されてしまうという事に大きな絶望を、その深く閉ざした心の奥にしまい込んでいる事に・・・

神楽達でも共有し得ない本当の心内。

全てを受け入れてしまう事で心を閉ざした。

屍の中にと誰かが近付いてくるのが解る。

殺気を飛ばしているから・・・

屍が吹き出している血の音がするから・・・

大抵の奴は俺の後ろを狙ってくる。

(また・・・)

殺気を感じると共に深い悲しみが胸を押しつぶしそつになった。

自分を殺しに来た者がいる事ではなく。

自分を狙って来たばかりにここで死んで行く羽目になる者達に対して。

だが、表面上心を閉ざしているため新八達もその事実気が付いていない。

全てを受け入れてしまえばどこか達観たっかんした気になる。

だからと言って完璧に悲しみを拭い去れるわけではない。

殺気を感じ取れば体が勝手に動いてしまう。

最初の太刀は横に動き避ける。

大人相手の太刀をまともに受ければあっという間に殺されてしまうから……

その後直ぐ後ろに回りこみ心の蔵を目掛けて刀を一突き。

それが駄目なようなら懐に入り込み突き刺す。

刀が相手を突き刺すと同時に突き刺された相手は「グハツ」と呻き声を上げる。

直ぐさまその刀を抜き取り相手から離れる。

そうしなければ自分も一緒に地面に倒されてしまうから。

体は地面に倒れこみ刀を刺さされていた場所は塞<sup>せ</sup>き止める物が無くなって大量の血を地面に流し血の池を作り出す。

その様子をじっと見つめて相手が動かなくなれば身包みを剥ぎ取るため近寄る。

その度日たんびに銀時は心の奥底で屍に話しかけた。

(ごめん。でも俺も殺されたくないんだ。俺なんかほっときゃこんなところで死なずに済んだのに・・・)

だが、こんな事を思っているとは銀時自身気が付いていない。

これは、銀時自身も気が付いていない本当の気持ち。

神楽達すらも気がつけられない銀時の心内。

けれど、これこそが本当の気持ちなのだ。

だから流した。

自分が人を殺すたびに流した。



自分が人を殺してしまう事に、自分の所為でその人が亡くなってしまふことに悲しみを覚え流した。

自分は奪つ事しか出来ないのだと・・・

銀時自身も気が付かぬうちに、その心は涙を流していた。

そんな事とは知らずに神楽と新八も涙を流す。

本当は人を殺すたびにどれだけ銀時が傷ついていつているのかも知らずに……

表面上の、自分の頭に伝わってくる銀時の感情・考えだけをみて涙を流す。

銀時が人を殺す事に何も感じてはいないという事実<sup>に</sup>涙を流す。

「銀ちゃん……なんでヨ。何で、人を殺す事に躊躇<sup>ためら</sup>いを持たないアルか？」

その青く綺麗な瞳からは大粒の涙がその白い頬を伝い涙が流れていく。

「銀さん、人を殺す事を当たり前のように思わないでください・・・

」

顔をグシャグシャに歪め、涙を絶え間なくその服に染み渡らせる。

目の前で屍に手を滑り込ませている様を目にしながら二人は銀時の過去に深い悲しみを覚えた。

新選組はそんな銀時の過去を見て思った。

もし、銀時が自分達の敵になったとしたら・・・

それはありえない事ではあるが、思わず想像してしまい身を震わせてしまった。

誰一人、本当の銀時の苦しみを知らうともせず・・・

目の前で起こっている事だけにとらわれ、銀時に対して様々な感情をその心に抱いた。

はたしてこの事実を知ってしまえば、今旅館で皆の看病をしている銀時はなんと思っただろうか。

悲しみを覚えてしまうのだろうか。

それとも、仕方がない事だと受け止めるのか。

いや、同じように己に対して深い悲しみを覚えるのかもしれない。

なぜなら、『あの人』に会うまでの自分は、本当に哀れな子だったのだから。

## 旅館

「んあ？なんでコイツ等涙流してんだよ。そんなに辛くなるほど温泉にでも入ってたのかよ」

呆れたような溜息を漏らしながら三人に団扇うちわを扇あおぐ。

「神楽ちゃん達そこまでして温泉に浸かっていたのかしら？」

浴衣の前をだらしく肌蹴はだけさせている銀時の反対側では、銀時とは違い、しっかりと浴衣を着込んで銀時と違う三人を仰いでいるお妙がいた。

銀時が五人を部屋に連れてきた時、お妙も銀時と同じような理由で神楽をその背に背負っていたのだ。

銀時は 神楽・新八・近藤を……

お妙は 土方・沖田・山崎を……

銀時が扇あおいでいる三人と山崎だけが涙を流し、土方・沖田はその額に小さく汗を浮かべていた。

お妙は神楽が泣いている所を見て、顔に手を添えながら気の毒そうに続ける。

「よっぽど銀さんの世話が大変で疲れていたんでしょう。だからの

ぼせるまで温泉に……」

大きな溜息をつきながら冷めた視線を銀時に向けた。

銀時はその視線に気づき慌てて訂正を入れた。

「いやいや誤解だからね？大体神楽ちゃんはある俺の為に動いてくれないからね？何時いつも好き勝手に動いてるだけだからね？」

銀時は冷や汗を流しながら言う。

それでもお妙は「なら、新ちゃんは銀さんのために一生懸命働いてるじゃない」と言い返す。

最後はお妙が折れ、渋々納得したような態度を取った。

銀時はお妙の怒りに触れずに済んで本当に嬉しそうだ。

そんな口論の中、先程の四人はいつの間にか泣き止んでいた……

因みに、近藤はお妙が扇あおぐのを断固拒否したため、仕方なく銀時が仰いでやることになったのだ・・・



目に見えてるものだけを真実だと思い込むな！物の本質はその中身だ！（後書き

ルンルンルンルンルン

「本当家の作者はのんきだな〜」

「そうアルヨ！なんでお気に入り登録増えたからてそんなにはしゃげるアルか！？理解できないアル！」

そうは言っても酢昆布一個でテンションが上がる神楽・・・（プツ）

「（カチン怒）銀ちゃん、ここの作者半殺しにしてきて良いアルか？」

「別にいんじゃない〜？」

「フフフフ。この歌舞伎町の女王、神楽様を侮辱するとは・・・この腐れオタク志願者がああああ！！！！！！！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
ぎゃああああああああああ！！！！！！！！！！！！

子供の頃ってあんなに時間が長いつて思っていたのに、だんだん歳を取っていく

前書き もう少ししたら松陽先生と銀時様の出会いだ（笑）

楽しみ楽しみ

けど・・・

あそこアニメ化（映画化）された部分だから比較されるうえにすごい短く終わるんだよね

その日だけは三話投稿しようかな

子供の頃ってあんなに時間が長いつて思っていたのに、だんだん歳を取っていく

父から始まりそれから幾度ともなく命を狙われた。

刀を殺気に反応して振るつ。

振るおうとしなくても体が防衛本能で勝手に動いてしまう。

最初こそ気が付けばそこには屍が転がっていた。

だが今ではもう、自分で考え殺気を飛ばしてくる奴等を自らの考えで刺し殺している。

そうでもしなければ自分が自分ではなくなってしまう気がしたから……

相手を殺すのは、そうでもしなければ自分が殺されてしまうから……

己おのれが血に染まる度たびにあの『河』へ訪れた。

なんと皮肉な事が・・・

初めて来た時、己自身の血を洗い落とすためにその河に身を浸けたというのに、今では他人の血を洗い落とすためにこの河に身を付けている。

己が綺麗だと称したこの河を、己おのが手で殺めた者の血で汚してしまっている。

(馬鹿だな・・・)

たまにそんな事を思ってしまう。

この『馬鹿』という単語は、俺を殺そうとした夜盗やとうが口にしたものだ。

「何でこんなところにこんな餓鬼が？」

迷い込んでしまった山の中で出くわした三人組の夜盗。

「お、おい！その髪の色に瞳の色・・・」

俺を指差して目の色を変えた一人の仲間。

「屍を喰らう鬼！？」

もう一人は明らかにおびえの色を隠しきれていない。

「へっ！馬鹿言っでんじゃあねえよ！こんな餓鬼に何怯えてんだ？」

後ろに後ずさる仲間二人に嘲りあざけの言葉をかけ、俺の方に向き直る。

瞬間俺に刃はしを向けた。

殺気は感じられなかった。

こいつ等は今までの連中とは違い、俺に殺気を放たない。

ただ俺を殺そうとする事を楽しんでいるようにしか見えない。

殺気というものは相手を『殺そう！』と思い発せられるものだ。

だがこう言った輩の『殺そう！』と気は、今までの奴等とは根本的に違う。

男は下卑た笑みをその酷くも醜い顔に浮かべる。

アイツが『鬼』に向かつて刃を振り下ろした。

俺たち二人は瞬間的に目を瞑ってしまった。

ズシヤッ！

鈍くも大きな音と共に頬に何かが飛び散る。

鼻腔を擽るこの錆た鉄のような臭い……

俺たち二人は『鬼』をアイツが始末したんだと思った。

「やったじゃねえか！鬼を殺したともなれば村の連中が進んで食……



・・・  
「

言いかけていた言葉はそれ以上続ける事が出来なかった。

目の前には首から頭が無くなって、その斬り口から噴水のように血を吹き出すアイツの姿があった。

俺達はコトンという音に反応し反射的にそちらの方を振り返ってしまった。

ゴロツゴロツ

俺たち二人の間に転がり込んできたアイツの顔・・・

俺達の頭が考える前に体が勝手に動き出していた。

「向かってこなきや良いのに・・・」

アイツの体が床に倒れこんでいく。

その『鬼』はそれに巻き込まれないようにそこから横に体をそらす。

その隙を突いた

つもりだった・・・

けどっ！

気が付けば手首から先がない、痛いという感覚もない・・・

俺の隣ではもう一人の仲間が倒れこんでいったのが見えた。

次の瞬間・・・

「馬鹿・・・ね。確かにお前等は馬鹿みたいだ・・・」

その鬼が微かに曇った表情を見せた。

ドサッ

最後の一人が大きな音を上げてその場に倒れこんだ。

「馬鹿か。そんな言葉があるんだな・・・」

軽く曇った空を見上げて今の言葉を覚えるかのように復唱した幼子。

その幼子は数秒空を眺めていたかと思うとその場を後にした・・・

その日の空は、幼子が生まれて一段とどす黒い色をしていたそう  
な。

時が経つのは早い。

夜盗の件があつてから今まで以上に来訪者が銀時の前に現れた。

大抵の者がその懐には飯を抱え込んでいた。

おそらくは弁当だったのだろう。

村から追い出されて早三年。

だが、子供にとっての三年というものは果てしなく長い時間。

そんな中、ほぼ毎日銀時を殺しに来るものが現れた。

しかし、月日が経っていくにつれその数は減っていく。

銀時が皆返り討ちにしてしまうから恐れてしまったのだ。

銀時はそんな毎日を送り、幼子から少年へ成長して行った。



子供の頃ってあんなに時間が長いつて思っていたのに、だんだん歳を取っていく

「最近どうしても腹の調子が悪いみてーだ。いだだだ」

「どうせまた拾い食いでもしたんでしょ？」

「ちよっそれ誤解！なにその前もやりました的な言い方は？俺悪いけどまだ拾い食いしてないからね！？ギリギリっぽい話は出てきたけどあれはちゃんとバーさんが持ってきた奴だから！大丈夫なはずだから！」

「はいはい。わかってますよ」

「新八？目が疑ったまんまだよ？」

「気のせいですよ、気のせい」



何時も何時も金・金・金・金・金ってお前は金の亡者かって良く言われるけど、生き

なんで銀時様ばかりこつも辛い目にあってしまわれるのでしょうか・

・・（泣）

私、私！

もつともつと銀時様に幸せになってもらいたいですわ（一生懸命）

バコッ

「おいおい、何処の三流芝居ですかコノヤロー。大体この話し書いてんのお前だから！お前が俺をこんな目に合わせてる張本人だから！」

いだだだ

もう、痛いじゃありませんか銀時様！

「テメえーのせいだろーが」

・  
・  
・  
・  
・  
・

何時も何時も金・金・金・金・金ってお前は金の亡者かって良く言われるけど、生き

だがある日、その幼子が少年になったばかりの・・・

五歳になったばかりの頃、ある出来事が起こってしまつて。

そう、この出来事がさらに銀時を苦しめることになってしまった。

ボロ小屋近く

そう、あの日は何時ものように屍の集まる戦場を捜し求めて歩いていた。

だが、何時もと違う事が一つ、村と思われるところから一キロ離

れたところに、小さなボロ小屋が合ったのをたまたま見つけたのだ。

村に入ればまた「鬼」と罵られ殺されそうになる。だからあえて村には今まで近づこうとしなかった。

でも、ここは村とは違う。その日はなんとなくの気まぐれでそのボロ小屋に近付いてみたのが始まりだった。

「いい加減にしゃがれ！一体いつになったら金返すんだ！？」

そのボロ小屋にちょうど近付いて家の中の様子を伺おうとした時、男性の怒鳴り声と思わしき声が家の中から聞こえた。

(誰かいるのか?)

その瞬間、「ドンッ!」と言う大きな激突音が扉のすぐ横の辺りでした。

「もう我慢ならねえ!お前見たいな役立たず、死ね!」

ビクッ!

その声を聞いた途端、銀時は小さな電流が体に走ったような衝撃を受けた。と同時に、その家の中に入り込んでいた。

家の中

ヒュンッ！ ザシユッ

殺されると瞬間的に感じ、その次に来るであろう衝撃に思わず目を瞑った。

だが・・・

「大丈夫か？」

上の方から声が聞こえた。

「え？」

なんで？そう疑問に思いながら声の聞こえた方に顔を向けながら目を開ける。

「ヒッ！」

そこにいた者は、銀色の髪に血を浴び、その瞳すらも髪に飛び散ったと思われる鮮血と同じ、深い赤色をしていた。

家の中（銀時視点）

「死ね！」

この言葉を聞き思わず体が動いてしまっていた。

家の中に入って直に目に付いたのは、男が刀を大きく振り上げ、

自分で突き飛ばしたであろうまだ四つにも満たない子供を殺そうと  
している、と言う場面だった。

別に意識をしていた訳ではない。だが、体が動いていたのだ。

( 殺されるっ！ )

瞬間的に判断した情報はただこれだけ、もちろん今回は銀時自身  
ではない。

それなのに体が動いていた。

( 助けなきゃ・・・ )



そう思った銀時の行動はとても早かった。

刀を振り下ろそうとしている男が、自分が入ってきた事に驚いている隙を狙い、その手に護身用として握っていた刀を振るう。

ヒュッ！ ザシユッ

刀が風を切る音の後に続いて聞こえた肉を切り裂く音。

刀が肉にのめり込む、そしてその場所からは血が飛び散る。

ドサッ

斬りつけた男が『生物』と言ったものから『物体』へと変わり、そのまま力をなくし、重力に従い床に倒れる。

次の瞬間、辺りは何事も無かったかのように静けさが戻る。

後に残っているのは床に転がっている血まみれの物体と、壁に背を預け腕で頭を強く覆い目を強く瞑っている少女だけだ。

「大丈夫か？」

手をその少女に差し出しながら聞く。

少女はその声に一瞬ビクッと反応したが、直に目を開けこちらを見る。

だが、こちらを見てまたも怯える。

「……」

（そうか、俺を……）

己の手に握られた刀を横目で見て、自分に怯えていると言つ事を判断する。

そして仕方ないなと言つようにその家から出ようとした。

しかし、出ようと出口の方に顔を、体を向けたその先に、先ほどの少女の父親である男が立っていた。

「俺の娘から離れる！この鬼！」

その手元には先ほどの少女と、足元に転がっていた筈の刀が握られ、こちらにその剣先を向けていた。

そしてその瞳には恐怖と恐れ、そういった意思が見て取れた。

それと同時に、己に向けられた殺気。

(なんで!?)

銀時には分からなかった。

(・・・なんでそんな・・・目で・・・)

それは当然の疑問でもあり、同時に戸惑いを促す原因でもあった。

剣先を向けた男は、そんな銀時の考えを知った事かと剣を振り回しながらこちらに向かい走ってくる

とっさの事に銀時はつい刀を振るってしまった。

(あっしま・・・っ！)

思ったときには既に遅し。

そこにはもう、息絶えた男の屍しかなかった。

父が目の前の『鬼』に殺されるところを目の当たりにしてしまった少女は、気が動転してしまった。

銀時に殺気むき出しで足元に運良く転がって来たその体では重い筈の刀を振りかざして、己の父と同じように向かって来た。

(・・・どうして?)

後に残されたのは、何時も見てきた血だらけの屍と、ただの虚しいという感情だけだった・・・

(何も悪い事なんてしてないのに・・・結局、俺が出来るのは、俺を守るだけ・・・?)

そう小さく呟いた声は、今現在銀時の過去を見ている神楽・土方達にも聞こえなかった・・・

その家を出たとき銀時が目にしたものは、夕日によってこの世界が赤く染まっている風景だった。

(血・・・)

声に出していた声なき声は聞き取れなかった。

が、その心で呟いた囁きは、心に痛いほど伝わってきた・・・

そして銀時はこの時に諦めた。

誰かに認めてもらおうとしていた最後の切実な願いをも、その手から切り離していたのだ。



「こんな重いもの、何で小さな餓鬼が背負わなきゃならないんだ・  
」

近藤のそんな呟きは、暮れつつある日の中に静かに溶け込んでいった。

しかし、その言葉は土方達の本当の心の内を代弁していたのだ。

そしてさらに深く、強く、誰とも分からぬ者に願う。

強いてあげるならばそう、神という存在に……

（銀ちゃん）（銀さん）にこれ以上辛い思いを味あわせないで  
（ヨ）  
（）

（これ以上コイツを苦しめないでくれ・・・）

（旦那を苦しめるのはやめろ）（ください）（）（）

何時も何時も金・金・金・金・金ってお前は金の亡者かって良く言われるけど、生き  
後書になんと書いてよいやら・・・

そつだ！

ここで皆さんに聞いて見たいと思います。

皆さんは後書に何を書いてもらいたいのですか？

じゃんじゃん投稿してこの私目に救いの手を差し伸べてください！

注射とか怖いものは凝視するんじゃないやなくて目を瞑るっつ。そっすねはいっの間にか

前書き 今回は短いため今日は三本投稿する予定です。

注射とか怖いものは凝視するんじゃないやなくて目を瞑るじつ。そつすねはいっこの間に

今度こそは助けられると思った。

でも、結局俺が殺してしまった。

俺には助ける事なんて出来ない。

俺には奪う事しか出来ない。

なら、もう助けなければいい。

無駄な接触が無いように・・・

もうこれ以上いらぬ者に心を奪われないように・・・

何も見なければいい。

見ようとしなければ傷付かずに済む。

”

俺はもう迷わない。

どうせ人間も俺なんか必要としねえ。



それなら迷う必要はない。

殺される前に殺してしまえば全てが終わる。

そう、嫌な事は目を瞑ってさえいねば……………

銀時は五歳を迎えて直ぐの頃、その心にとどめていた最後の希望を手放した。

銀時がある時から本当に人を殺す事に何の感情も覚えていないのだと勘違いしていた神楽達は、本当に銀時が心を閉ざしてしまった事をここ数日で実感した。

銀時は今まで殺気を飛ばして突っ込んできた者達だけを殺してきた。

まあ結局皆そうなやつ等ばかりだったのだが・・・

だが、心を完全に閉ざしてしまった銀時は、殺気を発している事に気づくと何の躊躇ためらいも無く殺した。

そう、本当に躊躇ためらいが無かった。

以前の時はまだその相手を殺せば

(何で俺を殺そうとした?)

なんて考えていた。

だが、今ではもうそれは必要事項であり日常。

簡単に言ってしまうえば生きて行くうえで必要な呼吸と大差なく  
なっている。

人はいちいち呼吸をする事に疑問を抱かない。

それは生きて行くうえで当然の事だから。

今の銀時にとって人殺しはそれとんなら変わらない。

「ヤローは何時までこんな生活をしてたんだ？」

土方はふと頭に浮かんでしまった現在の銀時の姿と、目の前の銀時の姿に違和感を感じ眩いた。

独り言のつもりだったのだろう。

「さあな。だが今の万事屋の人生を百八十度変えてしまっ出来事がこの後いつか起こるんだらうな」

という近藤の言葉に少しだけ驚きを見せていた。

だがそんな近藤の言葉どおり、銀時の人生を変えてしまっ出来事はもう少し後になって訪れる。

そう、今ではない………

もう少し先の事なのだ………

……それまで、銀時はたった一人で、全てを受け止めてきたのだ……



注射とか怖いものは凝視するんじゃないやなくて目を瞑るつ。そうすればいつの間にか

「俺さあ、思うんだけどこの話し面白いか？俺の過去かいてるだけじゃん。何良言い訳？」

「そうヨ！銀ちゃんの過去書くぐらいなら私を主人公としたロマンチック小説書いたほうがまだましヨ！」

「だめだな〜神楽が出ればシリアスどころか恋愛ものに持っていくのも一苦労だわ」

「失礼アルナ！私そこまでギャグコメ要素はないネ！」

「はいはい。嘘は泥棒の始まりだよ神楽ちゃん？」

「眼鏡は黙ってるアル！」

「何かいっつも思ってたけど後書きで書いてある会話の殆ど僕への嫌がらせだよな？」

それはきつと気のせいです！

両親がいきなり自分のために何か買ってきたら、何かの前触れかとも思うのは  
今週の銀時様超格好良いイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！  
！！！！

白夜叉姿の銀時様が何回も出てきたしあの

『『まいる』『』

って何！？

格好良過ぎるでしょおおおおおおおおおが！！！！

私を萌え殺す気ですかあああああああ！！

両親がいきなり自分のために何か買ってきたら、何かの前触れかとも思うのはま

何度目だろう

この河を見つけてからもう四年近くは経った。

一体何度この場に己の服や顔、髪に付いた血を洗い流しに来たんだらう。

水面に浮かんだ自分の顔をじっと見てみる。

まだ幼さは残っているが、初めてここに来た時よりかは全然成長している。

身長も伸びた。

昔は足首の少し上までであった着物の裾が膝の辺りにまでなっている。

(駄目もとで探してみるか・・・)

銀時は血の色に染まった竹幅も合わない着物を見て屍の山を想像した。

山を下り、何時ものようにその有限たる大地を歩き始める。

あの山の近くでは何故か戦は起こらない、その為いつも山に来る時、屍を探しに行く時はその余りの距離に苦勞した。

だが、自分のある一定のペースで歩いていれば以外に身体が楽である事にここ最近気が付くことが出来た。

それからはある一定のペースで歩くようにしている銀時。

そうやって今日も大地を歩き屍のある戦場を捜し求めていた。

お日様が顔を出し始めてから、丁度世間一般ではお昼時って言われる時間になってしまった。

だが見つからない。

ここ最近ではこのあたりであまり戦は行われなくなったらしい。

その為銀時は食糧を求めて全く見覚えの大地まで来てしまった。

(ここまで来てても死体が一個もないなんて・・・もしかしてもう戦争終わったとかか?)

なんて考えが頭をよぎるほど、辺りに屍らしきものは見当たらない。

（そうだったら俺、死ぬじゃん・・・）

ただ純粹にそうだった場合、銀時は己が死ぬのだと思い至りその事実を受け止めた。

別に死にたくないと思っていけないわけでない。

だが逆にそこまで生きたいとも思っていない。

自らを殺しに来た奴に殺されようと思つ道理は見当たらない。

だが逆に人を自らの生きたいという勝手な理由で殺す道理も見当たらない。

ただ、なるようになる。

それが銀時の生きる理由。

だから自分が死ぬという事に特別な感情は抱かなかった。

銀時が軽く自分の死んだ後はどうなるのだろうかと考え出した時、左前方からなにやら殺気が飛び交っているのが感じられる。

(なんだ、まだ戦争やってるじゃん)

そう、その殺気の正体は戦。

かなり離れてはいるがかなりの数なので銀時には解る。

銀時はその戦が終わるまで、近くにあった木の傍で身体を休ませた。

戦といってもこれはまだ小さい規模。

その為一時間もしない間に殺気は消えてなくなった。



）・・・終わったな）

銀時は殺気のなくなつて気配に気づいて大きなあくびを一口から吐き出す。

（もう少しあそこに残っている連中が立ち退くまで待ってるか）

銀時はそんな事を思いながら、もう数十分の間その木に身を隠した。

銀時がその場に来る頃にはもうすっかり夕方になっていた。

今回は今までとは違い、この場にはあまり血が飛び散っていない。

足元に転がる屍をよく見れば、身体や頭、あちこちに小さな穴が開いている。

(なんだ、この穴?)

い。  
その穴は銃弾によって出来た傷、だが銀時はまだその事を知らない。

第一銃なんて物が有る事すら知らないのだ。

（血は出てるけど刀で斬るより少ないな・・・）

銀時は屍によってあまり見えはしない地面を見て思った。

何時もならばかろうじて見える筈の地面は血によって見えたりはしない。

だが今日だけは見えた。

銀時は好都合だと言いたいような表情をしてみせる。

ゆっくりとしゃがみ込み何時ものように屍の懐に手をしのばせる。

カサカサッ

（ない・・・）

ゴソゴソ

(・・・)

スルスル

(ん?)

コソッ

銀時は全体の三分の二を調べた所で、その手に何かを握り懐から抜き取る。

その手には少し大きめの風呂敷が握られていた。

銀時は少し何かを考え、その考えがまとまったのかその風呂敷を肩にかけ、とりあえず他の屍の懐にまた手を忍ばせた。

今日の収穫は風呂敷一つ………終わり

(これだけか)

顔の前にその風呂敷を持ち上げて軽く溜息を付いた銀時。

(ここ最近あんままともな飯にありつけてねえのに見つかったのはこれだけか………)

明らかに意気消沈いきしょうちんといった体だてい。

銀時はしばらくの間その風呂敷を見つめていたが、「まあいいや」と呟きながらゆっくりと地面にその風呂敷を置き、中を拝見した。

「……………え」

(マジで?)

銀時はその中身を見て思わず驚きの声を上げてしまった。

なぜなら予想もしていなかったからだ。

どうせ有りはしないんだろうけども駄目もと探していたに過ぎないそれが、この風呂敷に入っていたるとは……

風呂敷の中身にあった物を両手で持って目の前で広げてみる。

辺りはもう暗いから余計わかりにくいのだが色は黒っぽいようだ。  
月明かりに照らされ形程度ならかるうじてわかる。

(丁度よさそうだな)

その風呂敷の中に入っていたのは着物。

しかも丁度銀時の身体に合いそうな・・・

もう誰かが仕組んでいたのではと思えるほど銀時にピツタシの着物だったのだ。

銀時は暗闇を良い事にその場でその着物を纏まとい出した。

暗闇の中、衣がこすれる音だけが当たりに響きその暗闇の中に吸い込まれていく。

今夜は丁度新月前夜。

月の光が少ない上に雲まで月を覆い隠して光を下界に届かないようにさせる。

「銀ちゃん何してるアルか？」



一応銀時の思考を共有しているため何をしているかは解っている神楽。

だが暗闇の所為でその姿が見えない。

人というものはそうだと解っていても、自分の目で見なければ信じられない生き物である。

そのため神楽は銀時が何をしているか気になっているのである。

とはいっても、雲がかかっていたのはほんの数十秒。

直ぐにでも銀時の姿は六人の視界に入る。

そこには先程手に広げていた衣を羽織っている銀時の姿があった。

先程までは血の色ですっかりもとの色の面影も無かった衣を羽織っていた。

だが、今日の前にいる銀時はその銀色の髪に良く映える黒い色の衣を着ている。

「良く似合ってるな」

土方はいつもでは絶対に言わない贅辞の言葉を口にする。

銀時はその着物を身に纏まとった後、まだ風呂敷の中に入っていた白い紙に気がつき手に取る。

その白い紙は手紙。

だがこんな暗闇では中など全く見えはしない。

第一銀時はその手紙に書いている文字すら読めないのだ。

銀時は一応開いてはみるが、結果は上記の理由の為中を確かめる事なんて出来なかった。

けれどその中になんと書いていたかは何となくで理解できた。

(息子に着物あげる前に死んで馬鹿みてー)

銀時はその手紙を冷めた目で軽く見やり、その手から放した。

地面に落ちる前にその手紙は風にさらわれた。

風にのって空へと舞い上がっていくのをただ、銀時はじっと見つめていた……………

”……………大切な……………息子へ……………”

・  
・ 風にさらわれて空へ舞ったその手紙を目にする者は誰もいない・

両親がいきなり自分のために何か買ってきたら、何かの前触れかとも思うのはま

「何か俺・・・・・・・・恥ずかしいんですけど・・・・・・・・」

「どうしたネ銀ちゃん？」

「何かこの作者すげー俺褒めてくれんのは嬉しんだけど・・・・・・・・俺褒められなれてないから・・・・・・・・」

でも本当の事ですよ！！！！

「やっぱこの作者恥ずかしいわ・・・・・・・・」

「それは納得ネ・・・・・・・・」

ッ！

二人してヒドイッ（泣）

大切な記憶ほど、実は思い出したくない記憶だったりする……のか？（前書き

初めて絵を入れてみました！

変かもしれませんが感想が気になるのでお願いします！

大切な記憶ほど、実は思い出したくない記憶だったりする……のか？

その日、何時ものように屍から食い物を剥ぎ取った少年は、屍の上に腰を下ろしながらそれを口に運ぶ。

今日は何時もより少しだけ鴉かひやが多い。

ふとそんな事を頭の隅で考えながらも、珍しく豪勢な食事（おにぎり二つ）にありつけた事に喜びを感じ、そのおにぎりにかぶりついた。



(何日ぶりだった?)

最近は攘夷戦争が少しだけ激しくなってきたのか、屍から食事は見つかっても、血に塗まみれて食べれるものが中々見つからなかったのだ。

そのあまりの空腹でおにぎりを己の胃に入れる事だけに夢中になり、気が付かなかった。

その少年に近づくと影に……

異臭を放っている物体に腰掛けおにぎりを口にほおばっている銀時を見ていたが、新八達はその少年

近づいていくその影に気づいた。

いつもならとつくの前に気が付いてその男を斬っている筈だというのに、

銀時はその男の気配に全く気が付いていない。

思わず声を上げてしまつ。

「銀さん！」

が、例のごとく声は届かない。

そしてその影は少年に斬りかかり、少年が何時いつものようにその影を  
返り討ちにする。

だが・・・

そう思っていた一回は、その影の思わぬ行動に間抜けな声を上げてしまった。

「「え？なんで・・・？」」

「何なんだあのヤロー・・・」

「何を・・・」

その影は、おにぎりを食べ終えたばかりの少年の頭に、その大きな  
手のひらに乗せた。

> i 3 5 0 6 2 | 4 4 0 0 <

そして・・・

「屍かばねを喰らう鬼が出ると聞いて来てみれば、君がそう？  
・・・また随分と可愛い鬼が居たものですね・・・」

少年は突然の出来事に驚き慌ててその手を跳ね除けた。

そして、一定距離を取り、食べ終えたばかりで口についていた米粒

を舐め取り、  
己の身の丈ほどよりも長い刀を鞘から抜き取り構える。

(また・・か)

そう何時ものように考えて刀を手にした。

だが、その男が取った男はその少年だけではなく、新八達にも理解しがたい様なものだった。



男はその「童<sup>わらし</sup>」が自分よりも幾分も大きく、重い刀を軽々と抜き取る様を見て言ったのだ。

「それも屍から剥ぎ取ったのですか？」

そう言って少し微笑みながら続ける。

> i 3 5 6 2 1 | 4 4 0 0 <

「童一人で屍の身包み剥ぎ、みぐる、そして自分の身を守ってきたんですか・・・」

「大したもんじゃないですか」

だがここまで言って男は少しの間押し黙る。

そして、先ほどまでの優しい表情とは違う、厳しい、哀しい様な表情をしてみせた。

(来るか・・・)

そう考え後ろ足で踏み込む。だが・・・

「だけど、そんな剣、もうありませんよ。」

人に怯え、自分の為にだけ振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい」

その男はそう言うと腰に指していた刀に手をかける。

初めはその刀で切りかかって来るのかと思っていたが、どうやら違  
うようだ。

その刀に手をかけたその男は、刀を己の腰から抜き取った。

そして……

「くれて上げますよ、私の剣。」

そいつの本当の遣い方が知りたきゃあ付いてくると良い」

そう言つて己の刀を腰から抜き取り、その童に放り投げる。

その刀は今まで持っていたものより、剥ぎ取つてきたものより重く感じられた。

おそらくは良い値の物なのだろう。

童に刀を投げ渡し、その男は踵を返して歩き始めた。

「これからはそいつを振いなさい。」

敵を斬るためではない、弱き己を斬る為に・・・

己を護るためではない、己の魂を護る為に・・・」



男は言いたい事を全て言い終えたのであろう。

それから振り返ろうともせず、ただこの場を去っていくだけ。

（隙だらけじゃねえか・・・本当に俺を殺しに来たんじゃねえのか？）

しばらくの間そんなことを考えていたが、その男からは殺気は感じられない。

それに・・・

『そいつの本当の遣い方が知りたきゃあ付いてくると良い・・・』

> i 3 5 0 6 3 | 4 4 0 0 <

その言葉が気にかかった、少年は隙だらけのその男の背中についていくことにした。

「何で銀さんあの人が来たことに気づかなかったんでしょう？」

銀時が今まで何度も近付いて来た人を殺してきたのを見てきた新八

には疑問でしかた無かった。

そんな新八のどうでも良いような質問に答えたのは以外にも沖田だった。

「あの長髪からは殺気が感じ取れなかった、  
今まで旦那が斬り殺して来たのはみんな、  
揃いも揃って旦那を殺ろうって殺気を垂れ流していた連中だけで  
い」

それを聞き、今までの銀時の過去を見て落ち込んでいた神楽がふと、  
顔を新八の方に向ける。

「銀ちゃん、いままで自分を殺しに来た奴以外は殺さなかったヨ！  
逆に人を守るうとする事ばかりしてたネ！」

先ほどまでは暗い顔をしていたはずの神楽の顔が、その事実気づいてからか、何時もの笑顔に戻っている。

銀時は今と何一つ変わっていない、とでも思ったのだろうか。

実際その通りなのではあるが……

「あの人はいったい何が……」

新八が今までのやり取りをして感じた、正確にはそれ以前から感じていた疑問を口にする。

「どつやら旦那を殺しに来た訳じゃないって事だけは確かですね」

答えたのは同じように考え込んでいる山崎だった。

土方もその答えに同意すると言った様に相槌を打つ。

「ああ・・・」

「でも、だとすると一体あの男は何が目的何ですかねい」



沖田の問いに誰も答えない。

答えようにもその答えが分からないのだから仕方が無いのだが。

しばらく沈黙が続いていたが、近藤の一言でまた新八達はその男と少年の後を追って歩き始めた。

「良くは分からないが、とりあえず付いて行ってみよう。でなければ話が進まんぞ」

「それもそうですね」と皆して近藤の言葉に頷き、新八達はその血に染まっていた戦場を後にした。

銀時は一瞬だけその戦場を振り返って見たが、それから振り返ることは無かった……

その日、何時ものように屍から食い物を剥ぎ取った少年は、屍の上

に腰を下ろしながらそれを口に運ぶ。

今日は何時かいつもより少しだけ鴉カラスが多い。

ふとそんな事を頭の隅で考えながらも、珍しく豪勢ごうせいな食事（おにぎり二つ）にありつけた事に喜びを感じ、そのおにぎりにかぶりついた。

（何日ぶりだった？）

最近は攘夷戦争が少しだけ激しくなってきたのか、屍から食事は見つかっても、血に塗まみれて食べれるものが中々見つからなかったのだ。

そのあまりの空腹でおにぎりを己の胃に入れる事だけに夢中になり、気が付かなかった。

その少年に近づく影に・・・

異臭を放っている物体に腰掛けおにぎりを口にほおばっている銀時を見ていたが、新八達はその少年

近づいていくその影に気づいた。

いつもならとつくの前に気が付いてその男を斬っている筈だということに、

銀時はその男の気配に全く気が付いていない。

思わず声を上げてしまう。

「銀さん！」

が、例のごとく声は届かない。

そしてその影は少年に斬りかかり、少年が何時いつものようにその影を返り討ちにする。

だが・・・

そう思っていた一同は、その影の思わぬ行動に間抜けな声を上げてしまった。



「え？なんで・・・？」

「何なんだあのヤロー・・・」

「何を・・・」

その影は、おにぎりを食べ終えたばかりの少年の頭に、その大きな手のひらを乗せた。

> i 3 5 0 6 2 | 4 4 0 0 <

そして・・・

「<sup>かばね</sup>屍を喰らう鬼が出ると聞いて来てみれば、君がそう？  
・・・また随分と可愛い鬼が居たものですね・・・」

少年は突然の出来事に驚き慌ててその手を跳ね除けた。

そして、一定距離を取り、食べ終えたばかりで口についていた米粒を舐め取り、

己の身の丈ほどよりも長い刀を鞘から抜き取り構える。

(また・・・か)

そう何時ものように考えて刀を手にした。

だが、その男が取った男はその少年だけではなく、新八達にも理解しがたい様なものだった。

男はその「童」<sup>わらし</sup>が自分よりも幾分も大きく、重い刀を軽々と抜き取る様を見て言ったのだ。

「それも屍から剥ぎ取ったのですか？」

そう言って少し微笑みながら続ける。

> i 3 5 6 2 1 | 4 4 0 0 <

「童一人で屍の身包<sup>みぐる</sup>み剥ぎ、そうして自分の身を守ってきたんですか……」

大したもんじゃないですか」

だがここまで言って男は少しの間押し黙る。

そして、先ほどまでの優しい表情とは違う、厳しい、哀しい様な表情をしてみせた。

(来るか・・・)

そう考え後ろ足で踏み込む。だが・・・

「<sup>だ</sup>けど、<sup>そん</sup>な<sup>剣</sup>、<sup>も</sup>う<sup>い</sup>り<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>よ。

人に<sup>怯</sup>え、<sup>自</sup>分<sup>の</sup>為<sup>に</sup>に<sup>だ</sup>け<sup>振</sup>る<sup>う</sup>剣<sup>な</sup>ん<sup>て</sup>、<sup>も</sup>う<sup>捨</sup>て<sup>ち</sup>ゃ<sup>い</sup>な<sup>さ</sup>  
い」



その男はそう言つと腰に指していた刀に手をかける。

初めはその刀で切りかかつて来るのかと思つていたが、どうやら違  
うようだ。

その刀に手をかけたその男は、刀を己の腰から抜き取つた。

そして………

「くれて上げますよ、私の剣。」

そいつの本当の遣い方が知りたきゃあ付いてくると良い」

そう言って己の刀を腰から抜き取り、その童に放り投げる。

その刀は今まで持っていたものより、剥ぎ取ってきたものより重く感じられた。

おそらくは良い値の物なのだろう。

童に刀を投げ渡し、その男は踵を返して歩き始めた。

「これからはそいつを振いなさい。」

敵を斬るためではない、弱き己を斬る為に・・・

己を護るためではない、己の魂を護る為に・・・」

男は言いたい事を全て言い終えたのであろう。

それから振り返ろうともせず、ただこの場を去っていくだけ。

（隙だらけじゃねえか・・・本当に俺を殺しに来たんじゃねえのか？）

しばらくの間そんなことを考えていたが、その男からは殺気は感じられない。

それに・・・

『そいつの本当の遣い方が知りたきゃあ付いてくると良い・・・』

> i 3 5 0 6 3 | 4 4 0 0 <

その言葉が気にかかった、少年は隙だらけのその男の背中についていくことにした。

「何で銀さんあの人が来たことに気づかなかったんでしょう？」

銀時が今まで何度も近付いて来た人を殺してきたのを見てきた新八には疑問でしかた無かった。

そんな新八のどうでも良いような質問に答えたのは以外にも沖田だった。



「あの長髪からは殺気が感じ取れなかった、  
今まで旦那が斬り殺して来たのはみんな、  
揃いも揃って旦那を殺ろうって殺気を垂れ流していた連中だけで  
い  
」

それを聞き、今までの銀時の過去を見て落ち込んでいた神楽がふと、  
顔を新八の方に向ける。

「銀ちゃん、いままで自分を殺しに来た奴以外は殺さなかったヨ！  
逆に人を守ろうとする事ばかりしてたネ！」

先ほどまでは暗い顔をしていたはずの神楽の顔が、その事実気づいてからか、何時もの笑顔に戻っている。

銀時は今と何一つ変わっていない、とでも思ったのだろうか。

実際その通りなのではあるが……

「あの人はいったい何が・・・」

新八が今までのやり取りをして感じた、正確にはそれ以前から感じていた疑問を口にする。

「どつやら旦那を殺しに来た訳じゃないって事だけは確かですね」

答えたのは同じように考え込んでいる山崎だった。

土方もその答えに同意すると言った様に相槌を打つ。

「ああ・・・」

「でも、だとすると一体あの男は何が目的ですかねい」

沖田の問いに誰も答えない。

答えようにもその答えが分からないのだから仕方が無いのだが。

しばらく沈黙が続いていたが、近藤の一言でまた新八達はその男と少年の後を追って歩き始めた。

「良くは分からないが、とりあえず付いて行ってみよう。でなければ話が進まんぞ」

「それもそうですね」と皆して近藤の言葉に頷き、新八達はその血に染まっていた戦場を後にした。

銀時は一瞬だけその戦場を振り返って見たが、それから振り返ることは無かった……



大切な記憶ほど、実は思い出したくない記憶だったりする……のか？（後書き

「あの頃の銀時はホントに可愛かったですね」

「！？なんで松陽先生が！」

「おや、私がいてはいけませんか？」

「……………いえ」

「そうですね。ならいいのです^^」



過去の偉人さんって本当にすごいけど、なんか天然ってイメージがある！（前書

なんか本当にもうストック切れたんで明日から一週間ごとに投稿したいと思います。

というか決めました！

けれどここで一つ、皆さんに注意事項が！

一週間ごとと私は言いましたが何曜日に出すと決まったわけではありません！

その週のうちのどこかに出すっただけです。

こんな滅茶苦茶投稿ですみません

やっぱり物事計画的じゃないと駄目ですね（汗）

今回ばかりはしっかりと勉強になりました。

・・・はい

こんな調子ですが皆さん。

今後とも長いお付き合いをお願いいたします

過去の偉人さんって本当にすごいけど、なんか天然ってイメージがある！

戦場から離れた場所。

辺りに民家は無く、ただ大きな田んぼや畑、ススキ野原が辺りに広がっている。

夕日に染まった空を見上げれば、赤とんぼが優雅に空を舞っている。

トンボだけではない、周りからは秋と思わせる虫の音が聞こえる。

より正確に言うとするならば、コオロギのオスがメスに一生懸命己をアピールする為に、羽をひたすらすり合わせて秋らしい音色を奏でているのだ。

そんな中、その風景に自然に溶け込んでいる、灰色の髪の色をした一見女にも見える男の姿と、銀色の髪に赤い血を浴びた、この風景に不釣り合いな少年の姿が合った。

その後、男の言う通り付いて来ていた少年だったが、その歩く距離は童の、少年のそれにはかなりきついものだった。

いくら戦場を渡り歩いてきたであろう、その童ですら、さすがに疲労の色をその幼くも端正な顔にかもし出している。

(どこまで歩くんだよ、……てかつ足、速すぎ……)

そんな愚痴を心の中で呟いていた矢先、「あっ!？」といって少年はこけた。

足下に有った石に躓いてしまったのだ。

少し先を行っていた男だったが、それに気づいたのか少年の傍まで戻ってきた。

そして少年の傍まで来たところで、地面に膝をつける。

「すみません。」

この距離はさすがに厳しいですね、  
気づくことが出来なかった私の落ち度です」

そう言ってその大きな背中を童に向ける。

(何してんだ?)

「おぶさてください。」

後もう少いで私の家ですから

少年はおぶさるといふ言葉になおさら」「？」という顔をしていた。

それを見ていたその男は「まさか・・・」と驚きを隠せない様な顔をする。

「もしかして、おぶさるといふことを知らないんですか？」

「おぶさるって、なんなんだ？」

その少年は至極真面目な顔をして聞く。

男は思った。

(この子はそんな事も知らないのか・・・)

そう思うと胸が痛む。

だがそんな素振りは当然その子には見せない。

「仕方ありませんね」と言った風におぶさるといっものがどっぴうものなのかをその少年に教える。

それを聞いていた少年はその言葉の意味する事柄を理解した。

その様子を見ていた男は、「これから教える事がたくさんあるよ  
うですね」と呟いていた。

が、そんな事を呟いた男の言葉を、今の少年には理解できなかった。

それはその筈、「教える」と言う言葉の意味すら理解できていなかったのだから。

「おぶさる」と言う行動の意味を教えてもらった少年は、最初こそ戸惑い躊躇していたが、男があまりにも進めるものなので、嫌々その背中にその体を預けた。

男はしばらくの間、このいつまでも続きそうな長い道を歩いていたが、何かをハツと思い出したように、背負われていたその少年にある「問い」をする。

「あなたの名前を教えてください。」

いつまでも童ではあなたも辛いでしょう」

(名前・・・なんだっけ?)

少年は自分の名前を思い出そうとするが思い出せない。

いつまでたっても答えを返さない少年。

男はいつまで経っても返答しない少年に、男はどうしたものかと聞く。

「どうしたんです？あなたの名前をおしえてください」



いぶかしげな顔で後ろを振り返った。

自分の方を振り向いてきた男に、少年は少しの間間あいたまを作り言う。

「名前なんか……覚えてねえー」

そう、今まで、自分の名前を呼ばれたことなんか数えるほどしかない、その上名前を呼ばれたのはもう四年も前の事だ。

覚えている方が可笑的い、覚えている筈が無いのだ。

その少年はどういった気持ちでこの言葉を言い放ったのであろうか、その思いは、その本人と今この記憶を見ている者にだけしか分からない。

「鬼で良い・・・」  
「そう言われてきたから」

そう少年が言った時、一瞬だけ虫達が泣き止んだ。

だが直にまた、先ほどと同じ様に秋の音色を奏で始める。

少年はその言葉を背負われていて視界の狭まった地面をぼんやりと眺めながら言った。

表情はない。

が、その頭の中で普通は「寂しい」と感じる事を考えていた。

（俺に名前なんか必要ない。どうせ鬼としか呼ばれないんだから）

そんなことを考えてはいても、心を硬く閉ざしてしまった少年は寂しいという感情を抱きはしない。

ただそれが真実なのだからと、純粹に受け止めている。

男はその事を知らない。

だからこそ、その少年が予想もしていなかった事を言った。

「そうですか・・・」

では、私が名前をつけてあげましょう」

少年は「必要ない」と言おうとしたが、その前に男の言葉に遮られてしまった。

「そうですね、坂田銀時って言うのはどうでしょう？」

その名前を聞き、反射的にその男に聞き返してしまった少年。

「坂田、銀・・・時？」

「そうですね」

少しだけ顔を少年に向けた後、また前に顔を向け、さらに歩を進める男。

そしてその少年の質問に答えるように語りだす。

「昔、坂田金時という鬼が居たそうです」

「鬼？・・・俺と同じ？」

少年はそれを聞きどう感じたのか、背を男に感ずかれない程度に配慮し、軽く握り締めた。

だがそんな配慮もむなしく、背を掴まれている事に男は気づいた。

男はそれに気づいたが、その少年に何を言うわけでもなく、先ほどの話を続ける。

「そうです。あなたと同じ鬼と呼ばれていた者の名です。  
でも本当はその鬼は心優しい鬼、正確には人だったんです」

一旦話をここで区切り、足を止めオレンジ色に染まっている空を見上げる。

そして見上げたままその続きを語りだす。

「ある時、その鬼と呼ばれていた青年が住む山の近くの村が、他の鬼、本当の鬼に襲われたそうです。ですが、その村を襲っていた鬼を、退治した者がある時現れたんだそうです」

男の背に体を預け、男と同じように空を見上げながら話を静かに聞いている少年。

「その鬼を退治したのは、同じように「鬼」と呼ばれていた、その青年だったんです。」

姿形が異様で、初めのうちはその村の人たちに忌み嫌われてきました。

ですがそのうちその鬼の優しい性格に、その青年の本当の姿に、その村人達は惹かれていくようになっていったそうです。」

そこまで聞き終えその少年は顔を上げ言う。

「何が言いたいわけ？」

「いえ、ただあなたに似ていると思いましたから、どうですか？」

あなたのその綺麗な銀色の髪と同じ「銀」という文字を名前に宛ててみたのですが・・・

もしかして気に入りませんでしたか？」

男は自分の付けた名前が気に入らなかったのかと心配になり、少年の方を振り返りながら聞いた。

少年はいきなり振り返ってきた男に驚いたが、直すくに返答する。

「嫌いじゃない」

それを聞き安心する男。

そして、思い出したように自分のことを紹介する。

「ああ、自己紹介をするのを忘れていましたね・・・

私は吉田松陽よしだまつようと言います。

ほら、この先に見えるでしょう。私はあそこに住んでいるんです」



そうして松陽が指指す場所には、今までその少年が見てきた家より数倍大きな家があった。

銀時と名づけられた少年は感じたままの素直な感想を言う。

「でかい」

それを聞き「ええ……」と苦笑しながら松陽と名のつた男が言った。

「私は私塾を開いているんです。」

なので家と塾が一緒になっているんですよ。」

「塾？」

松陽は再び足を前に踏み出しながら言う。

「塾と言つのは、知らないことを学ぶ所の事ですよ。」

それを聞いてなんとなくだがその意味を理解した銀時。

だが、ふとある疑問を問いかけた。

「それで？」

俺をどうするつもりなんだ？」

その言葉を聞き、さも当然のように返す松陽。

「それは、鬼退治に決まっていますでしょう。」

人をやたら滅多に殺しまわる鬼なんて、決して居ては成らない、退治するのが当然なんですから」

「じゃあ」と言いかけた銀時を、松陽は勘違いしないでくださいと付け足した。

「確かに私は「鬼退治」と言いました。けれど銀時、あなたを殺すとは言っていないですよ」

銀時はその松陽の言う言葉の意味が理解できなかった。

そんな様子の銀時に、もう一言付け加える松陽。

「私は、あなたの中に住まう鬼を退治しに来たんですよ。自分自身を守るためだけに人を殺すその鬼を・・・」

銀時はそれを聞き、軽くその口元を緩めた。

(鬼なんて、最初からいねえよ・・・)

まるで、「鬼」と呼ばれる存在に同情するかのようだ。

まるで、そう言った松陽を嘲笑うかのようだ。

まるで、己を卑下するかのようだ。

そんなやり取りをすぐ横で見ていた新人達は、安堵のため息を漏らす。

「良かった。銀さんを殺しに来たんじゃないんですね、この松陽さんって人」

松陽の目的を知り思わず笑顔になる新八。

「銀ちゃんに名前つけてくれたのはこの人だったアルか！私この人好きヨ！銀ちゃんを初めて認めてくれた人アル！」

新八の反対側では、神楽が新八以上の喜びを、腕を振り上げ体全体で表している。

新八は腕と一緒に神楽が振り回している傘に当たりそうになり、何時ものように「ちよっと、危ないよ神楽ちゃん」などと突っ込んでいる。

「そうだな、まさか万事屋の名前はこういつ風に付けられただなんて、全く想像していなかったぞ」

そんな何時もと変わらない様子を見ながら、うつすらと微笑む近藤。

「ゴリラが微笑むとかキモイアルツ！」

いつの間に後ろを振り返ってそんな近藤の様子を見ていたのか、近藤にきつい一言を言い放つ神楽。

相変わらずの毒舌である。



「ちょっと！それって酷くない！？  
久し振りにかっこよく決めようとしてるんだから、カッコ良く終わらせてよ。お願いだからっ！」

涙目で必死に訴える近藤。

だが、そんなこと知ったことかと毒舌を吐き続ける神楽。

「ゴリラはゴリラネ！どんなにかっこよく決めようとしてもゴリラである事には変わらないヨ！」

そんな神楽に対して何時もの如く嫌味を言い放ち喧嘩を売る沖田。

「おいおい。いくらなんでも近藤さんに対してそれは失礼だとは思わねえのかいイ？」

このゲロ吐きチャイナ娘。せめて「ゴリラさん」とさん付けしやがれ。

たく、これだから近頃の若い奴は・・・」

やれやれとでも言うつように頭を振り大きなため息をばく沖田。

近藤はそんな沖田の後ろで涙目どころかもう完全に泣いている。

「総悟まで・・・」

最近じゃキャラが昔と違って固定されて来たから俺を近藤さんと

しか呼ばなかったのに・・・  
その総悟まで・・・」

沖田はそんな軽い裏話ネタを披露しながら愚痴っている近藤には気づかない。

本当は気づいているのかもしれないが無視をしている。

神楽はそんな事もちろん気づいていない、沖田の言葉にただ負けじと言い返す。

「うつさいネ！お前も近頃の若い奴の一人アルヨ！  
もしかしてさっきのは自分の事を言っていたアルか？ついにはM  
に目覚めたアルか？」

沖田を嘲る様な顔で喧嘩を売り返す神楽。

それを言われてますますこの二人の言い争いはヒートアップする。

まるで何時もの日常が戻ってきたようだ。

土方はみんなのそんな様子を見て思う。

(元氣な奴等……)

そんな思いとは裏腹に、その口元は優しく微笑んでいる。

土方自身も銀時を認めてくれる人が現れて多少なりとも嬉しかったのだ。

それからしばらく歩いて、松陽の家に行き着いた。

過去の偉人さんって本当にすごいけど、なんか天然ってイメージがある！（後書

「なんか作者めんどいからここでできとーに話せって言われたんだけどさあ？どっちみちここに何か書く以上作者がなんか書いてんのって変わんねーよなあ」

「そーですね！」

「てかなんか話すだけでもだるいに決まってるだろーが」

「そーですね！」

「ああ〜もうほんつとだるいわ。神楽、そこにあるジャンプとってくれジャンプ」

「そーですね！」

「神楽、聞ってる？」

「そーですね！」

「なんか懐かしいんだけどそのフレーズ」

「そーですね！」

皆さんに質問です。

このフレーズ何処で聞きましたっけ???

もちろん銀魂世界だっと思います！

・・・て、また作文？

どんだけ作文好きなのあんた！？

人様の家にお邪魔する時ぐらいお邪魔しますと言っておこう(前書き)

急いで仕上げたしあまり内容を詰めていないので「あれ？」と思われるかもしれませんが今回は勘弁してください

今度余裕がある時にでも付け加えを入れておきます。

あとこの前は一週間ごとなどと言いましたが、できたらすぐに今度からは投稿しようと考えています。

そちらのほうが多く投稿できそうなので・・・



人様の家にお邪魔する時ぐらいお邪魔しますと言っておじい

辺りはすっかり暗くなってしまった。

「ここが私の家です」

銀時を庭についでからその場にしゃがみ込み、降ろす。

そしてもう一度自分の家の紹介をする。

「あちらの方からが塾になっているんですよ」

言いながらそちらの方に顔を向ける松陽。

銀時も同じようにそっちの方を向いてみる。

(少しだけ、造りが・・違う?)

銀時の考えている事が解ったのか、母屋と塾の造りが違う事を説明する松陽。

「母屋とは違い、塾として使っている別館の方は子供達が沢山入る訳ですから少しだけ丈夫に作っているんですよ。仕切りで仕切ってますしね」

松陽がそう説明する。

「ふうん」

銀時は納得したようで、軽く家の中を見渡しながら相槌を打つ。

松陽はそんな銀時の様子を優しい表情で見つめていた。

ひとしきり辺りを確認して満足している銀時を見て、松陽は「それじゃあそろそろ中に入りましょう」と言いつつ家の中に庭から直接部屋の方へ入る。

部屋の中に入ってみれば外観と同じように広い部屋があった。

もちろん子供の銀時から見たのと、この時代に見てみたら大きいっただけで、土方達には普段から見慣れた屯所の部屋と同じぐらいの大きさだ。

だが銀時にとってはとてもありえない大きさだ。

「ここ、本当に部屋？」

思わずそんな言葉が出てしまった。

松陽はそんな事を言う銀時を見て、軽く微笑みながら「そうです」と言う。

だが銀時は何が可笑しくて松陽が笑っているのか解らず、少しだけ不機嫌になった。

(何笑ってんだよ)

傍はたから見ればほほえましい光景である。

そして、軽くむくれて松陽を睨んでいる銀時を見て、神楽達思わずにやけてしまう。

「銀ちゃん可愛いアル！」

今のアイツがしたらただのムカつくオッサンなのに、子供の頃の銀ちゃんがむくれたら何か可愛いアル！」

いつの世も女の子は可愛いものに目がない。

だが近藤と土方は思った。

(この生意気な面、まるで小せえ時の総悟みたいだな・・・)

そんな不愉快極まりない事を思われているなどは露ほども思わない沖田。

きつとその事を知ったら、土方にはいつものドS発言を連発していったところだろう。

近藤には大方で「そりゃあないですぜい近藤さん」とでも返していただろうか。

松陽は銀時のそんな視線に気づきもせず、家の中を案内する為歩き出した。

銀時はむくれながらもその後を追った。

案内の最後に連れてこられたのは、主に脱衣所と呼ばれるところだった。

「それじゃ、お風呂に入ってもらいましょうか」

松陽は銀時の着物に手をかけながら言う。

(((((風呂?))))))

さすがに子供の頃だからといって、男の沽券こけんに関する事なので慌てて土方達はその脱衣所から出る。

「なんで皆外に出るアルヨ？」

だがそんな事全くといって良いほど気にしない神楽は一人脱衣所に残る。

「か、神楽ちゃん！早く外に出て！！」

新八が慌ててその部屋から神楽を引っ張り出した。

「とつとと・・・たく何アルかダメガネ！お前がいきなり引っ張るから危うく扱ける所だったネ！」



神楽にダメガネ呼ばわりされた新八は、珍しくツッコミをいれず、銀時の沽券の為だからと何とか神楽を説得した。

この事を銀時が知ったらきつと新八を褒め称えていたところだろう。

そんな事が自分の周りで起こっていたことなど知らぬ銀時は、先程の松陽の言葉で不思議に思ったことを口にする。

「風呂？」

松陽は風呂とはどういった物なのかを尋ねてくる銀時に、着物を脱がせながら答える。

「汚れた体を綺麗にするために体を洗って、体の疲れを取るために温かい水に体を浸けるんですよ」

銀時はそれを聞き納得する。

「じゃあ川とは違うんだな」

「そうです。川は体の汚れを取る事は出来ませんが、体を休める事は出来ません」

そこまで言い終え、銀時は風呂の入り方を説明された、とは言っても、ただ体をお湯で洗って髪を洗ったお湯に身体を浸け、体が温まったら外にでるのだと教えられただけなのだが。

銀時が風呂から上がり、この家に最初に上がった部屋に戻ってきた。

この部屋には大きな食机と筆笥が一つだけある。

そしてその食机の上には、いまだかつて銀時が見た事のないほど豪華な食事が用意されてあった。

「……………」

銀時は思わずその場に立ち尽くしてしまった。

そんな銀時の様子に気が付いたのか、松陽が銀時の顔を覗き込むようにして声をかける。

「どうしたんです？早く食べてしまわないとせっかく銀時がお風呂に入っている間に作った食事が冷めてしまいますよ」

銀時はそれを言われてゆっくりと足を前に踏み出す。

松陽は銀時がそのまま机の前で腰を降ろすものと思っていた。

が、二、三歩歩いた所でその足を止める銀時。

そして松陽の方を振り返って「どっちがあんたの？」と聞いてきた。

それを聞き「ああ」と納得をした松陽。

そう、銀時はいざ食卓に着こうと思っても、どちらに座れば良いのか分からなかったのだ。

「どちらでも良いですよ」

松陽は軽く微笑み食卓を見ながら言った。

「……………」

だが銀時はそう言われてもその場を動こうとしない。

ストツ

松陽が食膳の置かれた机の前に座る。

銀時はそれを見てようやく向かいの席に着いた。

松陽は銀時が目の前に座るのを見てから口を開く。

「じゃあお腹もすいたことですし、早く頂いちゃいましょうか」

そう言った松陽は、顔の前で手を合わせようとする。

銀時は目の前に置かれた食べ物に手を伸ばそうとしていたが、顔の前に手を合わせている松陽を見てその手を止めた。

「何してんの？」

松陽の行動に全く付いていけない銀時。

松陽は銀時にそう問われ、銀時にこの事を教えなければならぬという事を思い出す。

「銀時も手を合わせてください」

銀時は首を少し傾げたが言われたとおり胸の前辺りで手を合わせる。

だがやはりこれは何なのかと気になっているようだ。

「感謝するんです」

「は？」

いきなり「感謝するんです」と言われれば今の銀時と同じような態度を誰しも取るだろう。

「私達人間は植物や動物の命を勝手に絶<sup>た</sup>ち調理し、それらの命をもらって、自分の命を維持し生存しています。」

なので、せめての償いとして食材となった食物や動物に対して感謝の心をあらわすんですよ」

松陽は先ほどの行動の意味を説明する。

銀時は今の長い説明を静かに聞いてはいたが、完璧には理解できなかった。



それでも、自分達の糧かてになっていく者に感謝をするんだという事は出来たように、

「解った」

と、短く相槌を打った。

松陽は銀時が納得したのを確認して、ゆっくりと感謝の言葉を、頭を下げながら口にする。

「いただきます」

銀時も松陽と同じように頭を軽く下げながら「頂きます・・・」と

言ってお皿に手を伸ばした。

その日の夕食は、今まで食べてきた中で一番おいしいものだったと  
銀時は感動していたらしい……………

人様の家にお邪魔する時ぐらいお邪魔しますと言っておこう(後書き)

「ホント話が進まないアル・・・」

「しかもこれ話として成り立ってんのか？」

「僕もあまり小説とか読まないんで良くは分かりませんが、僕達が書くよりはましだと思いますよ？」

「いや、私たちの方が絶対うまく書けるアル！」

「そうだなよな〜ジャンプ読み続けて二十年の俺だったらこんくれのモンは朝飯前・・・いや、パフェ時前だ！」

「い、いや二人とも落ち着いて・・・」

「そうと決まれば早速話を書くネ！」

「・・・・・・・・はたしてこの後どうなる事やら(心)」

もしこの後の流れが気になったのならば教えてください。短編として書いてみようと思います。

(こんなん誰も見よーと思わねえよっ！)

時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう（黒髪少年篇）（前書き）

今日は銀時様ではない方の過去話（？）に飛びます。

ただ銀時様と出会う前には書いといたほうが良いのかな？

と思っ書いた作品なので皆様のお気に召さない可能性があります  
が、その部分はどうぞ見逃してください。

注

私の過去話は史実などを基に作っていないため、入らぬ誤解を招かない事を願います。

時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう（黒髪少年篇）

江戸近くにあるそれなりに大きな武家屋敷。

この武家屋敷は代々桂の血を守っている。

その屋敷では今日、ある話題がのぼった。

「奉公……ですか？」

この家の長男

- - - 桂小太郎 - - -

家を継ぐであろう者が奉公に出ると言うのは、今の時代特におかしなことではない。

屋敷の奥の部屋に、この日小太郎は父に呼ばれた。

(父上は何の話だろうか?)

長い間改築などしていない為、少し痛んでいる長い廊下を、顔に手を当て考えるようになしぐさで歩いていた小太郎。

だが、ある部屋の前まで来て小太郎はその足を止める。

その部屋の襖に手を掛け静かにあける。

「失礼します」

襖ふすまを開けて一礼。

その部屋の中にいた人物に断りを入れる。

声をかけられたその男は俯きかけていた顔を上げて小太郎を見た。

「小太郎か。入ってきてくれ」

「はい」

小太郎は短く答え、その男の前に行き今日の用事は何なのか訪ねた。

「父上、一体今日はどついったお話で……?」



小太郎はその場に立ったまま不思議そうに問う。

小太郎の前で腕を組み、小太郎の事を見上げるようにしている男、小太郎の父が小太郎に「まずは座りなさい」とすすめる。

小太郎は父に言われたとおりその場に正座をする。

こういう場合は大抵<sup>たいてい</sup>長話をするかよっぱど重要な事を話すかのときだ。

小太郎は今までの経験上その事をよく理解していた為、正座をしてすぐにツバを飲み込んだ。

これから父が言うであろう事柄に少なからず緊張しているのだ。

小太郎の父はそんな小太郎の緊張を知ってか知らずか、ゆっくりとその重い口を開いた。

「奉公……ですか？」

小太郎の父は小さく頷きながら「そうだ……」と呟く。

父上は今日、私の知人の家に奉公に行かないか？と提案してきた。

奉公自体はさほど問題ではない。

ただ、俺には一気になる事があつた・・・

「父上、その知人のお宅と言うのはここから遠いのですか？」

俺は父に一つ質問を投げかける。

「萩だよ」

父上は俺の質問に対してそう小さく返した。

「萩、ですか？」

俺は思わず確認を取るように聞き返してしまった。

だが父上はそんな事を気にも留めなかった。

「萩に今度、吉田塾と言う塾が開くそうだ。

そのこの先生になる人はそれなりに武士道を志こころしている者なら名前を聞いた事があるほどの立派な人だ。小太郎、お前がそこへ通えるように頼んでおいた」

萩・・・

塾  
・  
・  
・  
・

俺の頭にはその二語が強く印象づいた。

萩はそこまですこの家から遠いと言っわけではないが、代わりに近いと言っほごでもない。

母上の墓参りに来る事に指して問題はないだろう。

そう、この屋敷の現当主の妻、小太郎の母に当たる人は、小太郎がまだ幼い頃に亡くなった。

小太郎はそれを悲しいと思ったことは一度も無い。

ただ純粹に母の事を尊敬している。

そのため、尊敬しているその母の墓参りに来れるのだろうかと小太郎は案じていたのだ。

小太郎の父は小太郎の考えることが解ったのか、亡き妻の言葉を小太郎に告げた。

「お前の母は、まだ小さなお前の事をよく気にかけていた。

それと同時に、お前が立派な侍になる事を心待ちにしていた。  
残念だが、その姿をあいっは見る事が出来なかつたな……

「

小太郎の父は少し寂しげな表情を見せた。

だが、すぐに小太郎を強い目で見つめ返して言う。

「お前はどうか考える。亡き母の刹那せつなの願い、実現させてみようとは思わんか……？」

その言葉はまるで、小太郎を案じているような、それでいて小太郎に何かを望んでいるような言い方だった。

小太郎は父にそう問われ考える。

母上の願い・・・

父上の望み・・・

しばらくの間はただ静かに床を見つめて悩んでいた小太郎。

父はそんな小太郎を急<sup>せ</sup>かそうとせず、ただじつとその様子を見ている。

数分の間考え込んでいた小太郎が何かを決心したのかその面<sup>おもて</sup>を上げる。

その瞳は何かを決意した時と同じ、強い光が浮かんでいた。



「父上、俺は亡き母上の意思を組み、奉公に出たいと思います」

小太郎はそこまで言い終えると深く頭を下げる。

「今まで、ありがとございましたッ……」

最後の方は少し声が霞かすんでいた様に聞こえた。

父はその行動に驚いた。

そして、小太郎が己にお礼を述べた時に声が霞かすんでいる……

そのことに気が付いたとき、身体が意思とは関係なく勝手に動いていた。

顔を上げようとした小太郎の傍に近寄り、その身体を優しく、それでいて強く抱きしめる。

小太郎はその行動に驚きを示す。

「ち、父う……え？」

どうしたのかと続けようとした小太郎の声は、その父の声によって遮られた。

「小太郎……立派な人間に、なるのだぞ……！」

低く響く男らしい声が、ほんの少しだが震えているのが解る。

小太郎の右肩には何かで濡れていくような感触が広がる。

その肩を濡らしているものは《涙》・・・

それに気づいた小太郎は、一生懸命耐えていたものを解放する。

「・・・はい・・・っ！」

それは今小太郎の肩を濡らしているものと同じ《涙》・・・

優しく抱きしめる父の背を、その短い手で服を握るようにして抱きしめあつ。

小太郎は泣きながら最後に心の中で、父に今までのお礼を言った。

っ！)  
( 本当に、今まで・・・ありがとうございました・・・父上・・・

その日、その屋敷では小さなお別れ会が開かれた。

そしてその翌日・・・

(ここが、萩・・・)

小太郎は父の知人の屋敷に行く途中、田んぼや畑、ススキ野原が辺りには広がってる道にいた。

(えつと・・・確かこのまま真<sup>ま</sup>っ直<sup>す</sup>ぐ行った所にあるはずなんだけ  
ど・・・)

辺りは似たような風景が広がっている。

小太郎はそのため迷子になっていた。

辺りを見渡すが一度も来た事のない土地、一体どちらへ進めばいい  
のか皆目見当もつかない。

辺りをもう一度見渡すがやはりどちらに行けば良いのか解らない。

小太郎はその場で小さく唸り声を上げる。

(~~~~~どっちに行けば・・・)

その答えは早々に出るものではない。

小太郎は道の真ん中である事を忘れて悩みこんでしまう。

「どづしたんですか?」

ふとそんな言葉が小太郎にかけられる。

小太郎は驚いて振り返った。

そこにいたのは、綺麗な灰色の髪をした自分と同じ長髪の男。

違う所と言えば、その髪の色と髪を結わえているかどうか。

小太郎は驚きのあまり返事を返すのを忘れていた。



「?どうかしたんですか?」

今度は小太郎が返事をしない事に対しての問い。

小太郎はそういわれてハツとする。

「あ、すみません・・・始めてこの地に来たので道に迷ってしまっ  
て・・・」

小太郎がその男の問いに困ったように答える。

小太郎の目の前にいる男はそれを聞き「なるほど」と頷いた。

小太郎が力なく答えるのを見て、鈴に男は救いの手を差し伸べる。

「何処へ行きたいのですか？私はこの土地に詳しいので案内しますよ」

微笑むように言う男。

それを聞き、嬉しさと申し訳なさが混同した様な複雑な顔をする小太郎。

だが、このままここで悩んでいても埒が明かない事を小太郎は知っている。

それ以前にまず、通行人の邪魔になると小太郎は考えた。

「ありがとうございます」

いきなり頭を下げお礼を言われた為、目の前にいる男は驚いた。

目の前の童わらわしの行動にはない、その礼儀正わかししさにだ・・・

その後、この二人は小太郎の父の知人の家に無事行き着く事が出来た。

そこで小太郎は知る。

自分をここへ連れてきてくれた人が今度から自分の師になる人だと  
・  
・

その師の元で小太郎は知る。

この国の幸せとは何なのか・・・

この日から小太郎は願う。

この人の考えと同じように、この国が繁栄していく事を・・・

小太郎はまだ知らなかった。

この出会いこそが、小太郎の運命を分けるものだとは・・・



時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう（黒髪少年篇）（後書き）

なんか途中から無理やり話を終わらせた感がありすぎますね……

・  
なんかとりあえず皆さんのお目を汚してしまつてすみません。

次回も頑張つて書くことは思いますがうまく書けるかどうか。  
たぶん次のお目汚しになるのではないでしょうか……

一応先んじて晋助様ファンの方にお断りを入れておきます。  
すみません

私なりに頑張つて書いてみようと思います！

もう今のお詫びで解つたとは思いますが、次回は晋助様の家の  
事と松陽先生の出会いを書いていこうと思います。

これからよろしく願います

時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう（紫髪少年篇）（前書き）

とりあえず急ごしらえなので、ご満足いただけないかと思われます。

また時間の有り余った時にでも付け加えでも・・・

ここの部分をもっと詳しくというご要望があれば申してください。

そちらのほうの話が作りやすいんで・・・

すいません。

入れ忘れていた話があったので七話に割り込ませておきました。

とりあえず読むだけ読んでやってください



時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう（紫髪少年篇）

とある屋敷では、ある子供が手紙と共に送られた。

この子はあなたの子です。

その手紙には、たった一言しか書かれてはいなかった。

それ以上必要の事は何一つ書かれていない。

まるでその内容に関係ある事柄に興味ないかのようなあっさりとした一文。

いや、その内容に関係ある事柄が鬱陶しいと思っているとさえ感じる未練のない一文。

そんな手紙と共に送られてきた子供は、紫がかった髪をして、その屋敷の者を純粹な目でただただ見つめていた。

大きくも小さくもない小奇麗な部屋。

埃が舞ってはいないが、なぜか人がいる事を思わせない静けさがこの部屋にはあった。

その部屋には小さく食器が置かれる音が響いた。

カチャリ

その食器を置いた者は酷く冷めた瞳をして、襖ふすまの向こうから聞こえてくる音を聞いていた。

ガヤガヤガヤ

コンコンコン

その襖の向こうから聞こえてくるのは、女達が廊下を通る音とその女達の話し声。

「今日はあなたの当番でしょ……」

「私はこの間言ったわよ……!」

「じゃあ誰よ……?」

「そんなに言うならあんたが自分で言って来れば良いでしょ……」

「嫌よ……!」

その女達は声がこちらにまで漏れていると言つ事を理解していないのだろうか。

しばらくの間その襖をただじつと見ていた。

だが、それに飽きたのか、襖の向こうから聞こえてくる戯言にうんざりしたのか、ふと視線を目の前に置かれている食膳に戻す。

(全く馬鹿な連中だ。そんなに俺が疎ましいのなら、この家からいっその事追い出してしまえば良いのに・・・)

子供らしからぬ冷めた考え方をするこの少年。

高杉晋助。

この高杉家は、代々裕福だいたいゆつぷくな生活を営んできているそれなりに有名なお役人の家系だ。

そしてこの家の長男。

つまりは次期当主、それがこの高杉晋助と言う少年。

だが、その事実を認める者も、喜ぶ者もこの家にはいない。  
それもその筈。

高杉のれっきとした血の流れを持つこの少年。

ちゃんとした高杉家の人間としては認められていないのだ。

この晋助の父と母は、晋助の事を疎ましく思っている。

理由なんかは酷く身勝手なものだ。

そう、晋助の父は一夜限りの遊び気分で妻以外の女を認めた。

だが、たったそれだけの事で、この少年（晋助）が生まれてしまっ  
た。

その女は晋助を二歳までは育てた。

だが、そこまですれば「義務を果たした」とでも言うように、この高杉家に晋助を捨てた。

その為晋助の父は、己の人生の汚点とでも言うように酷く晋助事を毛嫌いしている。

それに対してその父の本妻、晋助の儀母にあたる女は、思うように自分の子が出来ず、どこぞの馬の骨ともわからぬ女に夫を取られたうえ、当主の座をもその女の子供に取られ様としている。

全てにおいて認めたくはないし認めるわけにはいかない。

その為、晋助の事を存在そんざい自体邪魔者じやまもののように扱っている。

昔こそは嫌がらせなどを何度となく受けた。

その頃まではまだ純粹だった晋助。

だが、次第に自分は望まれていない存在。

疎まれている存在と言う事実には気が付き、深く傷ついた。

今ではもう嫌がらせなど受けてはいない。

まるで自分はいない者のように扱われている。



それでも、一応次期当主である晋助にはお世話付きが付く。

屋敷の者全てに邪魔者扱いじゃまものあつかされている為、いくらお世話付きでも晋助の傍には寄って来ようとしない。

自分に要いらぬ火の粉が飛んでくる事を恐おそれているのだ。

そんな事が日常化してきたため、くだらない事で心を痛めないように、晋助自身も、自分の事をどこか冷めた様に考えるようになった。

ガタッ

食膳を持ったまま襖を器用に開ける。

「「「あつ・・・」」」

いきなりの事で言葉を失う女達。

晋助はそんなことに目も向けずその場を静かに去る。

あの後、残っていたものを全て残し、調理台の所へ持って行って屋敷の外に出た。

辺りはトンボが緩やかに飛んでいる。

空はまだまだ明るい<sup>し</sup>が朱色<sup>し</sup>に包まれている。

そんな中何をする訳でもなく、晋助は日が沈んでいく空をただじっと見つめていた。

(本当に大人って馬鹿みてえ)

何処からともなくそんな思いが込み上げて来た。

自分の袴を力なく握り、顔を下に下ろす。

悲しんでいるわけではない、ただ解らないのだ。

なぜ自分が生まれてきたのか。

なぜ疎んでいながら自分を追い出さないのか。

なぜ、自分達の勝手な都合で自分がこんな目にあっているのか。

そんな事を考えていたから気づくのに遅れたのだろう。

「おい、お前高杉の子か？」

(っ!?)

えらく野太い男の声が背から聞こえてきた。

それと同時に後ろを振り返る。

そこには、四、五人の男がいた。

(こいつ等・・・)

初めての出来事に最初こそは驚いた晋助。

が、すぐに何が起こっているのか状況を理解した。

(ああ・・・俺を・・・)

それを理解してふと晋助は口元を緩めた。

(俺なんかを攫<sup>さら</sup>っても、喜ぶ奴しかいねえのに・・・)

その笑みは、人生そのものを諦めたようにも見える。

それに気づいた一人の男は、笑いながら口を開く。

「何笑ってん・・・っ!？」

だが、その言葉は途中でせき止められる。

バタッ

バタッ

バタッ

その男を皮切りに、他の男たちも地面に突っ伏す。

晋助は何が起こったのかわからず、思わず顔を上げた。

「大丈夫ですか？」

そこにいたのは、灰色の髪を肩から腰に垂れ流し、その着物を優雅にひらつかせている男。

すっと目の前に差し出された手。

反射的にその手を握る。

「ここは何ですかここから」

手を握れば優しく握り返し、「ここからです」とある場所へと誘導していく。



たどり着いた場所はそれなりに大きな家。

「私はここで塾をしているんです」

何も聞いてはいなかったが、その男はそんな事を言った。

「何で俺を助けた？俺なんか助けなくても良かったのに・・・」

そう俺が言ったら、その男は俺の肩をやさしく掴み、まるで問いかけるように俺に言った。

「そんな悲しい事を言っではいけません。あなたはまだ若い。」

これからまだまだ色々な出会いが待っているんです。

そんな、全てに諦めをつかしたような目をするには早すぎます」

俺は驚いた。

なんせ、俺の心を読んだかのように言うのだから。

「なんでそんな・・・」

俺はなぜそんな事が解るのか問おうとしたが、この先は中々口に出  
来なかった。

この後松陽先生が言ってくれた言葉のお蔭<sup>かげ</sup>で、俺の運命は大きく変わった。

この時松陽先生に会ったから、俺の考え方は全て変わった。

この時松陽先生が俺に唯一手を差し伸べてくれたから、俺の世界は松陽先生が中心になった。

だから考えられなかった。

松陽先生がいなくなることになるなんて・・・

想像したくはなかった。

松陽先生のいなくなった世界なんて・・・

時には気分を変えて違うものに目を向けてみよう(紫髪少年篇)(後書き)

「なんで晋助様の話がこんなにグダグダなんツスカ!」

「うるさいネ染み付きパンツ」

「ちよっ!?今は晋助様がないからってその侮辱だけは聞き捨てならないツス!」

「侮辱も何も事実アル!」

「こんの……クソ娘!」

「いけませんよまた子さん。この少女は絶対将来有望なん…ブフォア!」

「ウルサイツス武市変態!ロリコンも対外にするツス!」

「また子さん。私はロリコンじゃありません。フェミニンス…」

「いい加減うるさいネ!このロリ変!」

「ああ、そう言ってもらえると嬉しいです」

「ちよ!?!キモイアル!また子何アルかコイツ!?!」

「武市変態いい加減にしてくださいツス!」

「先輩ですよまた子さん。変な所どうしをくつつけな…ブハア!」

「.-504 UU」」



玄関の方から自分の呼ぶ声が聞こえてきたら反射的に振り向くよね（前書き）

今日から後書きの方で新コーナー！

教えて銀八先生始めようと思います！！

玄関の方から自分の呼ぶ声が聞こえてきたら反射的に振り向くよね

その夜、銀時は少し小さめだが子供には十分すぎるほど大きな部屋を松陽からあてがわれた。

(本当に広い家だな)

そんな事を思いながらも布団に顔をうずめる銀時。

今まで布団なんて物を使って寝た事が無かった銀時は、そのあまりにも寝心地の良い肌触りの為、あっと言う間に強い睡魔に襲われ始める。

意識がうつらうつらとし、暗闇の中に意識が溶け込む寸前に、銀時は今日あったことを思い巡らせる。

『私は、あなたの中に住まう鬼を退治しに来たんですよ。』

自分自身を守るためだけに人を殺すその鬼を……』

松陽の声が頭の中に響き渡る。

(俺の中の鬼……鬼なんて、住んでねーよ……)

布団に頭をうずくめながら一言、心の中で呟き、暖かい布団の中で浅い眠りに付く。

その夜銀時は、初めて夢というものを見た。

もちろんそれは、新八達も見ることとなる・・・

朝焼けの景色が広がる

そんなさわやかな景色とは一変

そこには幾重にも折り重ねられた屍の山が・・・

その屍の中に佇む一匹の鬼

その鬼は・・・

怪しく煌めくその銀色の髪を、足下あしもとに転がる屍の血で真っ赤に染め  
・  
・

その血の色よりも濃い紅あかい色の瞳を空へと向け、大きく見開みひらいてい  
る。

(これは・・・俺だ・・・)

なんで俺が・・・

その鬼はまだ二歳にも満たない様に見える。

そんな鬼の足下あしもとに転がっている「人」だったはずの屍。

(これは・・・確か・・・)

思い出そうとするがあまりにも前のことなので思い出せない。

そう、思い出せはしない。

それでも、その銀色の鬼の足下あしもとに転がっている物体が何なのかが、不思議なくらい頭でハッキリと解る。



父ちゃん……………

(俺は……………父さんに殺されそうになったんだっけ……………)

そんな事があつたような気がする。

そう、気がするだけだ。

でもやっぱりよく思い出せない。

それは、自分で思い出さないようにしているのか、ただ思い出せないだけなのか……

そんな事が解るはずもない。

頭の中に血の飛び交う映像が流れ込む。

「娘から離れろ！」

「ウアアアアア！」

「ひっ！？」

「なんで・・・っ!?!?」

恐怖をその顔に称える者・・・

咆えながら向かってくる者・・・

誰かの為に自分に向かって来た者・・・

目の前で大切な人を失い混乱して向かって来た者・・・

そんな者達を

一瞬のうちに屍へと変える一匹の鬼・・・

そんな映像の一番後に

頭に流れてきたのは

昔、確かに己の愛していた者の姿。

「死ね！」

刀が振り下ろされる。

.....

だが、その男は刀を下に振り下ろすことなく、その場に倒れこむ。

その鬼は涙を頬に流しながら

その足下の物体を眺めていた。

(なんで、泣いてたんだっけ……?)

なんで、泣く必要があった……?)



そこで目が覚めた。

辺りはまだ暗い。

時間的にはおそらく四時〜五時ぐらいなのだろう

チュンチュン

鳥のさえずりが微かに聞こえる。

鳥の声だけではない。

ハアハアハア・・・

自分の吐き出す息が驚くほどに白く

自分の思っていた以上に息は荒い。

今の季節は秋の中旬。

まだ冬ではないと言っても、じっさい実際冬と大差ない気温だ。

それなのに寒いと感しない。

むしろ身体が熱い。

鼓動こどうが何時もの数倍は活発かつぱつに動いている。

先程の映像が頭に再度甦よみがえる。

悲しいとも

怖いとも

思わないし

感じない

それなのに自分の鼓動はますます早くなる。

銀時はなぜこれほどまでに鼓動が早いのか理解できない。

(何であんな夢・・・)

なぜこんな夢で自分の鼓動が早くなり、息が荒くなるのか解らない。

考えても考えてもその答えは出てこない。

夢から覚めて数分の間

銀時はただ一生懸命、いつまで経っても出てこない疑問の答えを捜し求めていた。

だが、ふとその疑問は頭のどこかへと追いやられる。

手を自分の顔から流れ落ちる何かが濡らした。

(また、濡れてる・・・)

何で、濡れてるんだ・・・?)

己の手で、その紅い瞳から流れ出るその滴を拭い取る。

手で拭い取ったその滴を

ただ静かに見つめ

銀時は誰に言う訳でもなく

己自身に問いかけるように

本当に小さく

それでいて強く

心の底で呟いた

(これは、何なんだ・・・)

「万事屋……」

銀時と同時に目覚めた六人。

もちろん、銀時の今までの行動から心情までの全てを見。聞きしていた

「感情と身体が付いていっていない……」



山崎が銀時を心配そうな目で見つめ、そんな事を言った。

その言葉を聞き、ポツリ・ポツリと言葉を発したのは神楽。

「そんなの、悲しすぎるネ・・・」

そんな神楽の言葉に、山崎が首を小さく縦に振り同意した。

「確かに、こんな夢を見ても何も感じてないなんて悲しすぎます・・・  
何時も能天気にしてたあの旦那が、こんな幼少期を送ってきたな  
んて・・・  
そんな事を考えたことありませんでしたね・・・」

そんな山崎の言葉を聞いていた他の者も、皆山崎と同じ様な事を思った。

(銀さん。あなたは今までこんなかな悲しい思いをして生きてきたんですね・・・)

僕は、銀さんが小さい頃も今みたいに好き勝手生きているものだとばかり思っていました。

実際はそんな事、言っていられないほど辛い思いをしてきたのに・・・)

(銀ちゃんは何んでこんな目に遭わなければならなかったネ・・・)

銀ちゃんは何一つ悪いことをしてないネ。

ただ姿形が皆と違っただけなのに、こんな時代に生まれた銀ち

やんが可愛そうアル・・・)

(万事屋・・・なんて幼少期時代を送ってきたんだ。

今の姿がとてもしゃないが信じられねえ)

(あのヤロー今までこんな過去を背負ってきているような態度何一つ見せてこなかったのに・・・)

どれだけヤローは暗いものを心に押し殺して生きてるんだ・・・)

(旦那は俺と同種。心の奥底に暗いものを抱えて生きていると思ってましたが、俺なんかたあ比べ物にならないものあんたあ背負って生きてまさあ。

たく、本当に油断ならねえ方だ。まあ俺は土方を殺すまでそのくらしいものを隠し通す気は無いですが)

沖田だけは何故か、土方の殺し方をゆっくりと考え始めていた。

そこまでして近藤の近くにいたいのだろうか、疑問である。

銀時が起きてから数十分後、外は微かに明らんで来た。

そんな事を頭の片隅かたすみで考えていると、人の気配がこの部屋のすぐ傍まで来たのに気が付いた。

銀時はもう泣き止んでいる。

「松陽・・・だっけ？」

その声を聞いて驚いたように襖を開ける松陽。

「あら、起きていたんですか？それは以外ですね。私はてっきりまだ寝ているものかとはかり思っていましたよ」

その言葉を聞き、銀時は普通の子供が絶対に口にしないようなことを言う。

「この時間になったら俺の命を狙ってくる奴が多いからな」

松陽はそれを聞き、悲しそうな表情をしてみせた。

「あなたをこんな風にしてしまったのは、私達大人なんですね・・・

」

そんな風に呟きながら悲しそうな顔をする松陽を見て、不思議そうな顔をする銀時。

「なんで他人の為なんかそんな顔をするんだ？」

それを聞き、さらに顔のしわを濃くする。

「他人でも何でも自分とは違うものを愛することが出来る、それが人という生物の良いところです」

その言葉を、銀時はまだ、理解することが出来なかった。

「銀時、あなたはこれから、私の塾に通ってもらいます。  
って言うっても、私の家で塾を開いているわけですから違う部屋に  
移動するだけで良いんですけどね」

持っていた箸を止め、「塾」と聞き一瞬「？」マークを頭に浮かべる銀時。

しばらくの間ぼーと何かを考え込んでいたが、昨日松陽から聞いた話を思い出し「ああ」と納得したような相槌を打つ。

「それじゃあ早く朝飯を食べてしましましょう。もうそろそろ小太郎と晋助が塾に来る時間ですから」

小太郎と晋介という名を聞いて「それ、誰？」と言う顔をした銀時。

だが、そんな顔をしたのは銀時だけではなかった。



「小太郎・・・晋助・・・って。まさか桂と高杉のことか？」

眉根をひそめながら言う土方。

「あいつ等とはなんらかの関係があるとは思っていたが、まさか幼馴染だったなんて・・・想像してなかったぜ」

そんな事を言っている土方の傍で近藤も「まさかあ」と言う顔をしていた。

銀時が朝飯を食べ終えた頃、この広い家の外から元気な子供の声が聞こえた。

ちなみに朝ごはんは普通の焼き魚と白いご飯だった。

「松陽先生 扉を開けてくださいー」

その声を聞き松陽は

「今日は小太郎が一番乗りのようですね」

と言いながら大きくて重そうな家の扉を開けに行く。

しばらくして銀時のいる部屋に一人の子供を連れて松陽が戻ってきた。

その松陽が連れてきた子供は、銀時を見るなり声を上げた。

「銀髪だ・・・すごい！綺麗な銀髪！おはよう、いや、はじめましてだな。俺は桂小太郎だ！」

お前の名はなんと言った？」

そんな事を言ってくる子供を見て、銀時は初め、女かと思ってしまった。

なんせ黒髪長髪で端正な顔立ち、その黒髪は頭の上で結い上げており、顔立ちはとても整った、いや・・・どちらかと言うと可愛らしい顔立ちをしていたのだ。

簡単に言ってしまうえば女顔なのだ。

自己紹介をしても何も言っていない銀時を見て、小太郎は銀時のことを異人かと思ったのか

「先生、この言葉分らないんですか？」

と松陽を見上げ聞いていた。

松陽はそれを聞いて、優しくその子供に言った。

「違いますよ。銀時、挨拶しなさい」

だが銀時は挨拶とは違う事を言った。正確には聞いた。

「挨拶って、なんだ？」

その銀時の言葉を聞いてそうでしたと言う顔をしながら銀時に向き直る松陽。

「挨拶と言うのは、自分の事を相手に教えてあげる事ですよ。初めて会った者にするんです」

それを聞いてさらに質問する銀時。

「自分の事って何を教えれば言い訳？俺の事教えれば怯えと思うけど」

それに対する答えを言つ松陽。

「名前だけで良いんですよ」

「名前……」

その様子を少し離れたところから見ている小太郎は、銀時のことを少し変わった子なんだなと思っていた。

「俺の名前は坂田銀時。悪いけど、お前の名前も一回言ってくれ。良く聞いてなかった」

小太郎はそのことに対して、別に気にした風な態度はとらず、銀時に言われたとおり改めて自己紹介をした。

「俺の名前は桂小太郎だ。銀時って名前はその綺麗な髪を表しているんだな。よろしく」

小太郎の名前を聞き、その名前を繰り返しながら挨拶を交わす銀時。

「ツラ小太郎か、確かに納得だ。よろしく」

だが名前を聞き間違えてしまった銀時。

その言葉に対して皆お馴染みのあのセリフを小太郎は言った。

「ツラじゃない、桂だ！」



そのやり取りを見ていた松陽は、耐え切れず笑い出していた・・・

「やっぱり小太郎ってのは桂のことだったんだな」

真選組はその様な事を言っていたが、その隣で新八・神楽はまったく別の事を言い合っていた。

「ツラの口癖は銀ちゃんの所為だったアルか。ていうか、ツラ女の子みたいな顔ネ・・・」

何かム力つくアル。私より可愛いアル！」

「桂さんのあだ名をつけたのも銀さんだったんですね。」

ていうか、桂さん九兵衛さんの小さいころに似てる・・・」

「俺は高杉晋助、よろしく」

小太郎が来てから数分とせず高杉も塾に来た。

その風貌は幼いながらも意志の強そうな眼をしていた。

その髪の色は紫がかっていて神秘的という印象を持つ。

「坂田銀時、よろしく」

挨拶を終えた後、高杉は小太郎の方を見て悔しそうに呟いた。

「昨日は俺が勝ったのに……」

それを見聞きした小太郎は大きく胸を張って、高杉とは対照的な態度を取り言った。

「当たり前だ！負けてばかりいては男として情けない！」

その様子を見ていた銀時は不思議そうに言った。

「ツラ、何でそんなに嬉しそうなんだ？」

その「ツラ」と言う言葉を聞き思わず噴出してしまった高杉。

「ブツ……ハハツハハハ銀時、良い！ツラってピッタリじゃねえか！」

桂はその隣でまた銀時に向かって例によって例のセリフを言っていた。

「ツラじゃない桂だ！」

そのセリフを聞き、松陽はまたしても笑い出していた。

桂にとってはなんとも不愉快な事だが、この時に桂の字は『あだなツラ』となっていたのであった……



玄関の方から自分の呼ぶ声が聞こえてきたら反射的に振り向くよね（後書き）

教えて！

銀八先生！！

「はい。いきなりだがー今日から特別授業をしようと思う」

「せんせーい」

「はい。なんだ？多串君」

「多串じゃありません。土方です！

え〜と、質問なんですけど・・・」

「言うだけ言ってみる」

「何でいきなり特別授業なんかしようと思ったんですか？」

「それはだな？」

この小説書いてるうちの作者があ、理科の小テストの為に編み出した『必殺科学反応式覚え方』って言うのを是非ともこの小説を読んでもくださる方々に覚えていただけたらなあ〜ってなふざけた事を考えたわけなんだよ。そんな事なんでえ〜、次回からここは訳の解らない変てこコーナーに変わるから」

へ〜

「先生ー必殺仕事人みたいに言わないでくださいーい」

「まあ作者はこの覚え方のお蔭で六点満点のテストを見事満点で切り抜けたそうだー」

「マジですか!?!」

「おお、マジックだー」

「先生ー。マジックは関係ないと思いまーす」

「細かいところはいい〜んだよ。」

まあとりあえずそういうことだ。

中三の方は見て行って損はないと思うよ〜

中一・中二の方は来年、さ来年の為に覚えておいて損はないとボカ〜思います。あれ、作文?」

「何時までそのネタ引っぱんですか!?!」

「ぱっつぁんのツッコミが入った所で今日の授業はここまでー」

「きりーつ れーい 着メロ〜」

「うーん。思ったほど面白くなかったので神楽〜次からは  
で  
よろしく〜」

「アイアイさ〜」

「できるかアアアアア!?!」



てなことなんで！

次回からは楽しく『科学反応式』を覚えていきましょう！

一応次回は基礎知識編です^^

ちゃんと理解してもらえる様に頑張ってみようと思えます！

あれ、作・・・

さすがにしつこいですね^^

これからも応援よろしくお願いします

昔を思い出してみると子供の頃の自分って何か恥ずかしい(前書き)

明日からは少なくとも一週間更新できないと思うので

お詫びとしてこの一話を頑張って書かせてもらいました。

楽しく読んでもらえればこれ幸い。

皆様からの感想お待ちしております^^

後書きの方などの感想も気になるので教えてください^^

昔を思い出してみると子供の頃の自分って何か恥ずかしい

あの後銀時・小太郎・晋助は塾となる部屋に移動して、松陽と今日の授業でやる事について話していた。

時間がどれだけ経ったのか・・・

パタパタパタ

と、遠くからそんな足音と共に元気な子供の話し声が聞こえて来た。

銀時は思わず松陽から貰った刀に手を掛けてしまう。

その様子に気づいたのか、高杉が銀時に話しかける。

「銀時、どうしたんだ」

銀時は高杉に話しかけられて我に返ったかのような反応をする。

「どうするって、何が？」

そんな二人の会話に気づき、松陽や桂も会話に入ってくる。

「どっかしましたか？晋助」

松陽が高杉に近寄りながら問う。

「いや、銀時が……」

高杉は松陽に話しかけられて、そちらの方に顔を向け直ぐに銀時の方を見やる。

高杉が見やる先には、身を強め、刀を手にしている銀時の姿があっ

た。

「銀時、どうかしたのか？」

桂もそんな銀時の様子にただならぬ物を感じたのか、高杉と同じように銀時に質問した。

銀時はそんな三人の視線の先に何を見ているのか気づき、自分も同じように刀を握っている刀を見つめ不思議そうに言う。

「さあ……刀、手にしてるな」

他人事の様に行った銀時は、その目つきを少しだけ和らげて「何で刀握ってるんだろっな」と言っている。

( 餓鬼<sup>ガキ</sup>相手に何敵対心むき出しにしてんだろっな。俺…………… )



そう、銀時は大勢が己の方に向かってくるのを知り、今まで通りと同じ行動を取ってしまったのだ。

だが銀時はその事実気づき思った。

『殺気もとばさねえ、ましてや餓鬼<sup>ガキ</sup>相手に何警戒しているんだ』と。

「銀時、あなたは隣の部屋で待っていてください。皆が来たら呼びますから」

銀時は持っていた刀を放しながら頷いた。

「皆にあなたの事を紹介してから呼びます。全部話しても良いですか？」

この教室から出て行くつもりとしていた銀時に一つだけ確認を取る松陽。

銀時は松陽の言葉を聞き少しだけ体を振るわせる。

「俺の事、何処までを知っている？何処まで話す」

銀時は刀を両手で抱えたまま入り口の所で止まり、そのままじっと松陽を見つめて言った。

その瞳はまるで、「俺の一体何を知っているってんだ・・・」とでも訴えかけているようだ。

だが松陽はそんな銀時の瞳に臆することなく、さも当然だとも言うようにこともなげに言った。

「何って、ただあなたが昨日から私の息子になったと紹介するだけですよ」

それを聞き大声を上げて驚いたのは晋助だった。

「先生それ本当ですか！？なん・・・」

まだ何かを言いたそうだった晋助を左手で制する松陽。

そして左手を膝の上に戻してから口を開く。

「もつそろそろ他の子達が来ます。銀時、話はまた午後の休憩にでも」

銀時はそれだけを聞き終えたとその部屋を出て行った。

銀時が出て行ったのを静かに見届けた松陽は、晋助と小太郎にそつとある『お願い事』をした。

「晋助、小太郎。銀時の事が気になるならまたじっくりと本人から聞いてください。」

私もまだ、銀時の事を詳しくは知らないんです」

晋助と小太郎は何かを言おうとしたが松陽の言葉で遮られる。

「ただ、あの子は決して悪い子ではありません。だから、二人にお願いがあるんです」

「「お願い？」」



二人の顔はキョトンとしている。

松陽はそんな二人に「内緒ですよ」とでも言うように顔の前で人差し指を立て、小さく二人に囁いた。

「銀時の、友達になってあげてください」

二人はそれを聞き、大きく頷いた。

「あじがやいじちごも」

あれから十分と立たない間に生徒は皆、この部屋に集まり行儀良く机についていた。

松陽は皆がきちんと揃っているかを確認し、「それでは」と始める。

「今日は授業を始める前に、新しくここに通う事になった私の息子を紹介したいと思います」

ザワザワザワ・・・

教室は小さくどよめきが生じる。

「先生に奥さんなんかいたか？」

「いや、先生なんでかモテるくせに嫁を娶ろうなんて考えてないぜ」

「先生はそこらの女より美形で何でもできるから、奥さんできたら直ぐ別れるだろ・・・」

嫉妬とかが原因で」

「先生「エス」ってやつだから奥さんできたら引くだろ・・・」

「じゃあなんだ？」

「養子ってことじゃないか？」

「養子？なんでまた・・・」

そんな声が教室のあちらこちらから聞こえてくる。

松陽は生徒のそんな声を聞き軽く眉をひく付かせながら襖を開け隣の部屋に向かって声を掛ける。

「銀時。来て下さい」

しばらくして隣の部屋からゴチンッ！と大きな音が上がった。

その数秒後、隣の襖が開く音がした。





「クウー」

五分以上何もしないと、自然と睡魔が襲ってきた。

銀時はその睡魔に逆らおうとする事なく、そのまま<sup>まぶた</sup>瞼を下ろす。

「と・・き。く・・だ・い  
「

（な、んだ？）

意識がフワフワしている。

そんな状態の中、首を回して辺りを確認しようとした。

が、それより先に壁に預けていた体がずり落ちた。

ゴチンッ！

大きな音を立てて己の頭と壁が勢い良く目覚めの挨拶を交わした。

（・・・・・・・・ツ！？）

寝ぼけていた頭が一気にハッキリとする。

（痛つてえ〜）

頭をさすりながら先程松陽に呼ばれた事を思い出す。

( ああ、そうだった・・・ )

大きなたんこぶをこさえた頭を押さえながらその部屋を後にする。

教室に入ってきたのは、その綺麗な銀髪にこれまた見事に綺麗なたんこぶを作っている子供だった。

先程の音は頭を壁にぶつけた音なのだろう。

だが傍目には良く分からない、上から見たら分かる程度だ。

そう、松陽だけがその事実気が付いた。

おおかたとなり  
大方隣の部屋で眠っていた時にでも頭をぶつけたのだろう。

だが先程の壁との朝の挨拶のお蔭かげで目が覚めたのか、初めて会ったときと変わらぬ態度を銀時は取っていた。

「あ……………」

教室の何処からそんな声が上がったのか。



「・・・鬼」

生徒の一人が思わず口にしてしまった。

「・・・はい」

銀時に緑色の本を渡して言う。

「この子が私の息子、銀時です」

松陽は先程の声が聞こえなかったかのように振舞った。

「銀時、挨拶を」

松陽に促され、洪々名を名乗る一人の少年。

「えーと、坂田銀時。よろしく」

左手には刀を持ち、もう一方の空いた手では頭を押さえながら短く挨拶をする。

先程の言葉が聞こえなかったのだろうか。いや、もう慣れて気にするほどの事でもないのだろうか。

「では、そろそろ授業の方に移りましょうか。銀時は後ろの席に座っててください」

教室の重たい空気を追い払うためか、松陽が何時もより少し楽しげな声を出して次に進もうとした。

銀時は松陽に言われたとおり後ろに向かう。

が、松陽の指定した席には先程手渡された緑色の教本だけを置き、後ろの壁、それも窓の近くに腰を掛けて大きなあくびをする。

そして先ほども寝ていたというのに、そこに心地よく照っている太陽の光の所為か、また眠り始めてしまった。

そんな様子の銀時を桂と高杉は見ていたが、あまりに緊張感もないその態度に呆れ、松陽の授業に集中しようとする。

「今日の授業は、遺伝子についてです」

「遺伝子？」教室にいる生徒の殆どがそれって何だ？と言うような顔をしている。

松陽はそんな生徒の反応に何を思うわけでもなく、そのまま話を続ける。

「人には遺伝子と言うものが体の中に存在します。この遺伝子は、人の姿形・声・人間の全ての元になっているのです」

ゆっくりと机の間を歩き始める松陽。

まるで、生徒一人一人の姿を見て愛でているかのように。

「ですがこの遺伝子と言うものは、一人一人が少しずつ違ったものなのです。

そのため、家系によって特徴が現れたり、覚醒遺伝によって姿形が少し変わってしまったりしてしまう人もいます」

教室にいた生徒達が息を呑む音が聞こえる。



松陽は伝えなかったのだ。

銀時は我々と同じ人間である事を、我々と同じ、意思を持つ人であるという事を……

「あの吉田さんという人は、万事屋の為に今日この授業をして  
くれるんだな」

銀時の隣にどっかりと座り込んで授業を観察していた近藤が口を挟んだ。

対して神楽は銀時の寝顔をまじまじと観察していた。

「松陽って人は好きアルけど、何言ってるんだかさっぱりネ。  
新八、あの人は一体何を言ってるアルか？  
三文字以内に説明するヨロシ！」

神楽の様子をジーンと見る新八<sup>シメツ</sup>。

「………できるかあああああああ！三文字って何！？  
ツッコミすらまともにできねえよ！てかはなから聞く気ねえーじ  
やねえか！」

さすがはツッコミ役、そのツッコミはもはや完璧とまでいえるので  
はなかるつか。

「うっさいダメガネが。  
少し黙ってるヨロシ。」

松陽先生の声が聞こえないネ」

その言葉に青筋が浮かび上がった新八君。

「神楽ちゃんが話し振ってきたんだろー！」

神楽は一瞬だけ新八を横目で捉え、大きくため息をついた。

「幻聴でも聞こえたアルか？これだからアイドルオタクは・・・」

手を顔の横にまで上げ、顔を横にブンブン振りながら精一杯の哀れみを込めた声で新八に喧嘩を売る神楽。

おおかた授業にでも飽きたのだろう。

その為神楽の遊び道具として目を付けられたのが新ぱっつあんなのだ。

なんとも気の毒な・・・

だがそんな事は切れてしまった新八の頭では考えられない。

まともな判断が出来ないのだ。

「アイドルオタクなめんなあ！」

そんな騒がしい喧嘩が始まっている事に興味を示さない土方・沖田・山崎。

いつもならここで沖田が割り込んできてさらに大事おおいでになる所だが・

これ幸い、沖田は例によって例のアイマスクをその綺麗な両目にかぶせそこで横になっている。

つまりは銀時と仲良くお昼寝中だ。

土方と山崎は一生懸命松陽の話に入れ込んでいる。

山崎はメモまで取っている始末だ。

もちろんそんな事が教室の後ろで起きている事など知らない松陽の授業は、さらに深く濃く、より正格に、この遺伝子と言うものについて教えた。

丁度遺伝子の<sup>ちよつといでんし</sup>大まかな説明が終わった時、時計が大きな音を立てる。



ゴ  
ン  
ゴ  
ン  
ゴ  
ン  
ゴ  
ン

松陽は開いていた教科書を閉じて小さくため息を漏らした。

「今日はこれで授業はおしまいです。また次の日にお会いしましょう」

「はい」

生徒が急ぎ足で家に帰って行く。

今日は珍しく午前中切り上げなのだ。

少しでも早く帰って昼食を取りたいのだろう。

生徒を見送った後、先程まで授業をしていた教室に戻る。

「銀時は良く眠る子のようですね」

軽く薄笑いを浮かべる松陽。

そんな松陽の姿を見ている者は、誰一人として存在しない。

「銀時！。おい」

教室に残っている小さな三つの影。

桂が耳元で大声を出してみるが起きる気配がない。

後ろを振り返り高杉にバトンタッチ。

ゴキゴキッ！

拳を大きく鳴らす高杉。

その拳に己の吐息を吐き掛ける。

体の動きを止め、銀時の頭の上で硬くグーを作る。

そして！

「わっ!?!」

足を踏み込みその拳が銀時の頭の上に落下すると思った桂は、突然の事に思わず目を瞑る。

ゆっくりと目を開けた目の前には、顔面と壁で大きくハグをしている高杉と、それをバカでも見るような目で眺めている銀時の姿があった。



高杉の足元を見ると、銀時が腕に抱え込んで寝ていたあの刀がある。

高杉はこれに引っかけり壁と激突してしまったのだ。

ただ一つ問題なのは、高杉がこけてしまったのはただのドジではなく、銀時が起こした必然的出来事であるという事。

顔をさすりながら銀時をにらめつける高杉。

「てんめえ、起きてやがんなら起きてるって……言いやがれ！」

高杉の怒り爆発。

まあ無理もないだろう。

だが、銀時はその事に全く動じていない。

「いや、普通あんなだけ殺気垂れ流してたら起きるだろ」

その言葉にぐっ体をのけぞらせる高杉。

とても今の高杉と同一人物とは思えない素直な反応である。

「あら、小太郎に晋助。まだ母屋おみやの方に移動してなかったんですか？」

タイミングの良いところで松陽が教室に入ってきた。

どうやら生徒を見送り終わったらしい。

「松陽先生！コイツが！」

鼻を押さえながら銀時を勢いよく指差す高杉。

鼻血は出ていないようだが顔が真っ赤になっている。

松陽はそんな高杉の動作と、銀時が先程の授業の時と同じように、壁に背を預けながら軽く高杉を横目で見ている光景を目にし、今現在この場で一体何があったのかを悟る。

だがそれが事実なのかはハッキリしない為、小太郎に目を向け確認を取る松陽。

「小太郎。先に手を出そうとしたのはどちらなんですか？」

小太郎は自分に問いかけられるとは思っていなかった為、「え……？」という声を漏らし、果たして本当の事を言ってしまったかもしれないのだろうかと不安になり、高杉に顔を向けた。

が………やっぱり松陽先生には嘘は通じないと解ったのか、  
すぐさま顔を上にあげ、松陽の顔を見て静かにありのままを松陽に  
教えた。

「寝ている銀時に手を上げようとしていた所を銀時が迎え撃って  
いたので、

結果、先に手を上げてしまったのは銀時ですが、実質的に手を出  
そうとしていたのは高杉の方です」

高杉は小太郎の言葉を聞き、「裏切りやがったな……!」という顔をした。

その身体は小刻みに震えて、先程の怒りを今度は小太郎にぶつけようとしているようだ。

銀時はそんな様子を眺めていたが、自分には無関係だとも思っているのだろう。

また、深い眠りに付こうとしていた。



「晋助、とりあえず銀時を起こしてください。早く昼食をすまして  
しまいましょう」

松陽先生が自分に話しかけてきたことに思わず肩を震わせた高杉だ  
ったが、その声は先程聞いた事を怒っている声ではなかった。

高杉はその事に安心と疑問を抱き、松陽先生に言われたとおりまた寝かけている銀時を揺すり起こす。

「どんだけ寝る気なんだよ！起きろ！」

耳元で大声を出された為、銀時は渋々身体を壁から離し起き上がる。

それを見届けた松陽はこの場にいる小太郎・晋助・銀時に「昼食の用意をしているので母屋でゆつくりして待っていてください」とだけ伝え、その場から姿を消した。



昔を思い出してみると子供の頃の自分って何か恥ずかしい(後書き)

教えて！

銀八先生ー！

〈基礎知識篇〉

「はい、ちゅうもく。」

次回からは『必殺科学反応式』の覚え方を教えると前回大宣言しちゃったと思うけど、この小説読んでいる大半の人は「科学反応式って何？」てな状態だと俺は思う。

なんでまずは、『科学反応式』が何なのか教えたいと思います。因みに作者曰く、自分の教える『科学反応式』は『イオン式』の事だそうだー」

「えっ！あの予告本当だったんですか！？」

「たりめえーだろーが。」

銀八先生今まで嘘言った事あったか？」

「確か本編の方ではもう数え切れなくてくらい嘘ついてると思いますけどね……」

「本編とかさり気言ってんじゃねえー

次ぎ言ったら廊下に立たせっぞー？」

「はーい！すいませんっしたアアアア！！」

「解りや良いんだよ解りやー。てか思っただけどさあ？」

何で現国担当のこの俺が科学の分野である『化学反応式』なんて教えなきゃなんない訳？

こんなんは源外のジジイの仕事だろうがよー」

「せんせーい。話がずれてきてまーす」

「じゃあ愚痴もここまでにして『科学反応式』の説明初めっぞ？」

《はーい》

「まずテメエーらあ！」

一つ確認取るが『原子』って知ってつか？」

「知りませーん!！」

「はい、元気の良い情けない返事ありがとー。

じゃあ『原子』からの説明から始めるぞ。

てかお前等よくそれでこの高校受かったなあ（感）

まあそんなことはどうでもいいや。

まず『原子』ってのはな？

空気とか水とか鉄の元となっている『分子』ってのを、

限界まで分解したものの事を示すんだ。

無論！

地球にあるモノ全てはこの『原子』の集合体のこの『分子』によ

って形作られている訳だから、俺達人間も元をただせばこの『原子』

って事だー」

「『分解』って何なんですかい？」

「まったく、どんだけ馬鹿なんだよ・・・」

「ハアアアア」

「ああもう分かったよっ！」

「俺がちゃんと説明すつからよく聞いとけおめえらあ！」

《はい》

「まず『分子』ってのをバカツプルの代名詞だと思えば良い。

代名詞って難しいこと言っつけど・・・つまり！

この『分子』をバカツプルと思込込めつて事だあ！

そしてえ！

「なんかバカツプルって見てるだけで腹立つだろ？」

「だからそのバカツプルの仲を引き裂くんだよ。」

「その行為の事を『分解』と理解すりゃあ良い。」

「そんでっ、別れた一人者のモノを『原子』と言つ。」

「理解したかあ？」

「はい！ちゃんと理解できましたあー」

「つまり銀ちゃんは恋人すら出来ない『原子』以下の存在って事アルな！！」

「違いーよ？」

「確かに銀さん恋人できねえけど今はそんな話してねえから」

「えー！違つたんですか！？」

「いや、確かに事実かもしんないけど違いーから！

「てかお前その頭の物はぜー！」

なんか見てるだけで腹立つわ」

「先生！また話がずれてきてきているうえにこれはヅラじゃありません！地毛です！！」

「もうてめえーらいらん事はしゃべるなあ。

俺がせっかく真面目に授業してんだからおめえーらも真面目に俺の話し聞いてろ」

《……………はーい》

「じゃっ、次の説明は『化学式』についてだ。

さっき説明した『原子』ってのはもう覚えてたよな？

覚えてないんなら自分で考えろ！。

んで、この『原子』ってのには一つ一つ決められたマークがある。

例えばH（水素）やO（酸素）

これらの物を『元素記号』と言う。

因みにちひなこの分子はH<sub>2</sub>、O<sub>2</sub>って表される。（この2つてのは小さく表記する。パソコンではそれが出来ないためご了承下さい）んで、これがまたくっつく。

例えばH<sub>2</sub>O（水）みたいにな。

こっやって『分子』同士がくっ付いたものを表すのが『化学式』だ。

「ここまでOK!？」

《NO……………!!!!!!!!!!》

「今NOって言った奴は無理やりにもその空っぽの頭に詰め込めるー」



《ええーーーーー》

「ブーイングの一切は認めませんのであしからず。

では最後にここ重要『科学反応式』!!  
直ぐ終わるからちやんと覚えるよ?」

《……………》

「では……………」

化学反応を化学式で表したものの、これが『科学反応式』」

《……………》

「以上!」

「……………つちよ!

先生 たったそれだけでですか!?

もうちよつと解りやすく教えてください!

ていうか『化学反応』ってなんですか!?

僕達『化学反応』の説明なんか聞いていません!!」

「お前等忘れたのか?

ここの作者は「大」が付くほどの大馬鹿者なんだよ、頭わりいんだよ。

そんな作者がここまで頑張っただけで十分だろ。  
むしろ褒め称えるべきだろー?

てか説明するのがだりいんだよ……………俺が。

だからあと解んなかったところは各自予習復習かくじよしゅうふくしゅうしておく事!

『イオン式』の事もめんどいんで説明しねえから予習しとけよ?

……………ああ一つ忘れてたわ。

『科学反応式』の例一つ出しとこつと思つてたんだわ。  
んじゃそついつことぞ、 が『科学反応式』の一つの例だー」



(皆小さい数字です。)

「軽く説明すつとだなあ。

H<sub>2</sub> (水素分子) 君とO<sub>2</sub> (酸素分子) ちゃんがくつ付いた H  
2O (水の化学式) というカップル完成だー。

このくだらないくだりを『科学反応式』と言つ。

これで今日説明するとはしめえーだ」

「きりーつ れーい チャック！」

「うーん、やっぱいまいちだなあ。

うし、次は×××でいってみよー」

「またかアアアアアアアアア!!!!!!」

なにぶん頭の私が書いたものゆえ、間違っている部分などがあると  
思います。

もしその場合はご指摘くださるか、

もしくはそのままスルーしてこの会話だけを楽しんでいただけたら

と思います。

普段うるさい奴が急にシリアスになるとなんか必要以上に緊張する（前書き）

もうなんだかんだで後がきグダグダです。

自分で理解するのは簡単だったけど、それを説明するのが・・・

多分理解してもらえないんじゃないのかな？

（何故にハ テ ごと の西 歩風？）

普段うるさい奴が急にシリアスになるとなんか必要以上に緊張する

授業が終わって母屋に移動して来た子供三人と、その三人には姿が見えない六人。

.....

(静かだ.....)

新八は顔にあぶら汗を大量に垂れ流しながら、その顔を擡<sup>しか</sup>めて心の中  
で呟いた。

その時、新八の眼鏡には微かに輝<sup>ひび</sup>が入った様な音がした。

昼食ちゆうしょくでは肉じゃがとひじき、それに白飯という献立が出てきた。

俺達は特に何かしゃべる事も無くさつと食事を終えてしまった。

銀時は何故なのかは分からないが箸が上手く使えない様で、  
昼食はお皿を傾けて口の中に流し入れると言う様な食べ方をしてい

た。

俺はそれが腑ふに落ちなくて何の気もなしに声をかけた。

だって六つにもなるのに箸をまともにもつ事すら出来ないのはおかしい事だろう？

確かに上手く使えない奴はいるかもしれないが、きちんともつことすら出来ないのは……

誰でも疑問に思うものではないか。



「なあ銀時。お前どうして箸をまともにもてないんだ？  
もしかして今まで使った事がないなんて言わないよな？」

俺と同じで既に<sup>すで</sup>に昼食を食べ終えていた高杉もそれが気になっていた  
のか、  
俺と同じように銀時を見つめる。

銀時は一人まだ食事を続けていたが、一瞬その腕を止めて俺達の方を見て言った。

「そのもしかしてだけど？」

何か可笑しいか？とでも言いたそうな言い方だった。

内容が内容な為に口喧嘩にはならなかったが、何時もの高杉なら今の言い方にキレてとつくの前に口喧嘩になっている所だ・・・

銀時が言葉を返してまたすぐに食事を続ける。

お皿を左手で口を持って行き、その中の物をもう片方の空いている右手でトントンと叩いては口の中に流し込んでいる。

銀時自身は興味が無いから気付かないフリをしているのかもしれないが、  
たった今銀時が発した言葉で今この場はなんとも言えない緊張の糸  
が張ってしまった。

俺は銀時の言葉を聞いて瞬まはたきを繰り返し、「えっ？」という顔を  
してしまった。

俺の隣に座っている高杉は俺とは逆に、瞬まはたきをするのを忘れて銀時  
の言葉のおかしさに「何言ってんだコイツは……」という表情を  
浮かべている。

ゴク

ト  
ン  
ト  
ン  
ト  
ン

ゴク

ト  
ン  
ト  
ン  
ト  
ン

銀時が食事を続ける音だけがこの部屋に厭いやに響き渡る。

「どづしたんですか二人とも」

あまりの驚きに松陽先生がこの部屋に帰って来た事に気が付かなかった。

松陽先生の声を聞いてその事に気が付いた俺。

たぶん高杉もだろう。

銀時は気付いていたんだろうが、何の反応も示しめそうとしない。

「……………先生。銀時って今まで何処に居たんだ？」

高杉が先程の事を疑問に思ったんだろう、松陽先生に様子を伺うように質問をする。

松陽先生はそれを聞いて何時ものような穏やかな笑顔ではなく、どこことなく寂しげな雰囲気かもを笑顔に醸し出した。



そして入り口<sup>ぐちあた</sup>辺りで止めていたその足を前に踏み出して銀時の傍ま  
で歩いていった。

銀時の隣まで行って松陽先生は静かに席<sup>せき</sup>に着く。

(ん？なんで俺の横に来んだよ)

何故か周りが変な空気になったが、そんなこと自分には関係ないと思っ  
て食事が続けていた銀時は、  
この部屋に戻ってきた松陽が自分の隣に座った事に疑問の声を上げた。

「なんで俺の隣に座るんだ？」

松陽は銀時の言葉を聞き、初めて出会った時に見せたあの真剣な顔を  
して銀時に”ある事の”確認を取る。

「銀時、二人にあなたの事を教えても良いですか？」

そう・・・

今松陽・銀時の向かい側に座っている二人の、銀時に対しての疑念を感じ取り、

松陽は銀時の過去を二人に話してしまおうと思ったのだ。

（あれ、俺の言葉ガン無視？）

銀時は質問した筈の言葉がなかったようにあしらわれた事に軽く疑問を抱く。

だが、すぐに松陽の確認に対してまるで他人事の様に戻事を返した。

「良いんじゃないねーの？その代わり、こいつ等がどんな反応とって  
知らねえぞ……？」

頭を軽く傾けて挑発でもしてるかのように言う銀時。

松陽はそんな銀時の様子を見て少し安心した。

本当は、松陽は不安に思っていたのだ

もしかして自分のこの言葉で自分が名づけたこの子供、

銀時を傷つけてしまうのではないだろうか……

もしまたこの子を傷つけてしまったなら、

この子は昨日のように戻ってしまうのではないだろうか・・・

自分の身を守るためだけに心を閉ざしていた昨日のように・・・



今日半日だけで銀時は随分表情が豊かになった。

松陽に会う前まではたとえ心でどんな事を思っているにしても顔には出さなかつた。

だが、昨日松陽に出会ってから銀時はほんの少しだけ表情が豊かになったのだ。

それも本当にほんの少しだが、顔に緊張が見えなくなっている。

確かに少し見ただけでは全く表情が換わっていないように見えるかもしれない。

けれど、松陽にはそのほんの僅わずかな表情の違いが解った。

銀時は松陽に出会って心が少しだけ救われた。

そのため自分でも自覚はしていないが顔のこわばりが消えていたのだ。

松陽はそれが不安だったのだ。

自分に出会って少しでも心を開いてくれた子の小さな子供。

その子供をもし……

もし自分が傷つけてしまったら、と。

そんな松陽の心の内など銀時は当然知りはないだろう。

それでも、銀時のあの言葉で松陽は安心した。

その顔に小さな笑みをつくり、今度は松陽自身が銀時の真似でもするかのようには小首をかしげ銀時に言った。

「そうですね・・・」

もしよろしければ私も銀時の事は良く知りません。

今までどついつ風生きてきたか教えてはくれませんか？」

まるでその言葉は対等な大人相手に接する時の様な言い方だった。

これは、別に相手が銀時だからでもなんでもない。

ただこれが、松陽という人間の人に対しての接し方なのだ・・・

しばらく沈黙が続く。



また、緊張の糸がこの部屋に張り巡らされる。

ピキッ

この世界には存在していないはずのものに輝ひびが入ったかのような音がこの部屋に響き渡った。

（銀さん。何で早く切り出さないんですか・・・！）

この沈黙に耐えかねた新八が思わず心の中で静かにツツコミを入れた。

もちろんそんな簡単に話せるような内容ではない。

本来なら決して言いたくないような内容であろう。

だが、銀時は別にそれを別に苦痛に思っているわけでない。

だからこそ、新八は早くこの沈黙を破ってほしかったのだ。

銀時を見つめるあの二人の表情がだんだん厳しくなっていく。

そんな風に睨まれる様な事を銀時は進んでやった事などなかったのに。

そんな目で銀時を見ていてほしくなかったのだ。

新八の心から願いが銀時に届いたのか、銀時はしばらく時間を空けてから小さく頷いた。

「……かたじけなく」

そんな銀時の何かを思い出そうとしているかのような声は、その部  
屋に吸い込まれるかのように響き渡った……





普段うるさい奴が急にシリアスになるとなんか必要以上に緊張する（後書き）

教えて！

銀八先生！

（イオン式の覚え方篇）

「はい。」

またつまらないコーナーが始まりますよ〜」

「せんせーい。ジャンプを読みながらの特別授業はないと思いま〜す」

パタ

「あ〜あ。せつかく良いとこだったのに邪魔すんなよこの腐れ眼鏡」

「ちよつと！いくらなんでも言いすぎでしょそれは！

僕は何一つ悪い事は言ってますんよ！！」

「お前一体何を基準に良い事悪い事の境界線つくってるわけ？

そんなん意味ねえんだよ。この世は自分のルールデメエーで動いてんだよ。だから俺は自分のルールデメエーにしたがって生きる。

てなことだからジャンプの邪魔をしたお前は廊下に立ってなさい

「！

「……いい加減にしてください。

もう早くイオン式の覚え方教えてくださいよ先生！



「茶化さないください」

「はいはい。ではここポイント！」

さつき土方が言った通り今日重要なのはイオンってやつとこの水素イオンだー

みんなは『マイナスイオン』とか『プラスイオン』って聞いたことがあるだろ？

今回はそれ重要。

てか明日で最後になるだろうイオン式教えるコーナー、イオンって書いてる時点で気付いてたとは思うがこの『イオン』ってのを忘れるなよー

まあそんなこといてもやることは簡単だから安心しろ」

「先生の安心しろは一番安心なりませーん」

「うるさいぞ神楽。」

次なんか俺に対する文句言ったら絶対廊下に立たすぞー？」

「はい、一応気を付けときまーす」

「なーんか上から目線なのが気になるがまあ良い。」

まずは？の覚え方から教えっぞー

？のイオン式はこうなる

？  $\text{HCl}$        $\text{H}^{+}$        $+$        $\text{Cl}^{-}$

(かっこをつけている部分はイオン式にとって一番重要な部分です。パソコンでは表示できないためにかっこを使ってはいますが実際は文字の右上に小さく表記します)

良いかー？

これはまだ数字が付いてない一番簡単な奴だから良く覚えとけ。  
覚え方はこうだ。

? H C 1      H ( + )      +      C 1 ( - )

土方はクール      土方自身は得をする      +      だが、土方なんかにくつついてしまっているクールという性格が可哀想だなあ、土方の所為でクールという魅力自体は半減してしまう。

この覚え方だ。

覚えたかー？」

《せんせーい！

ものごつつ覚えにくい事山の如しです！》

「んな事言われても実際この作者はこれで覚えたから我慢しろ」

「せんせーい。なんか俺スツゴイ言われようだと思っんですが・・・

」

「仕方ねえーだろ？」

作者が銀魂関係だったら簡単に覚えられるつつって無理やり編み出したやり方なんだから。

困難ただの語呂合わせ見たいなもんなんだよ。

細かいこと気にすんな」

「・・・・・・・・納得できませんが解りました」

「素直でよろしー

んじゃ次！

? H 2 S 4      2 H ( + )      +      S 4 ( 2 - )

(この場合、英語の左側、つまり最初についている物は通常サイズ、右側についている物は英語の右下に書くミニサイズ。かつこの中に入れていた物は英語の右上見に表示です。解らなかつたら母親に聞くなり調べるなりしていただけると幸いです)

覚え方はこう。

? H 2 S 4 2 H (+) + S 4 (2 -)

土方君が2の戦闘力を持つのに対して総一郎君は4の戦闘力を持つ  
2の利益を得る土方君 + 総一郎君は4の戦闘力を持つ  
っているのに - 2の仕事を手をサボる・・・よって利益は生まれない!

な、簡単だろ?」

「先生、総一郎じゃなくて総悟でさあ」

「そんなどつちでも良いだろ? 語呂は合ってたから気にすんな」

「いや、気にします」

「まあそんな細かい事は無視して次々!

うし、これで今日の授業終わりだな。

ささつと終わらずぞ、ささつと。

? H N 3 H (+) + N 3 (-)

貧弱多串君

土方は強い + が、このN が付く事によ

って強い土方君は貧弱な多串君に変化してしまう。そのN の恐ろしさたるや! 地面に頭を三回叩きつけて土下座して許しを請うぐらい!

まあこんなとこぐらいだ。

しかもほんとうちの作者はこんな出鱈目な物でテスト合格した

なあ

しかも最後のは多串君じゃなくてヘタレのトッシーじゃねえか。

」

《先生。もうグダグダなんでさっさと終わらせてください》

「クラスみんなから言われたら嫌と言えねーだろ？」

はい、今日はなんだかんだでグダグダで幕とじっぞー。

因みにこのコーナー最後の次回もなんやかんやでグダグダで終わると思うからそこそこ、よ・ろ・し・くー！」

「よろしくジャック！」

「やっぱりレミヨォーだな。」

今回は普通に終わるか・・・」

「……………もうこのコーナーに期待するの止めよう」

嫌な事とかに限っていつまでも頭に残っている(前書き)

なんか今回の話……

いつ物にもましてグダグダって言うか変？

誰かこういう風にした方が良いつかって言うアドバイスが合ったら  
教えてください！

連載して間もないですが早速スランプみたいです……

自分の才能の無さが情けない……(グスッ)

嫌な事とかに限っていつまでも頭に残っている

この部屋にはどこからともなく冷たい空気が入り込んでいた。

もともと季節は秋、気温が元から低かったのだから寒いと感じるのは当然。

だが、この冷たい空気とは肉感的なものを意味してはいない。

実際は話の流れが緊張状態に入ってきたというだけだ。

そんな重い空気の中、銀時は食事を続けていた手の動きを止め、軽くこの広い家の大きさに釣り合うだけの高い天井を見つめた。

今まで自分の身に起きてきた事を頭の中で思い浮かべていく。

銀時の様子を伺っていた小太郎・晋助・松陽は中々話を切り出そう



としない銀時に軽く疑問を抱く。

「どこから話そうか……」

どこから話せば良いのか思索する銀時。

銀時が小さく呟いたその言葉は、この妙に静かな部屋の中に消えていく。

銀時はそう呟いてからすぐに己の顔を正面に向け、口を開いた。

「どこから話せば良い……？」

お前等は一体どこまでの事を知りたいんだ……？」

その目は軽く射す様な鋭い目だった。

だが銀時に顔を向けられ問われている小太郎と晋助はその紅い瞳に臆することなく、問われた言葉に対しての自分の意見を述べた。

「両親は・・・どうした」

幸せな家族をきちんと持っている小太郎らしい答・・・

「お前自身が覚えている事全てだ・・・！」

もしかしたら松陽先生に害するかもしれないと疑念を抱き始めた  
晋助らしい答……

一人は銀時の身と、その両親の身の事を案じているかのような心配  
そうな眼。

一人は、まるで銀時の過去を問いただして全てを吐かそうとしている  
かのような険しい眼。

そしてそんな二人の様子を監視しているかのように瞬き一つせず見つめているもう一人の眼。

二人目のその眼の中に見える心中を悟った男は、その事実に対しての悲しみの所為か、瞬き一つしなかったその瞬きを静かに下ろす。

だが、銀時はそんな三人の視線などに気付いていながらも、何事もない様に話を進める。

「……全てか……覚えてる限りの事で良いか……?」

晋助に顔を向け、了解を取る銀時。

晋助は銀時の目を睨むようにして見つめながら頷く。

それを確認して瞳をゆっくりと閉じる。

銀時は自身の隣にいた刀に手をかけそつと抱きかかえる。

すぐ近くに己の身を守る“何か”がないと落ち着かない。

銀時はその不安な気持ちの正体がかめぬまま、己の過去をこの場  
のものに明かそうとする。

呼吸を軽く整え口を開く……

「俺の姿を見てお前等はどう思った？」

人の心内なんて、決して分かる事じゃないが本当は薄気味悪いとも思っただんじゃないか？

少なくとも今まで俺があつた奴等は皆そう思つてた」

皆を試している様な口調で話す銀時。

（口でなら何とでも言える・・・）

どうせ本当の所は鬼とでも思つたんだろつな・・・）

その口元は寂しげに歪んで見える。

笑っているのだ・・・



「何故そんな事が分かると言いたそうだな・・・簡単なことだぜ？」

だつて俺が会つた奴等は皆俺の姿を見ては「鬼」「死ね」「消えろ」と言つてきた。

それに、俺を見る目は人を見るそれじゃなかった・・・」

（なんで、俺を見てそこまで怯えるのか分からない・・・）

銀時は理解できない事に対してさらにその口元の笑みを深くした。

「でも……」

ここまで言って言葉を切った銀時。

その表情は何故か酷く寂しげなものへと変わっていた。

「でも……俺の母さんだけは唯一俺の事を「人」として見てくれてた気がする」

記憶も曖昧あいまい

それでも……

母という存在はどこか特別なもの

銀時の心の中では

母という存在だけが

いつもいつも

心にひっかかっていた。

「言った通り、俺の事を人間扱いしてくれたのは母さんだけだ・・・

父さんは俺の事を「鬼」と言ってた。

そんなある日、母さんは死んだ。

理由なんかは覚えてない・・・

物心付いてすぐあたりだったからな・・・

でも、母さんが生きてたからそれまでは大人しくしてたんだろうな」

銀時はまた微かにほくそ笑む。

「母さんが死んですぐ、俺は父さんに殺されそうになった・・・」

俺はその家を、飛び出した。

けど村の連中も俺を追い出そうとしてた。

俺は終われるようにその村を去った・・・」

軽く開いていた銀時の瞳は、何故か揺らいでいて見えた。

悲しんでいるのだろうか・・・

いや、銀時は感情を捨てた。

悲しいなどとは思っていない・・・

（あの時皆殺してればよかったのにな・・・）



銀時はただこう思ったのだ

あの時村の連中皆を殺していれば・・・

自分はこちらまで命を狙われる事がなかったのではないかと。

もう少し生き易やすかったのではないかと・・・

銀時は自分のその考えの真意に気付かない。



・・・あの日、俺があいつ等を殺してさえいれば

・・・関係のない奴は死なずにすんだかもしれない

・・・なんで、俺なんかの為に、命を落とす必要がある・・・？

少し表情が曇ってしまった銀時。

その事に本人は気が付いていない。

「村を出た俺は、あてどなく大地を彷徨い歩いて戦場に行き着いた」  
銀時の頭の中ではボロボロの身体で大地を無様に歩く自分の姿が思  
い浮かぶ。

「俺はそこにあつた屍の持っている物を剥いで何とか命を繋いでき  
た。

屍の持っている物を剥いでいたのが原因かは知らねえけど、ある  
日から俺は『屍を喰らう鬼』と呼ばれる様になった。

そしていつもの様に屍から物を剥いでた時に、俺の事を狙ってい  
た父さんにまた殺されそうになった。

俺はすぐ近くにあった屍から刀を剥ぎ父さんを殺した・・・」

今日見た夢の映像が頭にフラッシュバックしてくる。

(なんで俺は泣いてたんだ・・・)

夢の中で泣いていた自分に疑問を抱く。

「それからそんなことの繰り返しだ。

そんな時に松陽に拾われた・・・」

短いようで長かった話・・・

長いようで短かった話・・・

銀時は肺に溜まっていた空気を少しずつ吐き出していく。



銀時の今までに付いての説明は全て終わった。

カチツカチツ

妙な静けさの中で、この部屋に響き渡るのは時計の針が時を刻む音。

チュンチュンチュン

バサッ！

障子しょうじに映し出されていた小鳥の影が飛び去って行った。

三人は銀時の姿を見つめ、何を言えばよいのやら分からず言葉に詰まっていた。

思っていたよりも辛く悲しく壮絶な過去……

その全てが目の前にいる小さな子供が体験してきた事だと思つと心が酷く痛む。

一人はそのあまりの境遇シハヘシにただ言葉をなくし・・・

一人はそのあまりの内容に顔を顰しかめ怒りで顔を歪め・・・

最後に銀時を見守るようにその話を聞いていた松陽は、

人間の傲慢さこじまん・・・・・・・・・・

卑劣さひれつ・・・・・・・・・・

醜さみにく・・・・・・・・・・

愚かさおろ・・・・・・・・・・

その全てを改めて思い知り、己の右拳を血が滲み出してしまうのではないかと言うほど強く握り締める。

それからまた数十分の間、その部屋には静寂という名の悪魔が居ついてしまう。

）ちっぱり、話すべきじやなかつた・・・）

心の中で小さく呟いた。

その呟きは思っていた以上に深く、心の中に沈んでいく。

・・・また、失うのか・・・？

心のそこで不安に狩られる銀時。

自分と関った所為せいでまた失ってしまう。

自分を認めてくれそうなの奴が目の前に現れたのに・・・

そのチャンスすら

己の過去が

己自身が邪魔をして

この手から水を握もつとしているかのように握りぬけていってしま  
う。

心が、重くなる・・・

体の中から何か競りあがってくる。

心臓に爪をつきたてられたような感覚が襲う。



頭が・・・痛い・・・

(今までこんな事なかったのに・・・)

・・・嫌だ

……この静けさは嫌だ

銀時は心が押し潰される様な圧迫感に額から冷や汗をたらした。

俺の話聞いていた三人が自分を見ているのが気配で分かる。

温かい

それでいて

どこか冷たいような視線が

(「」の苦しきは・・・なんだ・・・?)

銀時はこの止まった時間のよつな中で、ふと自問自答じもんじたうしてみる。

もちろん自分で解らないものを自分自身問うても答なんか返って来  
る答はすなどない。

何なのか解らないこの苦しさの中で思わず顔を怒りで歪めてしまつ。

何年か振ぶりの怒り

何年か振ぶりの表情

(こんな思いしたことなかったのに……………)

……には……居いたくない……………)

スッ

銀時は何も言わずにその場を立ち上がり、この部屋から、家から出て行くとした・・・







嫌な事とかに限っていつまでも頭に残っている（後書き）

教えて！

銀八先生！

〈イオン式の覚え方篇〉

「とうとうこのどうでも良いコーナーも最終回です。

せめてこの痛いコーナーを生暖かい目で見てください」

「先生、いくらなんでもこのコーナー馬鹿にしすぎだと思えます」

「何良い人ぶってんの新八君？

前回の終わり自分で何言っただか思い出してみろ？」

\*\*\*回想\*\*\*

「……………もうこのコーナーに期待するの止めよう」

\*\*\*回想終\*\*\*

ガクガクガクガク

「ん？何振るいえちやってんの？

お前はあれか？

生まれたての小鹿かなんかですか？」

「いえ、あの……」  
「前回は忘れてください……」

「あゝ無理無理

この後書きちゃんと見てくれる人何人かいるみたいだから  
お前のあのセリフもちゃんと皆様の記憶にメモリーされちゃって  
るって」

「……………」

「なんで顔真つ青になんだよ？  
お前まさかあれか？

この作者の仕返しとか恐れてんのか？」

「だって元々僕この作者に嫌われてるみたいですし……」

「そりやお前……あれだよ？  
きつとお前が新人だからだよ。  
新一にまで上り詰めたらきつと作者も認めてくれるって  
たぶんな」

「たぶんって何なんですか！？  
いくらなんでも僕の扱い雑すぎでしょ……」

「うるさいネジミーツー。  
せんせい！

眼鏡ジミーツーはほっといてさっさとこのくだらないコーナー終  
わらせるアル……」

「ん、わかったー」

これから新八は眼鏡ジミーツーと名前を改名する。  
それじゃあイオン式の覚え方教えっぞ〜」

《はい！！》

「まずは今日教えるイオン式の科学反応式は三つ紹介〜」

？ 水酸化ナトリウム      ナトリウムイオン    +    水酸化物イオン

？ 水酸化カリウム      カリウムイオン    +    水酸化物イオン

？ 水酸化バリウム      バリウムイオン    +    水酸化物イオン」

「今回は水素イオンじゃなくて水酸化物イオンが絶対入ってるな・

」

「何ですか土方さん？

もしかして前みたいに重要そうな事を言って一人だけ目立とうと  
かって思ってるんですかい？

それなら安心してくだせえ、いつも昼食を取る時だけ奇異の目で  
見られてやすから」

「誰もんな事思ってるええよ！！

てかなんだよ奇異の目って！

ありゃあ俺のマヨネーズを物欲しそーに見てる目だろうがあ！！」

「そう思ってるじゃあ一人幸せもんでさあ」

「夜月<sup>やがみ</sup>総一郎君の言うとおりだー

あれは物欲しいそうに見てんじゃなくて「何あれ犬の餌？」「何  
であんなもの食べてるの？」って言うような蔑みの目だー

そこんところ勘違いしないように!」

「先生。総悟でさあ」

「まあくだらないやり取りもここまでにしてまず?から教えていくぞ」



これはだなー

Naをさっちゃんだと思え!」

「何でアルか?」

「なんでってそりゃあさっちゃん=納豆女だからだ」

「納得アル(ウンウン)」

「んで覚え方は、さっちゃんとするむとろくな事に合わない沖田君に土方君。

これだけだ。

厳密に言つとさっちゃんだけは得をするが二人は損をする」

「せんせーい!

猿飛さんが先生にさっちゃんと言われて興奮しちゃってまーす」

「ほとけー。

んじゃあ次?!



これはさっちゃんが神楽に変換しただけだ

によって詳しい説明は無し!」

「はい！意義あり」

「んだよ」

「何で私<sup>が</sup>得<sup>して</sup>る<sup>って</sup>図式<sup>になる</sup>アルか！？」

「そんなん逆アル！」

「私<sup>いつ</sup>も損<sup>ばっ</sup>かり<sup>して</sup>るヨ！」

「それはこっちのセリフでい。

損<sup>なんか</sup>・ど<sup>ころ</sup>か(2・)(3・)こっちは蒙<sup>まう</sup>ってんでい

「お前等<sup>と</sup>にかくとっつき<sup>あ</sup>い<sup>止</sup>めて<sup>席</sup>に着<sup>け</sup>」

「これは語呂<sup>ゴロ</sup>合<sup>あ</sup>わせ<sup>み</sup>たい<sup>な</sup>も<sup>ん</sup>だ<sup>っ</sup>て<sup>前</sup>回<sup>も</sup>言<sup>っ</sup>た<sup>ろ</sup>？」

「だから<sup>これ</sup>で<sup>覚</sup>え<sup>な</sup>さい！」

「……………納<sup>と</sup>得<sup>い</sup>か<sup>な</sup>い<sup>け</sup>ど<sup>仕</sup>方<sup>な</sup>い<sup>ネ</sup>……………」

「それはこっちのセリフでい」

「もうそこ<sup>良</sup>い<sup>か</sup>ら<sup>さ</sup>つ<sup>さ</sup>と<sup>席</sup>に<sup>付</sup>け」

「それ<sup>じゃ</sup>あ<sup>い</sup>よいよ<sup>最</sup>後<sup>の</sup>イ<sup>オ</sup>ン<sup>式</sup>？」

「これは<sup>少</sup>し<sup>や</sup>や<sup>こ</sup>し<sup>ー</sup>か<sup>ら</sup>よ<sup>ー</sup>く<sup>覚</sup>え<sup>と</sup>け

? Ba(OH)<sub>2</sub> Ba<sup>2+</sup> + 2OH<sup>-</sup> )

( ) の<sup>か</sup>っ<sup>こ</sup>は<sup>ち</sup>ゃ<sup>ん</sup>と<sup>し</sup>た<sup>図</sup>式<sup>の</sup>カ<sup>ッ</sup>コ<sup>で</sup>す<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>し<sup>か</sup>

「(はず)

「先生、カッコ<sup>が</sup>あ<sup>り</sup>過<sup>ぎ</sup>て<sup>と</sup>て<sup>も</sup>解<sup>り</sup>に<sup>く</sup>い<sup>で</sup>す」

「これは初めのだけが正式な図式に含まれたカッコだ。その他の物は右上に小さく表すかどうかの区切りみたいなもんだから

間違えないように注意しろー」

《はい》

「んじゃこの覚え方行くぞー

まず一番最初の記号は真選組と一括りひとくくで覚えろ」

「せんせーい！あの最初についているBaとはいったい誰を示しているんですかー？」

「あれはお前だバカゴリラー。

バカ〓ゴリラ！

ほら、ピッタリだろー？」

「アラほんと、ピッタリだわ（驚）」

「お、お妙さんまで・・・」

「まあ本当のバカはほつといて（）2とあつただろ？」

この2は英語の右に付いてるから右下に小さく表記だ。

この2は真選組の戦力だと思えば良いー

沖田君と土方君を2でx（かけた）戦闘力〓真選組！

ここまで付いてこれてるかー？」

《はい、もちろん解りませーん》

「お前等感心するくらいにこういう時って息あうよな・・・」

まあバカはほつとくといたしこれはお前等の為だけの授業じゃないんで

次ぎ行くぞ次ー」

《えー》

「次のBa(2+)ってのはバカが二つほど得をするって意味だ。その次の2OH(-)というのはバカを庇<sup>かば</sup>ったりしたばかりに沖田君と土方君の2人が無駄に損をするという意味だ」

「先生納得いきません！」

俺は二人に損などさせてない！

なあ？トシに総悟」

「……………」

「あれ、なんで二人とも俺から目をそらす」

「すいやせんが否定できません」

「これはさすがの俺でもフォローできねえ」

「……………あれ、おつかしいな」

なんか目の前が霞<sup>かす</sup>んできた……………」

「バカしてないで挨拶しろー」

「きりーつ れーい やつぱりバカ〓ゴリラ〓近藤は正解ネ！」

「なんで号令で俺罵倒されなきゃなんないの!?!」

「んー今のは中々個性的で面白かったから今度から教えて銀八先生  
！の終わりは

個人個人のコメントを最後に言おう！」

《はい！》

「それじゃあー解散！」

「……………あれ、最後の方僕本当にジミじゃん」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3839y/>

---

白銀の生き様

2011年11月27日16時47分発行